

石川県松任市

野 本 遺 跡

県営圃場整備事業御手洗・出城地区浜相
みたらし でじろ はませう
川工区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書



1993

石川県立埋蔵文化財センター

石川県松任市

野 本 遺 跡

県営圃場整備事業御手洗・^{みたらし}出城^{でじろ}地区^{はまそう}浜相
川^ご工区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

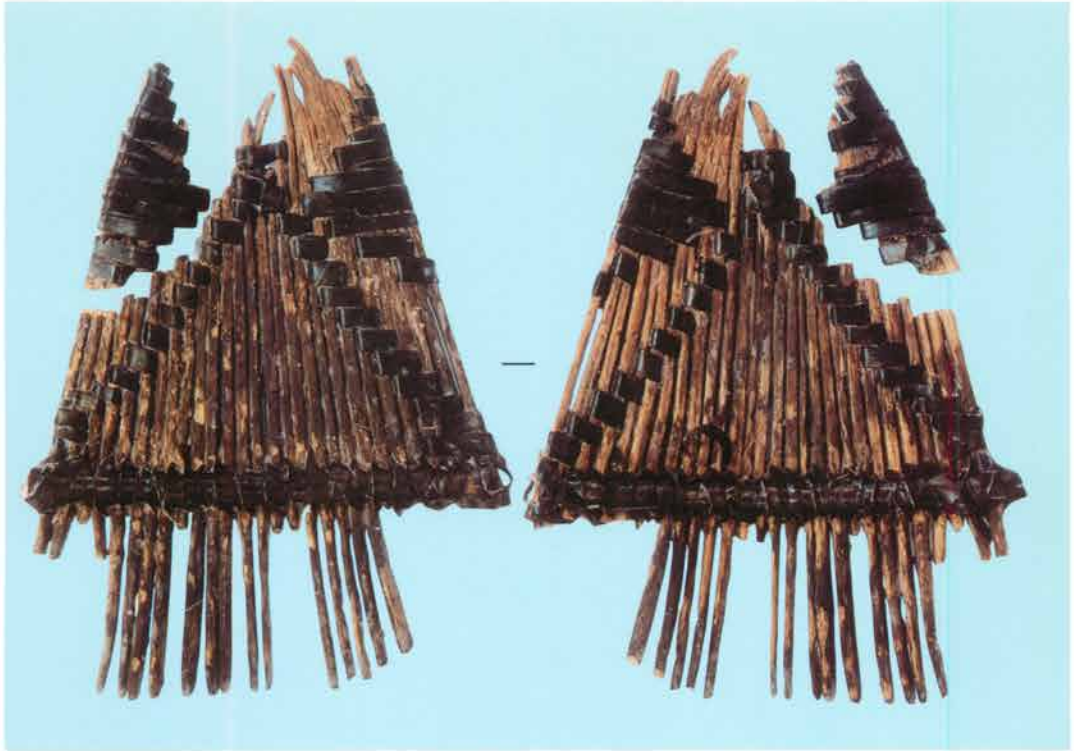
石川県立埋蔵文化財センター



調査区航空写真（西から。3～6トレンチ調査中）



調査区航空写真（東から。1・2トレンチ調査終了のため工事中）



SD24出土櫛（原寸）



野本遺跡圃場整備終了後の様子（東南から。1991年7月3日撮影）

例 言

1. 本書は県営圃場整備事業御手洗・出城地区浜相川工区に係る野本遺跡発掘調査報告書である。調査地は松任市相川町地内に所在する。

2. 調査は県農林水産部耕地整備課（松任土地改良事務所）の依頼により、石川県立埋蔵文化財センターが実施した。費用は同課が負担した他、一部文化庁の補助金による。

3. 発掘調査は1988（昭和63）年9月16日から同年12月22日まで、湯尻修平（当時当センター専門員）、藤田邦夫（当時当センター主事）の指導・協力を受け、鳥越浩（当時当センター主事）、木立雅朗（当時同嘱託）が担当して行った。また、広岡吉紀（当時当センター調査員）、安宅務（当時当センター調査員）、大藤雅男（当センター調査員）が調査を補助した。

発掘調査面積は約1,200㎡であった。

4. 調査に当たっては、県松任土地改良事務所、浜相川工区長野本栄之氏をはじめとする浜相川工区の関係各位よりご協力いただいた。

5. 出土品の整理は、1992（平成3）年度に（株）石川県埋蔵文化財保存協会に委託して行った。整理指導は安英樹（当センター主事）の協力を得て木立が当たり、小屋玲子、馬場正子、正木直子が担当して行った。

6. 報告書の編集は木立が行い、越田純子、池村ひとみ、山本澄美子が補助した。

遺物の写真撮影は端 猛（当センター調査員）が、土器の使用痕の写真撮影は大藤雅男が行った。執筆は木立が行ったが、第7章第1節は北陸学院短期大学助教授 小林正史氏にお願いし、玉稿を賜った。記して感謝の意を表します。

7. 出土品、記録資料などは石川県立埋蔵文化財センターで一括保管している。

8. 遺物整理に先立って取り上げた袋ごとに番号を付け、台帳を作成した。遺物には出土位置・層位の他に、台帳番号も注記した。細片や完形品などの破片については台帳番号のみ注記したものがあ

9. **遺跡の名称** 当遺跡は野本地内に所在するが、圃場整備では浜相川工区に含まれるため、「浜相川遺跡」と呼称し、「浜相川87」もしくは「浜相川第1次調査」と記録した。しかし、その後、浜相川工区での発掘調査が増え、これらも「浜相川遺跡」と呼称したため、『石川県遺跡地図』（1992）の編集に際して「野本遺跡」と改めた。発掘記録や遺物収納箱などの見出しなどは野本遺跡と改めたが、実測図や遺物の注記などはそのままである。

遺構・遺物番号 本書で報告する遺構名・番号は基本的に発掘現場で付けたものを踏襲した。記録や遺物についての注記も同様である。しかし、SX5は発掘現場では「1号住居」と記録していたものを報告に際して他の堅穴住居にあわせてSX番号を与えた。SD24も発掘現場では「SX04」と記録したものに溝の番号を与えた。その他、出土遺物がないために発掘現場で遺構番号を与えなかった遺構でも、報告に際して適宜番号を与えた。

また、遺物整理に際して実測番号を黄色で注記したが、報告書作成に際して報告書番号をすべての遺物にオレンジ色で追加注記した。遺物整理箱にも報告書番号を貼り付けた。加えて、実測図にも報告書番号を黒マジックで併記した。そのため、遺物には黄色とオレンジ色の二つの番号が注記されているが、本書記載の遺物を観察する際にはオレンジ色の番号を、実測図を検索する際には黒マジックの番号を見て頂きたい。

目次

第1章 調査に至る経緯と経過	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経緯	1
第2章 遺跡の環境	
第1節 位置と地形	3
第2節 周辺の遺跡	3
第3章 調査の概要	9
第4章 層位	
第1節 野本遺跡の層位	15
第2節 手取川扇状地の黒色土層について	16
第5章 遺構	
第1節 竪穴住居	18
第2節 土坑	19
第3節 溝	21
第4節 大溝	23
第6章 遺物	
第1節 土器	41
第2節 木器	43
第3節 石器	45
第7章 考察	
第1節 土器の使用痕について	85
第2節 木製櫛の変遷とその意義について	127
第8章 おわりに	143

写真図版

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

松任市浜相川工区内の圃場整備対象地内について、県耕地整備課の依頼を受けて1986（昭和61）年に試掘調査を行った結果、遺跡の所在が確認された。この結果をもとに耕地整備課と協議し、1987（昭和62）年度施行予定地域内に計画されている排水路部分について発掘調査を行うことで合意した。面工事の部分については遺跡が深いため損壊の恐れは少ないが、工事に際して注意を払うことを条件とした。

試掘調査について

試掘調査は人力で行った。試掘穴は上場が約1m四方で、下場は深さによって狭くした。原則として水田一枚につき一つの試掘穴を設けたが、作付けの関係で試掘できない部分もあり、そうした場合は適宜その周辺の試掘穴を増やすなどして対応した。

図1に試掘穴の位置を示した。試掘調査当時は黒色シルト層が遺物包含層であると認識していたため、「包含層」とは黒色シルト層を示している。この結果から、ほぼ全面が遺跡であると判断して協議を行った。しかし、第6章で述べるように、その後の発掘調査によってこの黒色シルト層は必ずしも包含層とは言えず、古代（～中世前期）の自然堆積層であることが確認された。そのため、星印で示した「遺構・遺物が確認された穴」の部分が遺跡の立地を示していると考えてよい。この点については当然のことながら発掘調査でもほぼ追認されている。

『石川県遺跡地図』（1992年改定）では発掘地点以外の「遺構・遺物が確認された穴」については遺跡として記載できなかったが、図3にはそれらの推定範囲も記載した。

また、広域農道以北の部分については試掘調査ができず、1987年の発掘調査と併行して図1のa～d地点の試掘調査を行った。その結果、遺構・遺物は確認されなかった。図2のようにb・c地点は微高地であり、a・d地点は落ち込むことが分かった。特にd地点の落ち込みは著しく、地山（8・9層）を確認できなかった。

第2節 調査経過

①発掘作業

発掘調査は、地元の協力を得て1988（昭和63）年9月16日に開始し、同年12月22日に終了した。調査面積は約1,200㎡（幅約2m、延長約600m）であった。

排水溝部分の発掘であるため、11月から12月にかけての悪天候の中、トレンチが冠水することは度々であった。

また、年度内に工事を完成させるため、地元から「調査を一日も早く終わらせるように」と再三にわたって催促を受けたが、調査が進むに従い遺跡の重要性を理解していただくようになり、調査の後半では「あんたらの気のすむようにいい仕事をしてくれ」と言う言葉すら聞かれるようになった。発掘の後半に差ししかかって重要な遺構が立て続けに確認され、発掘期間も当初予定よ

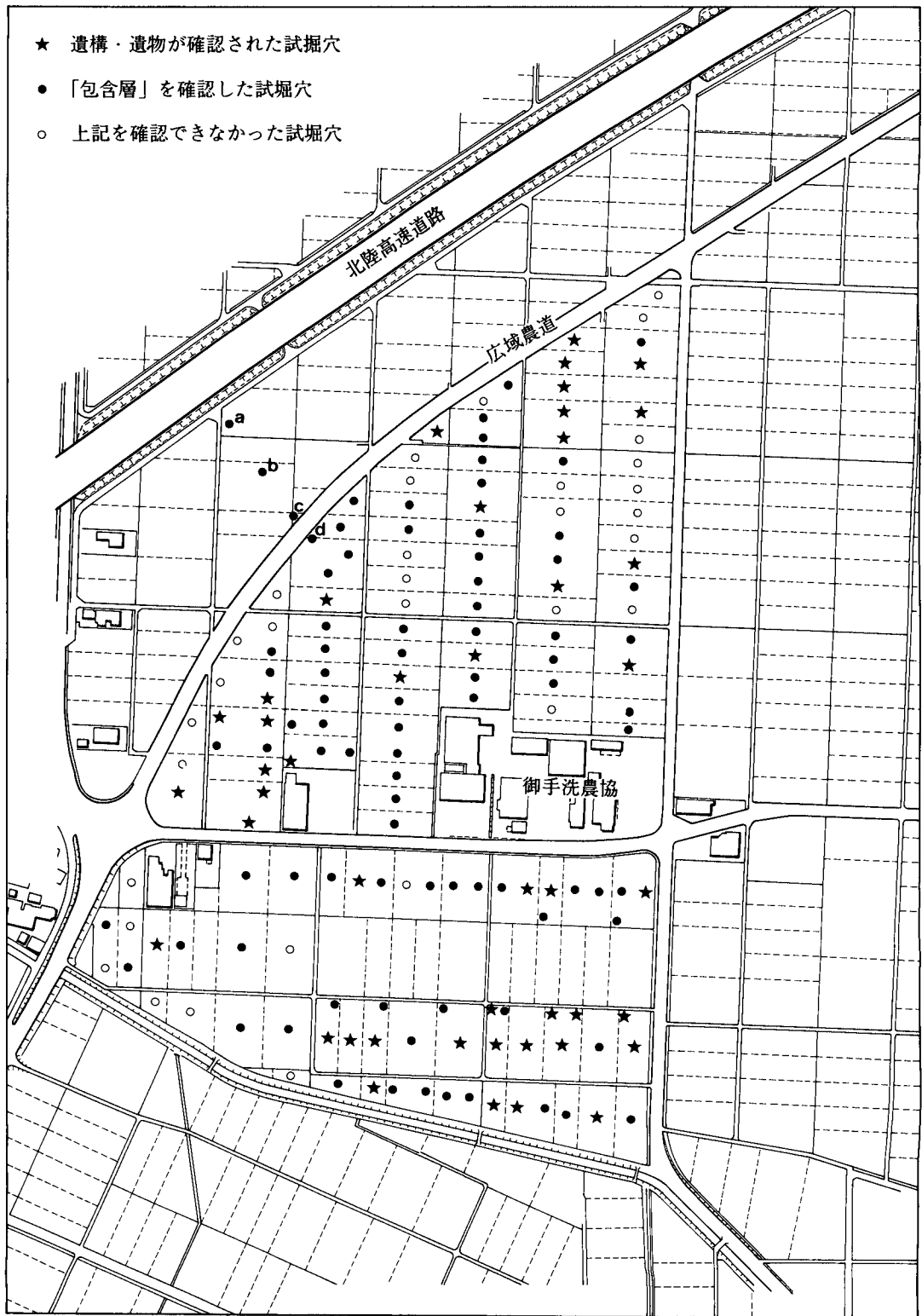


図1 浜相川工区の試掘調査結果 (1987年度調査。S=1/4,000)

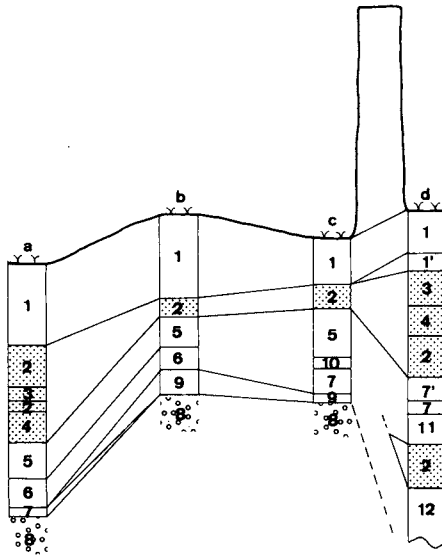


図2 試掘トレンチ略土層図

- (土層名)
- 7.0m**
- 1.黄～灰色中砂（盛土）
 - 2.黒色シルト
 - 3.淡黒色シルト
 - 4.暗灰色シルトまじりの2
 - 5.暗灰色シルトまじり緑灰色シルト
- 6.0m**
6. 〃 （5より暗灰色シルト多い）
 - 7.緑灰色シルト（7'は砂気強い）
 - 8.礫層
 - 9.茶灰色シルト（酸化した7か）
 - 10.小礫まじり灰色砂
- 5.0m**
- 11.青灰色シルト
 - 12.植物センイ含む7

り若干延びたにも係わらず、最後までご協力頂いた。発掘調査の様を伝えていただいた作業員の皆様と、理解頂いた地元の皆様のお蔭であったと思う。ご迷惑をかけたにも係わらず、温かく見守って頂いた浜相川工区長野本栄之氏をはじめとする浜相川・野本の皆様に心から感謝したい。

発掘調査終了後、1989年1月17日には浜相川工区の集会で地元向けに簡単な調査報告を行い、同年1月25日には出土した櫛についての記者発表を行った。

②整理作業

遺物の水洗いは調査年度内に行い、1992年に池村ひとみ、越田純子、山本澄美子が土壌の水洗選別を行い、遺物整理は1992年に鉦石川県埋蔵文化財保存協会に委託して行った。遺物整理は安英樹の援助をうけて木立雅朗が指導し、小屋玲子、馬場正子、正木直子が担当して行った。

③報告書作成作業

1992（平成4）年度に木立雅朗が担当して行った。図版作成などは池村ひとみ、越田純子、山本澄美子、端 猛が補助した。

[発掘調査日誌]

1987（昭和62）年

- 9月16・17日 バック・ホーによる表土の掘削。
 9月21日 レベル移動。部分的に断面精査。
 9月22日 部分的に断面実測。
 10月12日 機材運搬。発掘準備。1トレンチ遺構精査。
 10月13日 1トレンチ遺構精査。（グリッド設定の）杭打ち。
 10月14日 1トレンチ遺構精査。杭打ち。1トレンチ

略測。

- 10月15日 1トレンチ遺構検出状況の写真撮影。同遺構掘り下げ。1トレンチ略測。
 10月16日 1トレンチ遺構掘り下げ。バック・ホーによる表土の掘削（6～7トレンチ）。
 10月21日 1トレンチ遺構掘り下げ。
 10月22日 1トレンチ遺構掘り下げ。1トレンチ平面実測。1号土坑写真撮影。
 10月26日 1トレンチ遺構掘り下げ。1トレンチ平面

実測。6～7トレンチ脇の草刈り。
10月27日 1トレンチ遺構掘り下げ。1トレンチ平面・断面実測。2トレンチ遺構精査。
10月28日 1トレンチ平面・断面実測。2トレンチ遺構精査。2・3トレンチ杭打ち。
10月29日 1トレンチ平面・断面実測。1トレンチ5号溝掘り下げ。2トレンチ遺構精査。
10月30日 1トレンチ断面実測。2トレンチ遺構精査。
11月4日 1・2トレンチの排水。2トレンチ遺構精査。3トレンチ脇排水の片付け。
11月5日 1・2トレンチの排水。
11月6日 1トレンチ排水。2トレンチ遺構掘り下げ。
11月9日 2トレンチ遺構精査・掘り下げ。略測図作成。1トレンチ5号溝平面実測。
11月10日 2トレンチ遺構精査・掘り下げ。
11月11日 2トレンチ遺構掘り下げ。南壁精査。
11月12日 2トレンチ遺構掘り下げ。3トレンチ遺構精査(5・6号土坑検出。土器多量出土)。
11月13日 2・3トレンチ排水。2トレンチ平面実測。2・3トレンチ遺構掘り下げ。
11月16日 2トレンチ掃除。3トレンチ遺構精査、土坑平面断面実測。5トレンチ以北の流れ込んだ泥の除去。
11月17日 2トレンチ断面実測。本日より藤田邦夫氏加わり、4トレンチ遺構検出・掘り下げ。
11月18日 2トレンチ西半遺構掘り下げ。同中央付近写真撮影。4トレンチ写真撮影。5トレンチ遺構検出作業。
11月19日 2トレンチ西半遺構掘り下げ。5トレンチ遺構検出。
11月20日 2トレンチ遺構掘り下げ。2・3トレンチ間拡張・遺構検出。5トレンチ遺構検出・掘り下げ。
11月24日 SX02、SX03掘り下げ。3トレンチ遺構掘り下げ。
11月25日 3トレンチ遺構精査。5トレンチ遺構掘り下げ、写真撮影。6トレンチ遺構精査。
11月26日 SX02、SX03写真撮影。6トレンチ遺構精査。5トレンチ断面撮影。
11月27日 3トレンチ東端平面実測。3トレンチ断ち割り・遺構精査。6トレンチ遺構掘り下げ。
11月30日 3トレンチ壁精査、断面実測。遺構精査、遺構掘り下げ。

12月1日 3トレンチ遺構掘り下げ。7トレンチ遺構精査。
12月2日 2・3トレンチ排水。
12月3日 2・3トレンチ排水。
12月4日 2・3トレンチ排水。6トレンチ平面実測。
12月5日 5トレンチ断面実測。6トレンチ平面実測。8トレンチ遺構精査。
12月7日 6トレンチ平面実測。7トレンチ遺構精査、遺構掘り下げ。8トレンチ遺構精査。
12月8日 3トレンチ断面実測。6トレンチ平面・断面実測。
12月9日 3・6・7トレンチ平面実測。
12月10日 3・7トレンチ遺構掘り下げ。8トレンチ写真撮影。7・8トレンチ杭打ち。
12月11日 3・7トレンチ遺構掘り下げ。同平面実測。
12月14日 3トレンチ遺構掘り下げ。同平面実測。7トレンチ平面実測。
12月15日 3トレンチ遺構掘り下げ。7トレンチ遺構掘り下げ。同平面実測。8トレンチ平面実測。
12月16日 3・7トレンチ平面・断面実測。
12月17日 SD24掘り下げ。7・8トレンチ平面実測。
12月18日 SD24掘り下げ。7・8トレンチ断面実測。機材撤収。
12月19日 3トレンチ平面・断面実測。
12月21日 SD24平面実測。
12月22日 SD24断面実測、土壌サンプリング。現地作業終了。

[発掘調査参加者]

調査指導 湯尻修平、藤田邦夫

調査担当 鳥越浩、木立雅朗。

調査補助 広岡吉紀、安宅務、大藤雅男。

調査作業員 打木喜美江、喜多岡一夫、小西文雄、清水タミ、新宅久江、高村ミヤ子、野本猛、野本栄子、野本喜美子、野本久美子、野本幸子、野本行江、東陽子、平本ちどり、松原正子、松原美智子、宮本直哉、村井静子、山本和子、山静子、山信子。

(木立雅朗)

第2章 遺跡の環境

第1節 位置と地形

野本遺跡は、石川県松任市相川町地内、小字野本、通称ハンノキジャ、コハマに所在する。手取川扇状地の扇端部分にあたり、地表面の標高は7.5m足らずで、海岸線から約500m離れている。現在、水路は旧砂丘部分を切って浜相川方面の海岸に流れている。

7.5mの等高線を追いかけると、現在の徳光の集落がそれ以下の低地になっており、その低地が一部高くなるものの、当遺跡に繋がる。野本遺跡はそうした低地帯の中に位置している。この低地帯の海岸線側は広範囲に小高く成っている。砂丘の末端部分に相当するのだろう。なお、徳光周辺は手取川扇状地の扇端中央部に位置しており、古代には手取川河口があったと言われている。手取川は古代末以後、南遷し続けて現在の流路に至ったと推定されている。

第2節 周辺の遺跡

手取川扇状地の扇端部分には数多くの遺跡が密集している。標高12.5m以下の地帯に特に多く、伏流水の自噴地帯に沿った遺跡分布と考えられる。現在では地下水の汲み上げなどで枯渇しているが、最近まで各地点で認められた。

縄文時代の遺跡は顕著ではない。縄文時代後期の一塚遺跡、後期～晩期の八田中遺跡があげられるが、どれも自噴地帯である。金沢市の古府遺跡（縄文中期）、北塚遺跡（縄文中期～晩期）、新保チカモリ遺跡（縄文晩期）、中屋遺跡（縄文晩期）、米泉遺跡（縄文晩期）、野々市町の御経塚遺跡（縄文後期～晩期）も手取川扇状地の北端部、伏見川扇状地と複合する周辺に集中している。今のところ、手取川扇状地北端部に集中する傾向があり、野本遺跡周辺では活動の痕跡を見いだすににくい。

弥生時代の遺跡は後期に急激に増加するが、前期、中期の遺跡は顕著ではない。前期には八田中遺跡、徳光ジョウガチ遺跡があるが、継続しない。中期では横江A遺跡、徳光ヨノキヤマ遺跡、野本遺跡など、一定の距離をおいて点々と集落が確認できるようになる。こうした中期の遺跡が手取川扇状地の島状地形を利用して、各「島」ごとの拠点となり後期に爆発的な増加をとげたと推定される。この時期の遺跡の増加は扇端部を中心にして手取川扇状地全体に広がっているが、三浦遺跡のように扇端部から離れた部分にも確認されており、自噴地帯のみに遺跡が分布するわけではない。扇央部の開発は困難であると考えられがちだが、扇状地特有の島状地形の鞍部は自噴地帯ほどではないにしろ、比較的開発し易かったのではないだろうか。

古墳時代に入ると遺跡は激減するが、四隅突出墳が確認された旭遺跡群や前方後円墳が確認された御経塚シンデン遺跡では拠点的な集落と墓域がセットで確認されている。これらの遺跡は弥生時代後期の集落が再編・集約されて生き残ったものと推定される。古墳中・後期頃にはさらに集落が減少するようであるが、北陸高速道に沿って若干分布する。中相川では小規模な円墳も確

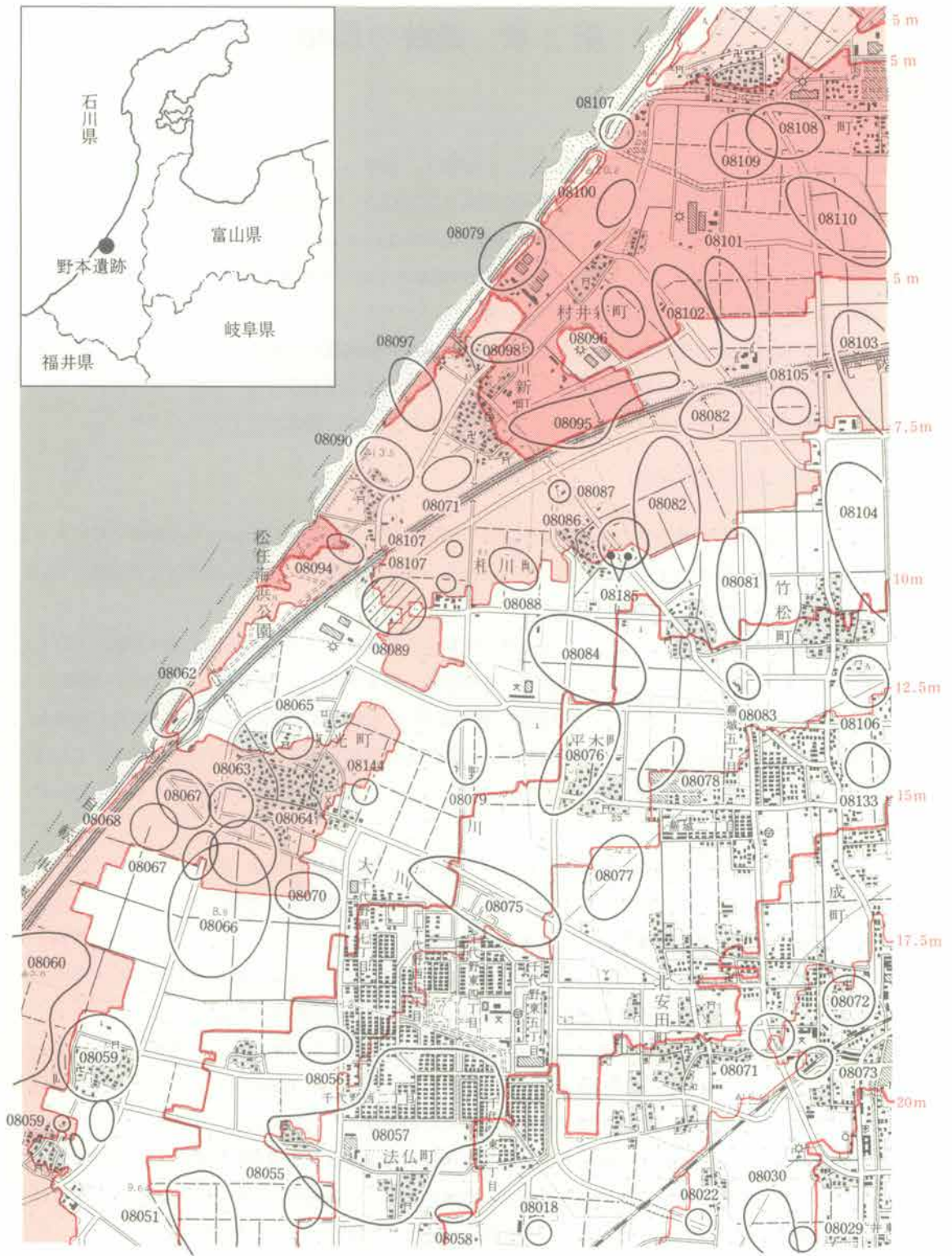


図3 遺跡の位置と周辺の遺跡 (S=1/25000)

表1 遺跡名一覧表

08018	米永シキシロ遺跡	平安	08083	東相川D遺跡	不詳
08022	道村遺跡	弥生～平安	08084	中相川遺跡	弥生
08029	村井キヒダ遺跡	平安・中世	08085	中相川1号墳、2号墳	古墳
08030	中村ゴウテン遺跡	弥生・平安	08086	相川館跡	室町
08051	宮保C遺跡	奈良・中世	08087	御手洗川遺跡	古墳
08055	鶴丸遺跡	不詳	08088	御手洗川B遺跡	弥生
08056	番出・高松遺跡	平安～中世	08089	野本遺跡	弥生
08057	法仏遺跡	弥生～平安	08090	浜相川遺跡	不詳
08058	法仏南遺跡	弥生	08091	浜相川B遺跡	弥生・古墳
08059	小川遺跡	中世	08092	浜相川C遺跡	弥生
08060	小川新遺跡	弥生～奈良・中近世	08093	浜相川D遺跡	弥生後期
08062	徳光遺跡	縄文	08094	浜相川E遺跡	弥生後期
08063	徳光館跡	不詳	08095	相川新遺跡	弥生・古墳・中世
08064	アベノ願証寺跡	不詳	08096	相川新C遺跡	不詳
08065	大和隼人館跡	不詳	08097	浜相川 相川新遺跡	弥生・古墳
08066	徳光聖興寺遺跡	室町	08098	村井新遺跡	弥生・平安
08067	徳光ヨノキヤマ遺跡	弥生・中世	08099	相川新雁田川遺跡	弥生・古墳
08068	徳光B遺跡	不詳	08100	浜竹松遺跡	弥生～奈良・中世
08069	徳光C遺跡	不詳	08101	浜竹松B遺跡	古墳
08070	徳光古屋敷遺跡	古墳	08102	浜竹松C遺跡	古墳
08071	安田三郎惟光館跡	不詳	08103	竹松遺跡	弥生・古墳
08072	出城城跡	室町	08104	竹松C遺跡	弥生後期
08073	成町遺跡	中世	08105	竹松D遺跡	古墳
08075	北安田北遺跡	縄文～平安	08106	竹松E遺跡	弥生・奈良・平安
08076	平木A遺跡	弥生	08107	倉部川遺跡	不詳
08077	平木B遺跡	奈良・平安	08108	倉部出戸遺跡	弥生・古墳
08078	平木C遺跡	不詳	08109	倉部館跡	室町
08079	平木D遺跡	弥生後期	08110	倉部B遺跡	弥生・古墳
08080	東相川遺跡	古墳・中世	08133	下福増遺跡	縄文・弥生・奈良・平安
08081	東相川B遺跡	弥生～平安	08144	徳光ジョウガチ遺跡	弥生
08082	東相川C遺跡	不詳			

認されている。この時期は扇状地北西部ではほとんど遺跡が確認されず、扇状地全体でも遺跡の分布が希薄になる時期である。これに対して現手取川以南の南加賀などでは弥生時代以来の遺跡が存続して発展しており、大きな差がある。

古代の遺跡は7世紀初頭前後から御経塚遺跡周辺、法仏～東相川遺跡周辺、中村遺跡周辺、末松遺跡周辺に一定の距離をおいて集落が営まれるようになり、これらが拠点的な集落となって変遷していく。5・6世紀代の遺跡が標高5～10m前後に集中するのにたいして、古代の遺跡はやや高い10～15m前後に集中する。古代の開発によって集落域が変化したことはほぼ確実であろう。灌漑の整備によるものか、開発の結果引き起こされた環境変化によるものと推定される。

中世になると確認例は少ないものの、増加傾向にあったと推定される。文献史料では各地に寺院や城郭が存在したことが確認されており、野本遺跡周辺でも徳光ショウコウジ遺跡、宮保遺跡、小川遺跡などが確認されている。

近世の遺跡は八田中遺跡などの発掘例があるものの、考古学的な調査はほとんどなされていない状況である。近世初頭の新田開発によって、現代につながる（とは言っても高度経済成長以前の）農村の原型が形作られたと推定される。しかし、その多くは現在の農村と重なっており、確認が困難である。

[参考文献]

- 小倉学・蔵国晴・宮下与真編 1982 『手取川七ヶ用水誌 上巻』 手取川七ヶ用水土地改良区
木立雅朗 1992 「第5章第3節 7. 横江荘遺跡出現の意義について」『横江』石川県埋蔵文化財センター

第3章 調査の概要

発掘調査は排水路の上流部分から順番に行い、農道などで途切れたり、排水路が曲がったりする部分でトレンチ名をかえ、1トレンチから8トレンチまで設定した。

1・2トレンチでは遺構密度・遺物とも希薄であったが、2トレンチで中世の溝を確認できた。それ以外の調査区でも中世の遺物は確認できたが、遺構を確認できたのは2トレンチだけであった。中世の野本遺跡の状況については存在が確認されただけで実態は不明である。

2トレンチ東端から3トレンチにかけては弥生時代後期の竪穴住居2基のほか、弥生時代中期の土坑・溝などが数多く確認され、出土遺物も多かった。とくにSD24と名付けた自然河川からは大量の遺物が出土した。おおむね弥生時代中期後半、戸水B式と言われる時期の土器が出土したが、ここから出土した櫛は全国的にも類例の少ないものであり、特に注目された。

4トレンチの遺構密度は低かったが、5トレンチ東端から遺構密度が高くなり、出土遺物も多かった。特に5・6トレンチからは玉作り関係の遺物が数多く出土した。6トレンチでは弥生時代中期の竪穴住居1基が確認され、7トレンチでは土坑・溝が確認された。5トレンチ東半から7トレンチにかけては3トレンチ同様、遺構密度が高く、出土遺物も多かった。

8トレンチ以北ではほとんど遺構は確認されず、遺構らしいものが集中する部分もあったが、遺物の出土がなく、集落としては機能していないと思われた。自然河川と思われる大きな溝状遺構SD25・27が確認されていたが遺物が出土しなかったため、完掘せず上位部分の発掘にとどめた。しかし、あとで微地形の分析を行ったところ、これらのいずれかが3トレンチSD24につながる可能性も考慮される。十分な検討を行わなかったことが反省される。

また、6トレンチと2トレンチからは少量ではあるが、弥生時代前期に逆上るかと思われる条痕文土器が出土している。しかし、当期に逆上る遺構は確認できなかった。これについても調査が不十分であったことは免れないが、手取川扇状地の他遺跡の状況を見れば当期の遺構の検出が困難であることがわかる。

土器は、弥生時代前期、中期後半、後期後半、中世のものが確認されたわけだが、弥生時代前期・中世の遺物量はごく少なく、遺構もほとんど確認できなかった。弥生時代中期後半、後期後半の遺構・遺物をもっとも多く確認された。後期前半の遺構・遺物が希薄で一時期途切れた可能性があるが、中期から後期にかけての有力な集落であったと思われる。周辺一帯の遺跡群を総体的にみれば、弥生時代前期から古墳時代前期に至る遺跡が散見され、一帯のテリトリー内を移動しながら「ムラ」が連綿と存続していたと推定される。



図4 調査区の位置 (S=1/400 赤色は圃場整備後の水田区画)

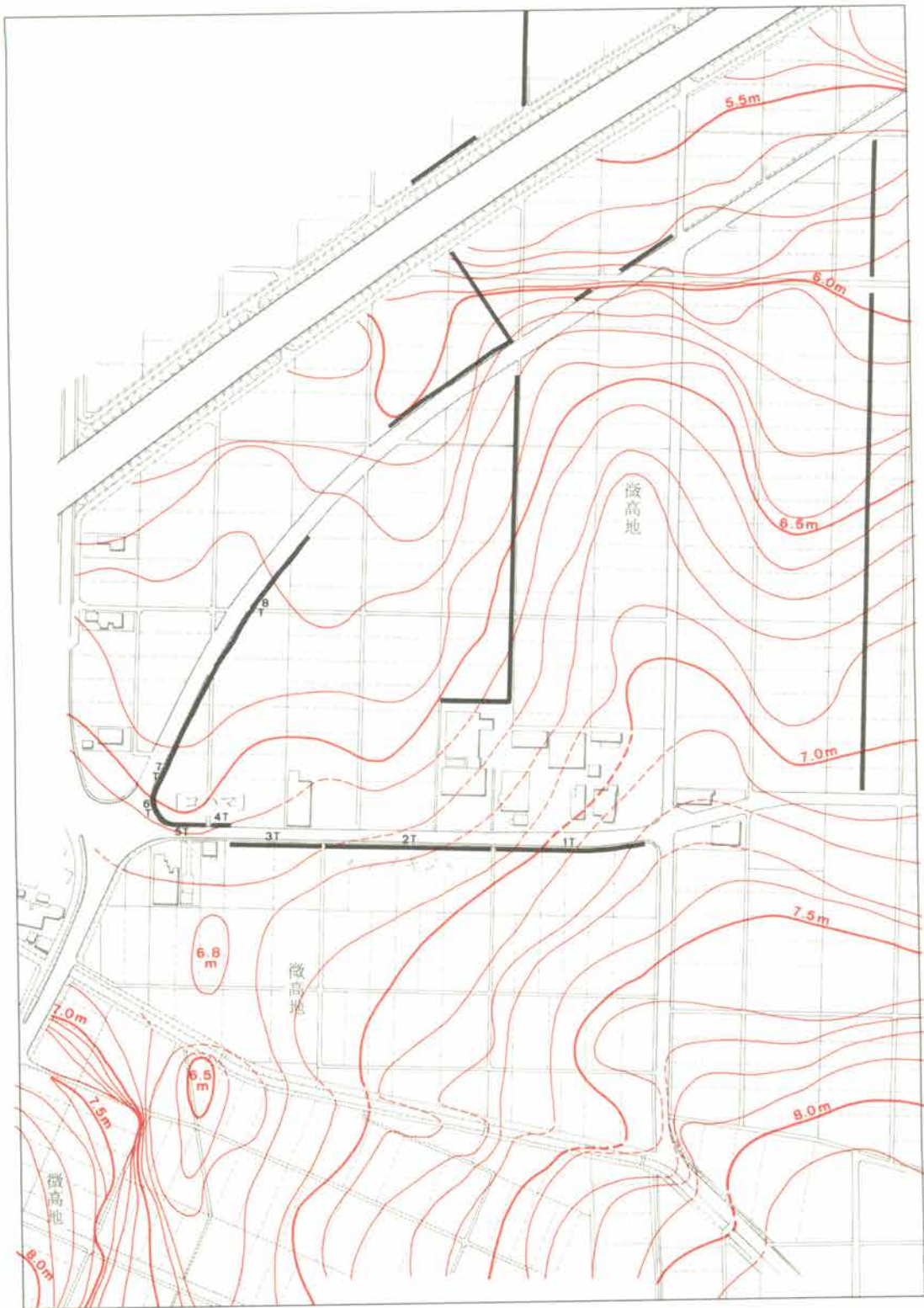


図5 調査区の位置と周辺の微地 (S=1/4000)

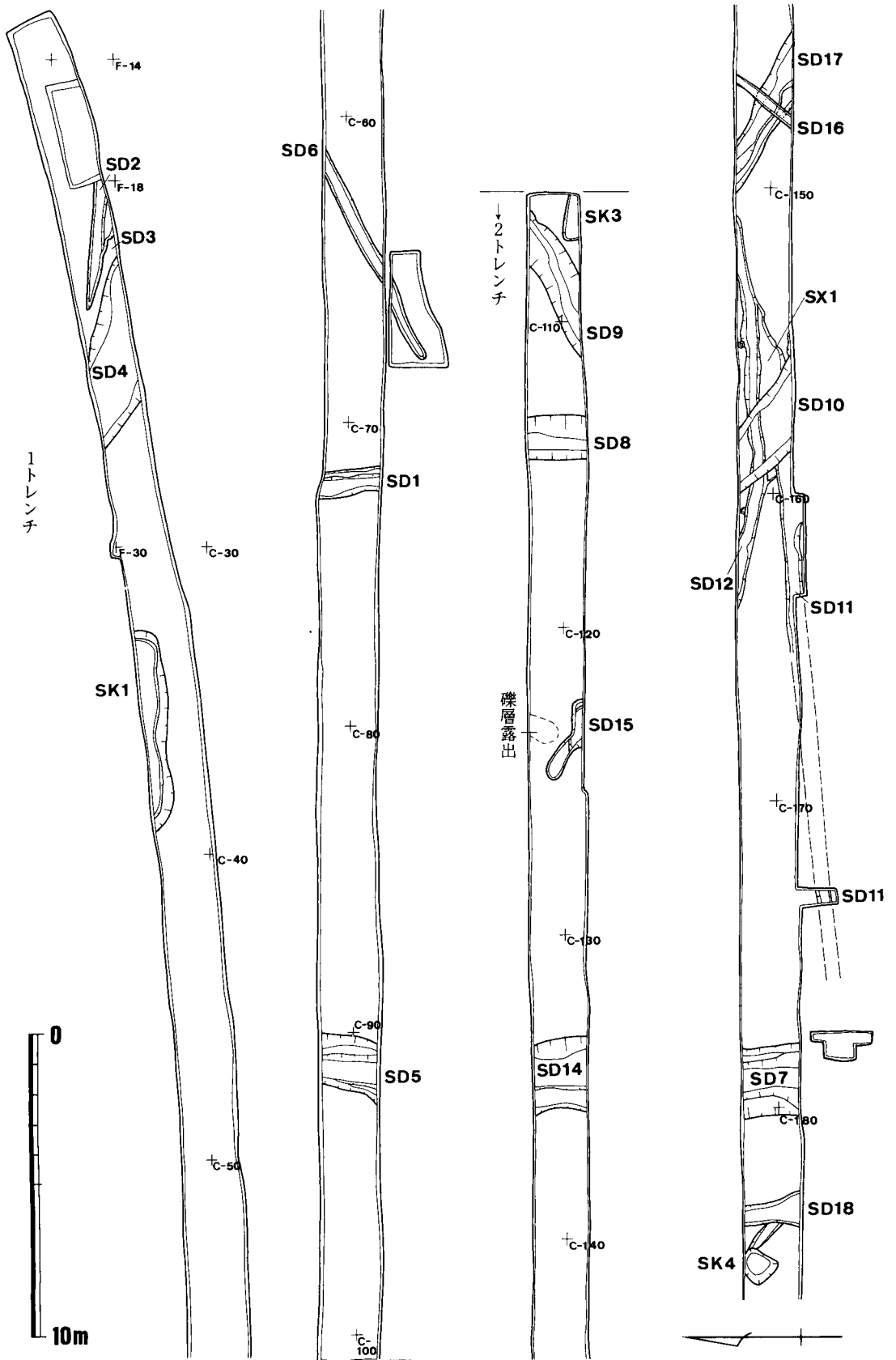


図7 遺構図配置図(1) (1・2トレンチ S=1/200)

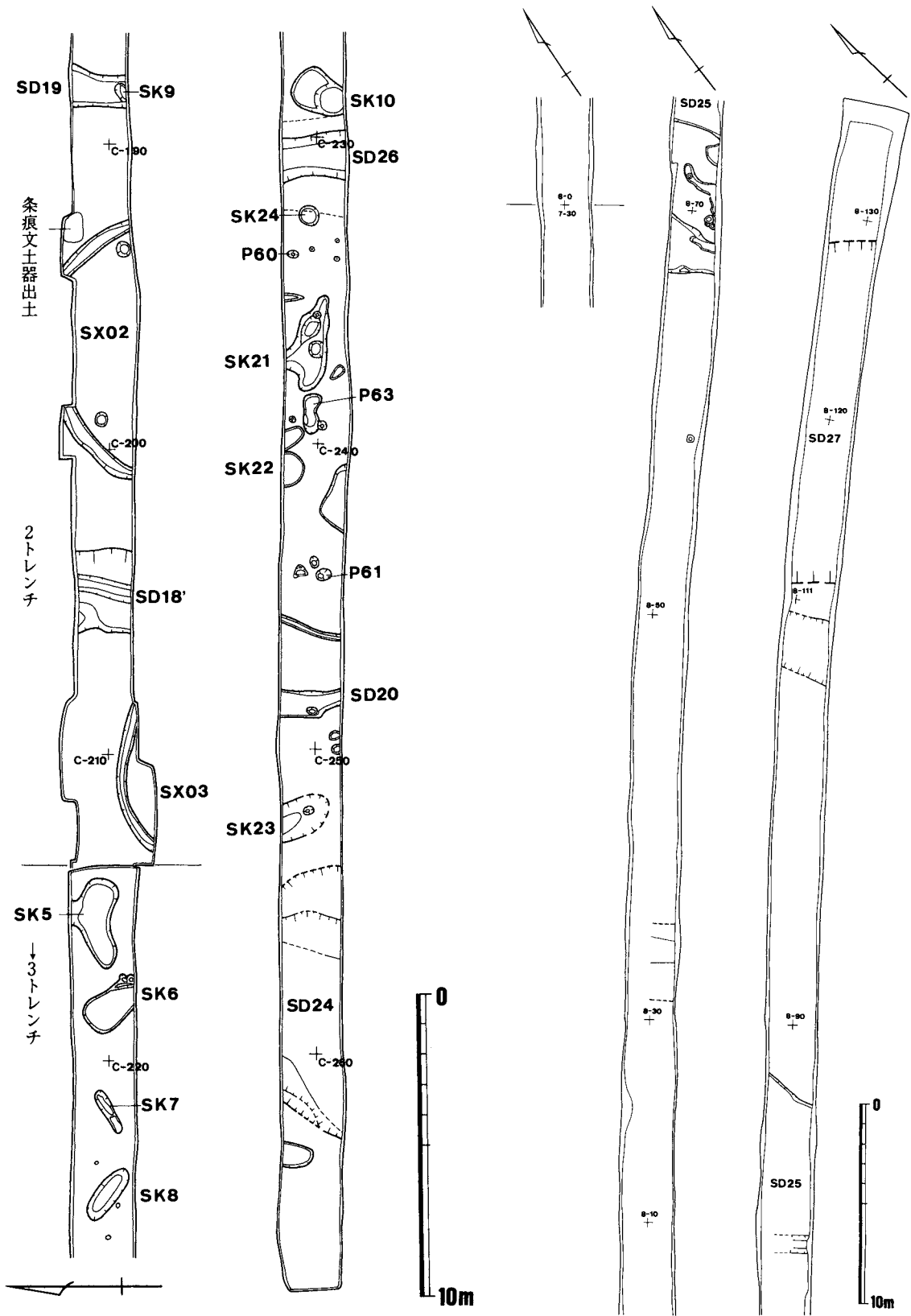


図8 遺構配置図(2) (2・3トレンチ-左2列 S=1/200 8トレンチ-右2列 S=1/300)

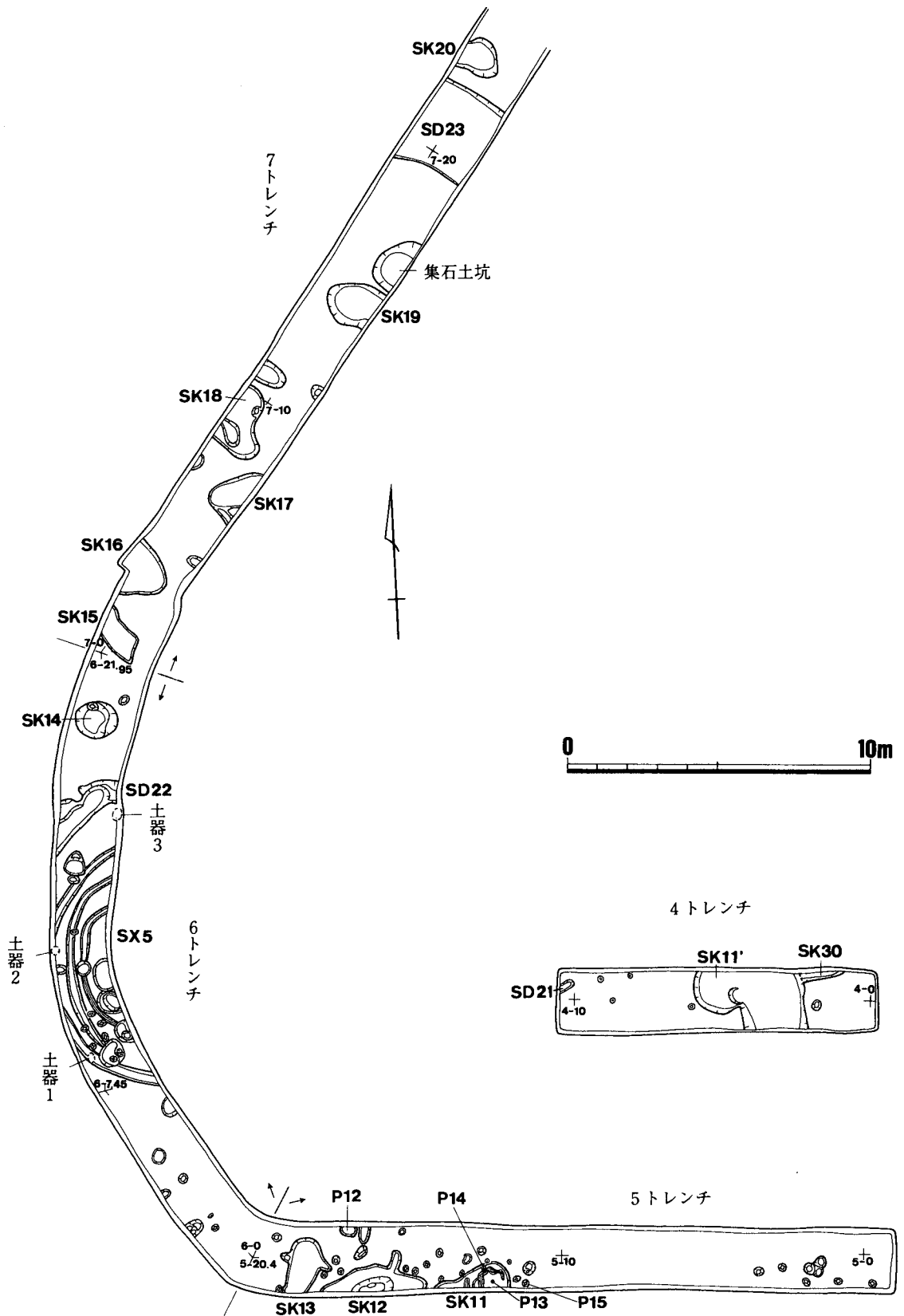


図9 遺構配置図 (4~7トレンチ S=1/200)

第4章 層位

第1節 野本遺跡の層位

第3トレンチ東端付近の土層図を図6に示した。調査前から圃場整備の面工事が行われていたため耕作土が攪乱されているが、基本土層は1層耕作土、2層床土、3・4層灰色（砂質）シルト、5・6層暗灰色砂質シルト、7層黒色シルト（いわゆる「クロボク層」）、9層暗灰色シルトである。地山は「基本的」には11層黄灰色シルトだが、この上面部分から弥生時代前期の土器が出土する。そのため、11層上位は弥生時代前期以前の堆積層であることが分かるが、せいぜい上面の5cm程度にすぎず、それより深い部分では土器などは含まれていないと推定される。ただし、11層を全面的に掘り下げたわけではない。そのため、遺構付近の精査を丁寧に行って11層を削り過ぎた結果、たまたま土器を確認した可能性も残る。11層の下層は厚い礫層であるが、その上面は大きくうねっており、部分的に11層上面まで顔を出している。そのため、11層の厚さは部分的な断ち割りの結果では数mから数cmと一定していない。また、3トレンチSK23付近では3層と9層の間に11層の再堆積と思われる間層（8層）が入る。

微低地にあたる3～7トレンチでは堆積土が厚く、多くの地層が確認できた。それに対して、微高地にあたる1・2トレンチでは堆積土が薄く地層の数も少ない。特に、周辺では普遍的に確認でき、鍵層となる7層黒色シルト層が確認されない部分もあり、層序の対比が微高地と微低地とは直接的にはできない面もある。

出土土器から見た各地層の堆積時代は次のとおりである。11層上面には弥生時代前期の土器がまれに含まれるが、突き刺さるか、なかば埋まるようにして検出された。また、9層には弥生時代中期～後期の土器が数多く含まれている地区がある。中期と後期の識別はできなかった。これを「弥生時代包含層」と呼ぶことにする。ほとんどの遺構が9層から切り込んでおり、遺構覆土も同系の色調である。しかし、中世の溝であるSD6のみ淡い7層上面から切り込んでおり、遺構の覆土は7層に茶褐色シルトが混入したものであった。また、図6の×部分から中世の青磁片が採集されており、5～7層上位部分が中世の包含層であることが分かる。

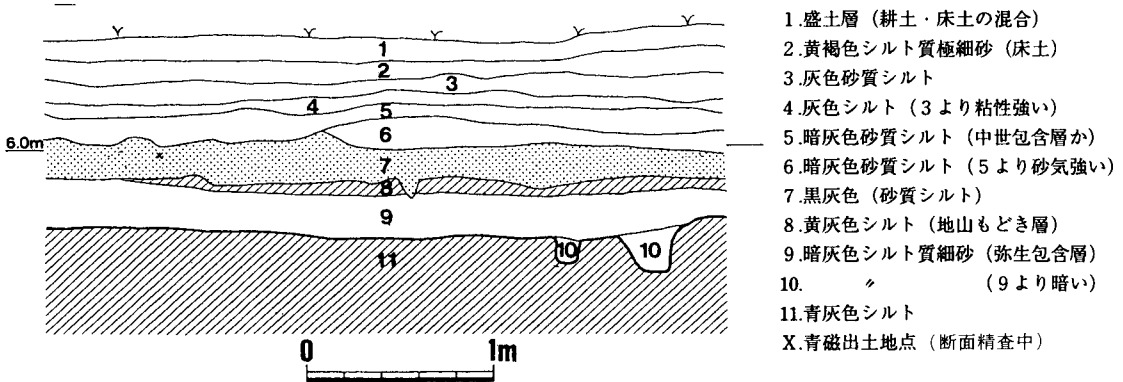


図6 基本土層図（S=1/40。3トレンチ西端付近）

第2節 手取川扇状地の黒色土層について

①いわゆる「クロボク層」の理解をめぐって

松任市周辺の土層で時代を決める鍵になるのは、黒色の土層、いわゆる「クロボク層」である。この黒色土層の分布は扇端付近の多くの遺跡で確認できるようであるが、微高地上に立地する遺跡では耕作土直下に地山層が検出され、確認されない例もある。微高地では削平を受けたり、流失したりすることもあるだろうが、一般的にその堆積は（微）地形に左右されるようである。なお、ここでは黒色の土層を一連の土層として想定しているが、厳密に分類したわけではない。異なった要因で生まれた土層を混同している可能性もあるが、お許し頂きたい。

かつて、石川県立埋蔵文化財センターが松任市の県営圃場整備事業に係る地区の試掘調査を開始しはじめた頃、いくつかの古代遺跡で黒色土層が土器包含層であったために、これを松任市周辺に普遍的な「土器包含層」であると誤認したことがあった。この「土器包含層」の直下に黄灰色シルト（～細砂）の「地山」があり、遺構の覆土は「土器包含層」と同じ黒色土であると言う理解であったと思われる。

しかし、発掘調査と試掘調査が進行していく過程で、黒色土層が必ずしも土器包含層ではなく広範囲に認められる自然堆積土であることが明らかになってきた。ちょうど、野本遺跡の試掘調査が行われた1987年前後がこの地層についての理解が変化しかけていた頃であったらしい。当遺跡の試掘調査では、試掘穴から土器が出土すること、「包含層」としての黒色土が確認されることを基準にして遺跡の範囲が推定された（図1参照）。

また、1990・91年には(株)石川県埋蔵文化財保存協会が松任市乾遺跡の発掘調査を行い、従来「地山」と考えられていた黄灰色シルトの地層内に縄文時代晩期～弥生時代初頭の遺構を確認した。調査者は「地山」と考えられていた地層が土石流による地層であると推定している〔石協会 1992〕。乾遺跡は扇央部にあたり、扇端部と単純に比較できないかも知れないが、手取川扇状地の形成と遺跡の関係を知るための大変重要な発掘であった。野本遺跡でも弥生時代前期の土器が黄灰色シルトにめり込むようにして出土しているし、金沢市馬替1丁目の扇台遺跡（1992年石川県立埋蔵文化財センター調査）でも縄文時代の土器が同様に出土している。今後とも類例はかなり増加するだろう。

②黒色土層の分布

この黒色土層は手取川扇状地の全域で確認できるわけではない。標高20m付近の宮丸遺跡では確認できるのに、至近距離ではほぼ同じ標高の村井北遺跡、村井キヒダ遺跡では確認されず、宮丸遺跡より標高が低い北出遺跡、米永古屋敷遺跡でも確認されない〔川畑 1992〕。また、標高13～15mの宮保遺跡群でも確認されていない〔三浦・北野 1991〕。これらの遺跡はかつての手取川（鶴来・徳光を結ぶライン）の氾濫原であった可能性が高く、部分的に黒色土層が堆積しなかったか、もしくは流失した可能性があるだろう。これら以南については発掘例が多くないが黒色土層は確認されていない。ところが、手取川左岸で標高20m前後の辰口西部遺跡群では確認されている〔北野 1988〕。この黒色土層と松任周辺のそれとがかつて連続していた可能性が指摘され

ている。手取川の南遷によって氾濫原が移動した部分のみ堆積しなかったか、流失したのであろう。

なお、手取川扇状地の北端にあたり、伏見川の扇状地とだぶる野々市町扇が丘～金沢市馬替周辺でも黒色土層が確認されるが、後述するようにその堆積時期は手取川扇状地とは異なる可能性が高い。

また、松任市教育委員会の金山弘明氏のご教示によると、条里地割りの残存と思われる東西南北の区画が、松任市を中心とする手取川扇状地で明確に確認できるが、旧手取川の氾濫原と推定される部分には確認されない。手取川の氾濫によって地割りが削平された可能性が高いと言う。そうしたことは、現在の地図でも明瞭に観察できる。その範囲と黒色土層の分布がほぼ一致することは興味深い。手取川の変遷と条里制の施行時期、黒色土層の堆積・削平時期的関係を知る上で大変重要な問題である。

③黒色土層の堆積時期

東相川遺跡〔北野 1992〕では7世紀の遺構が黒色の覆土で覆われており、その頃には堆積していることが分かる。下限ははっきりしないが、垣内光次郎氏によると周辺では中世前期の遺構（徳光ショウコウジ遺跡など）は黒色の覆土に覆われているが、中世後期以降は灰色に近くなるという。黒色土の堆積が中世前期まで続いていたか否かは確認できないが、少なくとも中世前期の遺構覆土は古代の遺構覆土と区別しがたい。黒色土の遺構は古代～中世前期、それより上層の灰色系統の地層は中世後期以降の地層である。野本遺跡でも黒色土層上位（図6に×印をつけた7層上位付近）で青磁が出土しており、SD6は黒色土層の上面から切り込んでいる。そうした知見と矛盾しない。また、黒色土層下層の（暗）灰色シルト層では弥生時代～古墳時代の遺構が確認されている。このことも周辺の発掘調査結果と一致する。なお、垣内光次郎氏によると古墳時代の遺構の中に黒色シルトのブロックが混入している例があり、地点によっては黒色土層の形成・堆積が古墳時代に逆上る可能性がある。

伏見川扇状地と手取川扇状地がだぶる金沢市扇台遺跡（1991・92年石川県立埋蔵文化財センター調査）では「クロボク層」が弥生時代後期～平安時代中期の土器包含層となっている。また、平安時代後期から鎌倉時代始めには早くも黒色土層上面に暗灰色シルトが堆積していた。この土層は黒色土層が土壌化、もしくは再堆積したものである可能性もある。黒色土層の堆積時期は大まかには併行しているものの、堆積開始時期と終了時期が手取川扇状地より早かったと思われる。伏見川水系の黒色土層と手取川扇状地扇端のそれとは区別しておく必要があるかも知れない。なお、野々市町教育委員会田村昌弘氏のご教授によると、野々市町教育委員会が行った扇が丘ヤグラダ遺跡では平安後期の包含層、遺構覆土が黒色土層であった（田村昌宏氏御教示）。扇台遺跡と近接した微高地上に立地しており、微地形によって若干、差を生じている可能性もある。この点については今後の周辺の調査を待ちたい。

④小結

伏見川水系、現手取川左岸、手取川扇状地北端の黒色土層の関係は必ずしも明らかではない。これらの黒色土層については考古学的な検討が十分に進んでいない。今後、意識的な発掘調査と

ともに地質・地理学などとの共同研究が必要であろう。また、発掘調査にさいしても統一的な基準で土層の識別に努める必要もある。ご批判・ご教授をお願いしたい。

[参考・引用文献]

北野博司編 1988 『辰口西部遺跡群』Ⅰ 石川県立埋蔵文化財センター

湯尻修平・安英樹編 1990 『一塚イチノツカ遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター

三浦純夫・北野博司 1991 『宮保遺跡群』 石川県立埋蔵文化財センター

北野博司編 1992 『相川遺跡群』 石川県立埋蔵文化財センター

川畑誠編 1992 『宮丸遺跡・村井北遺跡・北出遺跡・村井キヒダ遺跡・米永古屋敷遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター

④石川県埋蔵文化財保存協会 1992 『社団法人 石川県埋蔵文化財保存協会年報』 3

第5章 遺構

第1節 竪穴住居

S X 2 (図16、写真図版7)

2トレンチで確認した弥生時代後期の円形の竪穴住居跡。覆土の色は暗灰褐色砂質シルトで、遺構検出時に覆土上面を削ったところ、多量の土器が出土した。遺構廃絶後の窪みに土器が落ち込んだのだろう。深さは約30cm、推定直径は約9mを測る。床面で径40～50cm、深さ約10cmのピットを2つ検出した。床面を掘り込んだ際には部分的に礫層が露出していたと思われるが、そのあと、約10cm程度地山質の土(黄灰色シルト)を貼り付けている。

S X 3 (図17、写真図版7)

2トレンチと3トレンチの間の拡張区で検出した弥生時代後期の竪穴住居跡。円形と推定されるが、西側ではやや歪んでいる。S X 2と覆土の色が酷似する。深さ約35cm、発掘部分が小さいため推定直径は不正確であるが8mあまりと推定される。トレンチ内では床面のピットを確認できなかった。また、貼り床も確認できなかった。

S X 5 (図21、写真図版15)

6トレンチで検出した弥生時代中期の住居跡。S X 2・3とはのちにふれる自然河川(SD24)をはさんだ対岸にあたる。覆土の色はS X 2やS X 3に比べて淡い。壁溝が3本確認され、建て替えによって移動したためと推定される。壁溝は幅20～40cm、深さは10～20cmを測る。推定直径は西側から約8.5m、8m、6mとなり、東へゆくほど直径が小さくなる。壁溝1は円形と推定されるが、壁溝2・3は多角形であった可能性が高い。壁溝などはいくつものピットと複合している。住居内とそれに近接した地点で砥石3点と完形に近い土器3個体が確認された。それ以外の土器は小片であった。

第2節 土坑

SK1 (図7)

1トレンチで検出した。近現代の土坑で耕作土直下から切り込んでおり、樹皮なども投棄されていた。稲架木穴か土取り穴の一部であろう。長辺約3.3m、短辺0.4m以上、遺構が調査区外に延びるため、最深部まで発掘できず、深さ不明。

SK2 (図10)

1トレンチで検出した。土坑もしくは溝状の遺構と思われるが、SD3とSD4に上面を切られ、底の部分だけが残っているため、本来の形状は不明である。覆土は黒色シルトである。

SK3 (図12、写真図版5)

2トレンチ東端で検出した。覆土は茶褐色砂質シルトで耕作土・盛土直下から切り込まれており、比較的新しい遺構と推定される。長さ1.5m以上、幅0.5m以上、深さ約8cmを測る土坑。調査区外に延びているため形は不明だが、おそらく長方形であろう。

SK4 (図15、写真図版5)

2トレンチで検出した。おおよそ1m四方の方形土坑。深さ約30cmを測る。SD18と小さな溝で接続している。覆土は暗褐色シルトで、弥生時代の遺構と同じ色調である。

SK5 (図15、写真図版8)

3トレンチで検出した。長さ約3.1m、幅約1.2m、深さ約25cmを測るいびつな形の土坑。長方形の土坑がいくつか切りあっている可能性もあるが、現地では確認できなかった。覆土は暗灰褐色砂質シルトであり、土坑内から弥生時代中期の土器が数多く出土した。

SK6 (図15、写真図版8・9)

3トレンチで検出した。SK5に隣接した長方形の土坑。長辺約2.0m、短辺約1.2m、深さ約30cmを測る。覆土は暗灰褐色砂質シルトであり、土坑内から土器が多量に出土した。出土した土器の一部(107)はSK5出土のものと接合した。南壁では弥生時代包含層の下面から切り込んでいることが確認できた。

SK7 (図16)

3トレンチで検出した。長さ約1.6m、幅約0.4m、深さ約25cmを測る溝状の遺構。

SK8 (図16)

3トレンチで検出した。長さ約1.6m、幅約0.7m、深さ約45cmを測る長方形の土坑。覆土は暗灰色砂質シルトである。

SK9 (図11、写真図版3)

2トレンチのSD19の底で検出された土坑。SD19の底が深くなっただけかも知れない。大半が調査区外に延びるため、形は不明だが、長さ・幅ともに50cm以上ある。深さはSD19の底から約15cmを測る。土坑内から残りの良い土器が出土している。

SK10 (図18、)

3トレンチで検出した。長さ推定約2m、幅約1.3m、深さ約45cmを測る略長方形の土坑。覆土

は暗灰色シルトで、弥生時代包含層の下面から切り込んでいる。

S K 11' (図20)

4トレンチで検出した。径約1.8m、深さ約35cmの土坑。最近の溝によって東半分が切られている。

S K 11 (図20)

5トレンチで検出した。大半が調査区の外に延びているため、形状は不明だが、東西約2.6m、南北約0.9m以上、深さ約10cmを測る不定形の土坑である。覆土は地山粒が混入した暗緑灰色シルト質の細砂～中砂である。覆土の色調が緑色がかっているが、この周辺の他の遺構や黄色シルト(地山)も1～3トレンチに比べて緑色がかっている。5～6トレンチ周辺が微低地に当たするため、還元されたのだと思われる。出土遺物からも層序からも、弥生時代包含層の連続と判断される。

S K 12 (図20、写真図版16)

5トレンチで検出した。調査区の外に延びているため、形状は不明だが、東西約3.6m以上、南北約1m、深さ約20cmを測る不定形の土坑である。なお、中央部分のピット状落ち込みは土坑の底から約10cmの深さである。

S K 13 (図20、写真図版16)

5トレンチで検出した。幅約1m、長さ2m以上、深さ約20cm以上の溝状遺構。

S K 14 (図23)

6トレンチで検出した。径約1.3m、深さ約35cmを測るすり鉢型のピット状の遺構。覆土は灰色系のシルトである。

S K 15 (図22)

7トレンチで検出した。幅約0.9m、長さ1.5m以上、深さ約10cmの浅い溝状遺構。

S K 16 (図22)

7トレンチで検出した。調査区外に延びるため形は不明だが、幅2m以上、長さ2.6m以上、深さ約15cmの浅い窪み状遺構。

S K 17 (図22、写真図版17)

7トレンチで検出した。幅約1m、長さ2m以上、深さ約40cmを測る土坑。

S K 18 (図22)

7トレンチで検出した。幅2.2m以上、長さ1.6m以上、深さ約20cmを測る不定形の土坑。土坑内に底から約20cmの小さな落ち込みがある。

S K 19 (図23、写真図版18)

7トレンチで検出した。幅約1.5m、長さ1.7m以上、深さ約25cmを測る土坑。

S K 20 (図23)

7トレンチで検出した。幅約1.2m、長さ1.4m以上、深さ30cmを測る不定形の土坑。

S K 21 (図18)

3トレンチで検出した。長さ約3.3m、幅約0.9m、深さ約20cmを測るいびつな形の土坑。

S K22 (図18)

3トレンチで検出した。調査区外に延びるため形は不明だが、径約1.2m前後の円形の窪みである可能性がある。深さは約8cmほどで浅い。

S K23 (図17、写真図版10)

3トレンチで検出した。長さ約1.8m以上、幅1.5m、深さ約15cmの楕円形の土坑。土坑内から残りの良い土器がまとまって出土した。

集石土坑 (図23、写真図版18)

幅2m以上、長さ1.4m以上、深さ約30cmの土坑。上層に多数の円礫を敷きつめるようにして埋めてあった。

第3節 溝

S D 1 (図11)

1トレンチで検出した幅約80cm、深さ約18cmの溝。C-72区を南北方向に流れる。

S D 2 (図10)

1トレンチで検出した幅約40cm、深さ5～10cmの東西方向の溝。

S D 3 (図10)

1トレンチで検出した深さ約8cmの東西方向の溝。両側をSD2・SD4で切られているため、幅は不明。

S D 4 (図10)

1トレンチで検出した幅2.6m余りの溝。耕作土直下から切り込んでおり、耕作土直下からの深さが約50cmを測る。

S D 5 (図10)

1トレンチで検出した幅1.6～1.8m、深さ40cm足らずの溝。C-91区を南北方向に流れる。

S D 6 (図11)

1トレンチで検出した幅約40cm、深さ約20cmの溝。

S D 7 (図7、写真図版2)

2トレンチで検出した幅約2.3m、深さ約25cmの溝。C-179区を南北方向に流れる。

S D 8 (図12)

2トレンチで検出した幅約1.4m、深さ約15cmの溝。C-114区を南北方向に流れる。

S D 9 (図12、写真図版5)

2トレンチで検出した幅約1.2m、深さ約45cmの溝。

S D 10 (図14、写真図版4)

2トレンチで検出した幅約2m、深さ約25cmの溝。SD11・12を切る。

S D 11 (図14、写真図版4)

2トレンチで検出した幅約50cm、深さ約10cmで、ほぼ東西方向の溝。拡張トレンチによってSD7の東側でなくなるか、もしくは曲がると思われる。途中、SD12と分岐するが切り合い関係は確認

できなかった。

S D 12 (図14、写真図版 4)

2 トレンチで検出した幅約40cm、深さ約20cmで、ほぼ東西方向の溝。大きな円弧状に曲がっている。

S D 14 (図12)

2 トレンチで検出した幅約2.4m、深さ約35cmの溝。C-134～135区を南北方向に流れる。

S D 15 (図12)

幅約40cm、深さ2～20cmの溝状遺構。

S D 16 (図13)

2 トレンチで検出した幅約35cm、深さ約20cmの溝。SD17を切る。

S D 17 (図13、写真図版 2)

2 トレンチで検出した幅約1.2m、深さ約50cmの溝。

S D 18 (図15、写真図版 5)

2 トレンチで検出した幅60～120cm、深さ10～15cmの溝。C-183区を南北方向に流れる。

S D 18' (図13、写真図版 9)

2 トレンチで検出した幅約2.7m、深さ約50cmの溝。C-204～205区を南北方向に流れる。

S D 19 (図11、写真図版 3)

2 トレンチで検出した幅約1m、深さ約20cmの溝。C-188区を南北方向に流れる。

S D 20 (図17、写真図版13)

3 トレンチで検出した幅約90cm、深さ約20cmの。C-248区を南北方向に流れる。

S D 21 (図 9)

4 トレンチで検出した幅約30cm、深さ約10cmの溝状遺構。

S D 22 (図21)

6 トレンチで検出した幅約60cm、深さ約10cmの円弧状の溝。SX5の周溝になる可能性も残るが、SX5の南側で同様の溝が検出されていない。

S D 23 (図23、写真図版17)

7 トレンチで検出した幅約3m、深さ約60cmの溝。溝内には大量の栗石に混じって土器が投棄されていた。

S D 26 (図23)

3 トレンチで検出した幅約3m、深さ約60cmの溝。C-231区を南北方向に流れる。

南北方向の溝について

東から順番に上げると、S D 1・5・8・14・7・18・19・18'・25・20は南北方向の溝である。1～3 トレンチ 周辺の微地形は東南から北西へと傾斜していることから(図5)、南北方向の溝は地形に沿っていないことが分かる。明らかに弥生時代の溝と確認されるS D 18・20、明らかに近代に降るS D 26は除かなければならないが、南北方向の溝は条里制にかかわる可能性が高い。ただし、調査区の幅が狭いため、正確に南北方向を向いているとは断言できない。方向の

表2 溝間の距離 (m)

	SD20 C-248	SD26 C-231	SD18' C-204	SD19 C-188	SD18 C-183	SD 7 C-179	SD14 C-134	SD 8 C-114	SD 5 C-91	SD 1 C-72
SD20		17	44	60	65	69	114	134	157	176
SD26			27	43	48	52	97	117	140	159
SD18'				16	21	25	70	90	113	132
SD19					5	9	54	74	97	116
SD18						4	49	69	92	111
SD 7							45	65	88	107
SD14								20	43	62
SD 8									23	42
SD 5										19
SD 1										

ずれたものを含めている可能性もあろう。東西方向の溝は調査区の形状からほとんど確認されなかったがSD 2・3はほぼ東西方向に向いている。それぞれの溝の距離は表1に示したが、1町に近い距離を持つものもいくつか確認される。もっとも1町に近いのは①SD 1～SD 7の107m、②SD 1～SD18の111mで、③SD 5とSD18'の113m、④SD 8～SD26の117m、⑤SD14～SD20の114mも1町に近い。また、それらがおおよそ20mずつずれながら重なっていることも注意を引く。すべての溝が同時期と確認されたわけではなく単なる偶然である可能性も高い。しかし、一部は各時代の条里制整備に係る可能性も残しておきたい。

また、中世の溝であることを確認されたSD 6は条里の方向を向かない。これとよく似た方向はSD 9・10・16などが上げられる。このような方向の区画も存在した可能性があるが、この方向は図5に示した調査区周辺の微地形に沿っている可能性もある。

第4節 大溝

SD24 (図19、写真図版11・12)

3トレンチで検出された南北方向の自然河川。幅はおおよそ7～9m、黄灰色シルト層からの深さは約1.5mを測る。水田面からの深さは約2.5mで、危険を伴うため完掘することを断念し、南側の幅1m弱の部分のみ完掘した。溝内から大量の土器が出土し、木器や植物遺体も多量に出

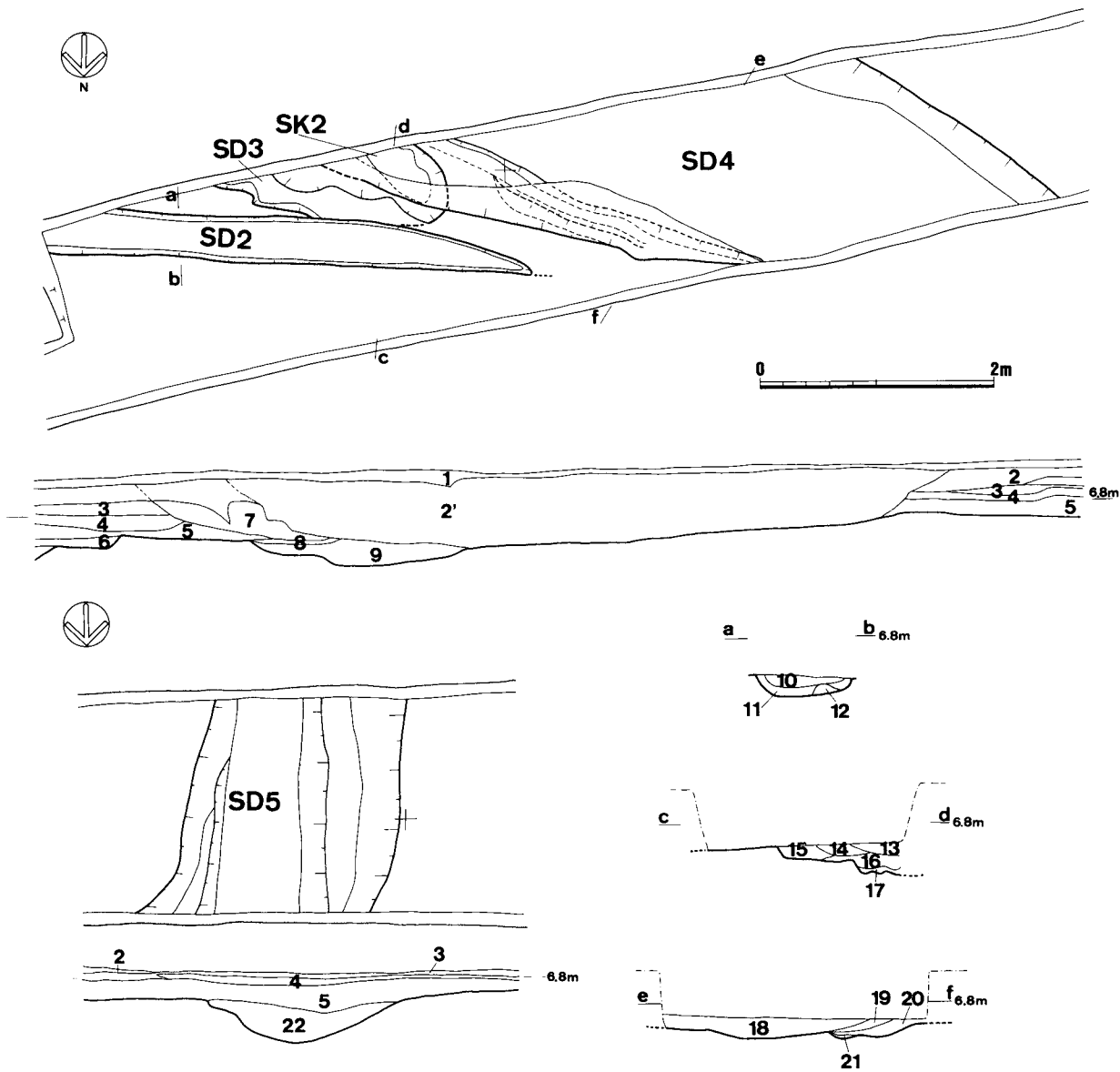
土している。また、少量ではあるが米も出土している。ただし、この下半部分は腐食土質で遺物を含んでいなかった。当初は単なる沼地状の自然河川であったものが、途中から土器などが投棄されるようになったものと推定される。遺物は3層に分層して取り上げることができた。上層、中層、下層の3層であるが、上層は当遺構が完全に埋まる過程で堆積したもので、黒色を呈していた。中層は暗灰色シルトで「弥生時代包含層」と類似していた。下層は腐植土層で大量の土器、自然木のほか、炭化米、木製品、石器なども出土している。なお、下層部分は深く危険であるため、トレンチ幅の半分しか掘り下げなかったが、それにも係わらず、上層や中層に比べても大量で残りの良い遺物が出土している。

S D25 (図24)

8トレンチで検出した自然河川。幅約14mを測る。深さは全掘していないため不明だが、約1m以上確認された。3トレンチのS D24の延長である可能性もあるが、遺物が出土していないため、判断できない。

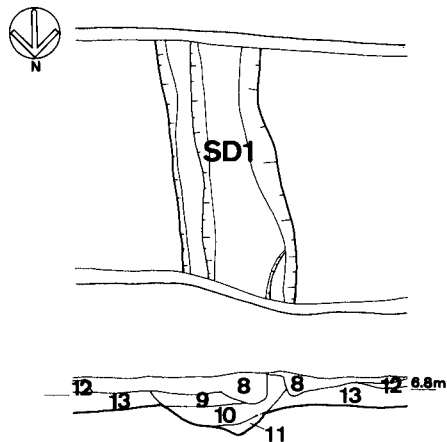
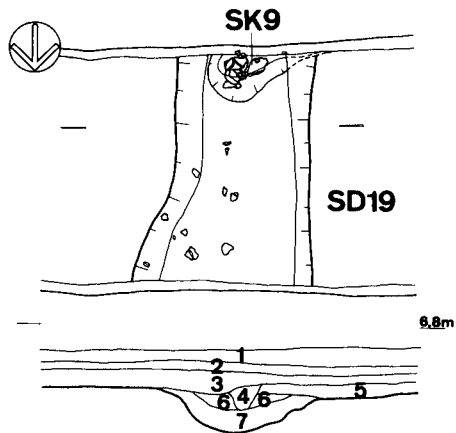
S D27 (図24)

8トレンチで検出した自然河川。幅約16mを測る。深さは全掘していないため不明。S D25と同じく、S D24の延長である可能性があるが、遺物が出土していないため確定できない。



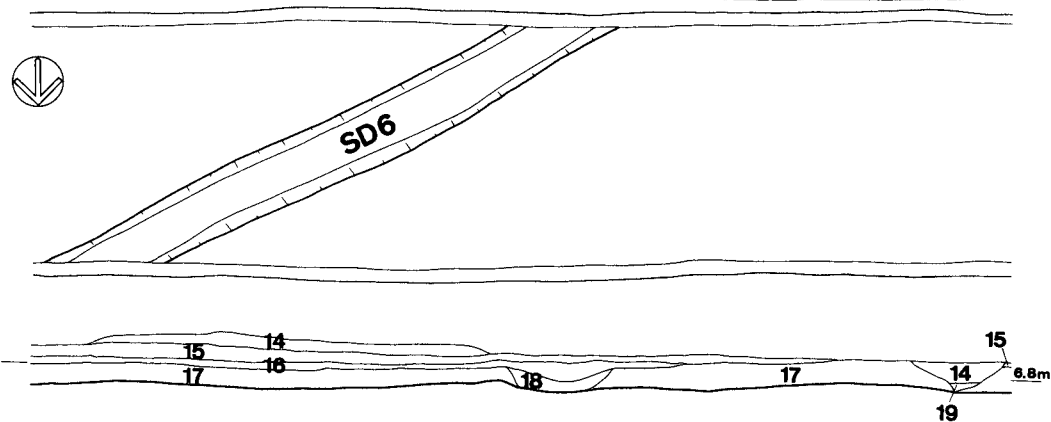
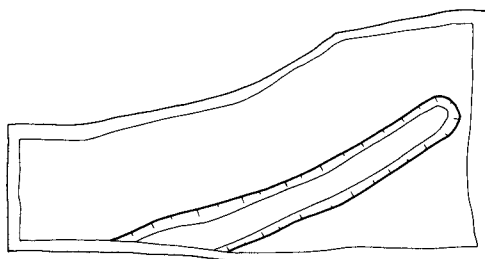
- | | |
|---|--|
| <ul style="list-style-type: none"> 1. だく黄褐色シルト質細砂 (盛土。しまりない) 2. 灰色砂質シルト (しまりよい。中世包含層か) 2'. (SD 4) 3. 茶褐色シルト 4. 黒褐色シルト 5. 茶褐色シルト 6. 黒色シルト (SD 2) 7. 黒灰色シルト (SD 4) 8. 灰色砂 (SD 3) 9. 黒色シルト (SK 2) 10. 黒灰色シルト 11. 黄灰色シルト (地山) 粒多量混入の10 | <ul style="list-style-type: none"> 12. 黄灰色シルトブロック 13. 黄色砂・暗灰色シルトの互層 (SD 4) 14. 褐色砂と黒灰色シルト互層 (SD 3) 15. 黒灰色シルト (SD 2) 16. (淡) 黒灰色シルト (SK 2) 17. 不明 18. 黄色砂・灰色砂の互層 (SD 4) 19. 暗灰色シルト (SD 3) 20. 黒灰色シルト (SD 2か) 21. 赤褐色粗砂 (SD 2~4とは別の溝) 22. 赤褐色シルト |
|---|--|

図10 遺構実測図(1) (S=1/60)



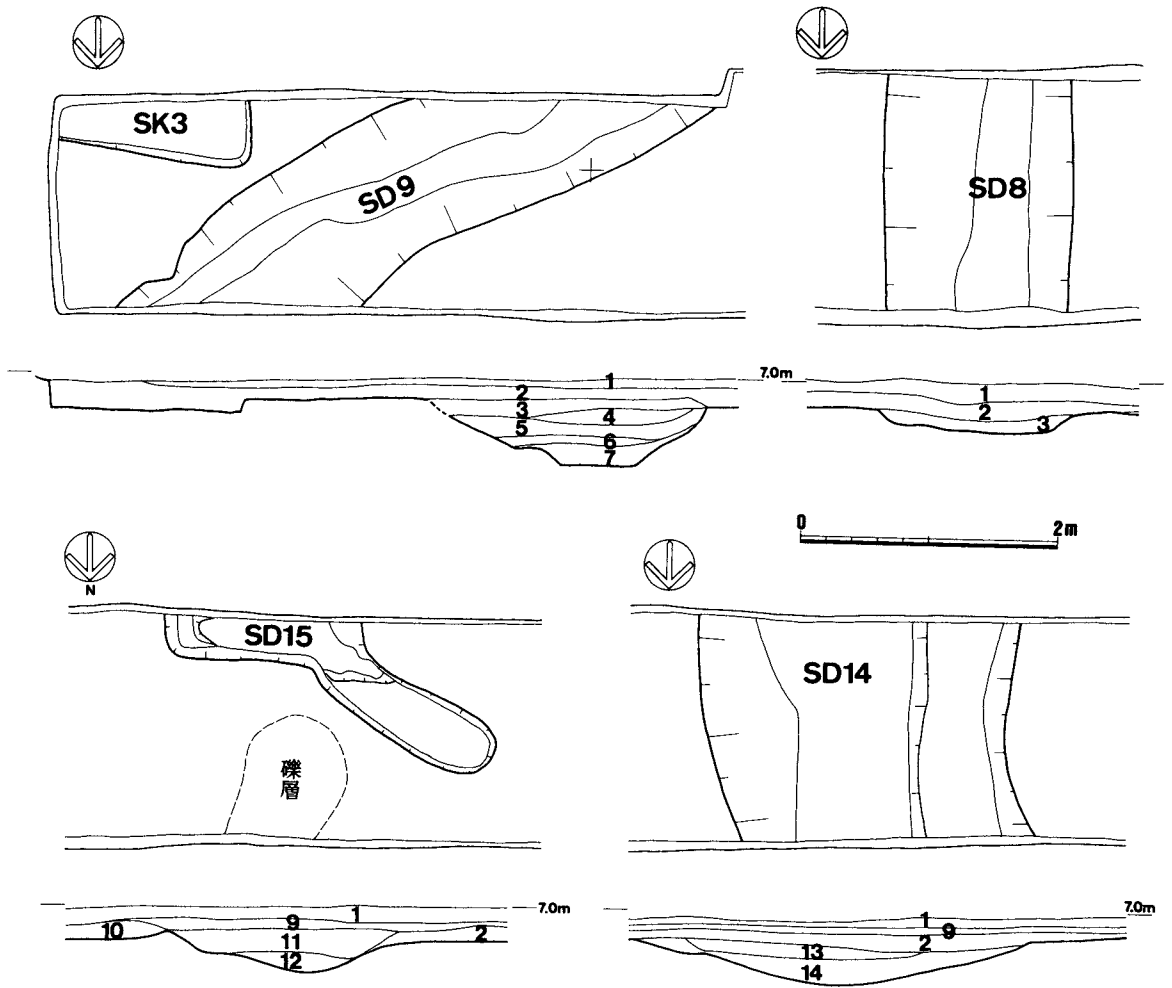
1. 灰オリーブ色 (極) 細砂
2. 灰色砂質シルト (しまりよし)
3. 茶褐色砂質シルト
4. 茶褐色砂質シルト (3より淡くシルト質強い)
5. 灰色砂質シルト
6. 褐灰色砂質シルト (4より灰色強い)
7. 灰色砂質シルト (2より乳色がかかる。砂質強くやわらかい)

0 2m



- | | |
|----------------------------|-----------------------|
| 8. だく黄褐色シルト質極細砂 (盛土。しまりない) | 14. 8と同じ |
| 9. 暗灰色シルト質細砂～極細砂 | 15. 2と同じ |
| 10. 暗灰色砂まじりシルト | 16. 12と同じ |
| 11. 掘りすぎ | 17. 13と同じ |
| 12. 黒褐色シルト | 18. 黒色シルト (茶褐色シルト粒含む) |
| 13. 茶褐色シルト | 19. 灰色シルト |

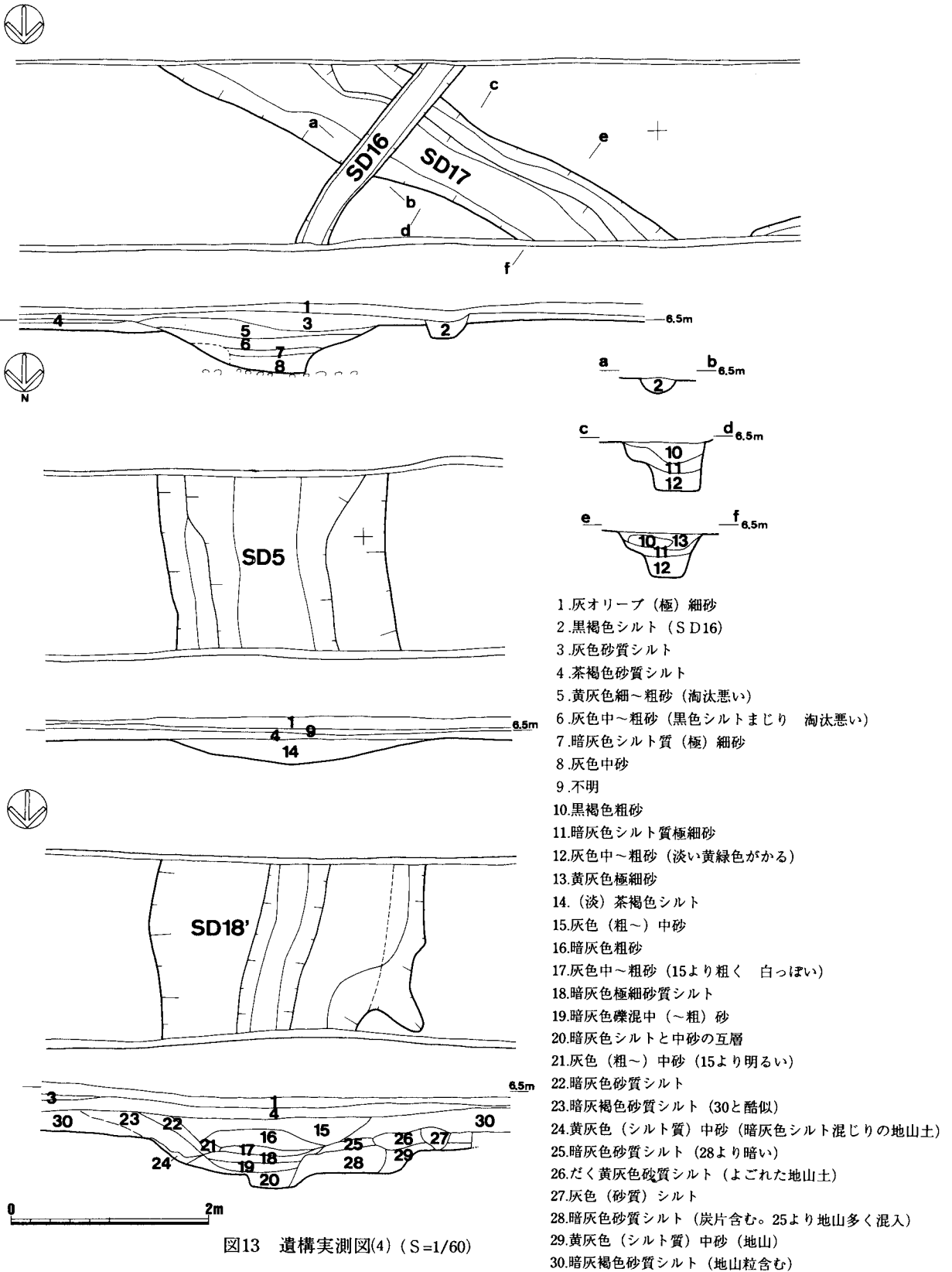
図11 遺構実測図(2) (S=1/60)



1. 灰オリーブ（極）細砂（耕土・盛土）
2. 茶褐色砂質シルト
3. 黄灰色粗砂
4. 暗灰色粗砂
5. 黄灰色シルト質砂
6. 明灰色シルト質砂
7. 暗灰色砂

8. 暗灰褐色シルト（クリーム色シルト粒含む）
9. 灰色砂質シルト（旧耕土か）
10. 不明
11. 暗茶褐色砂質シルト
12. 暗灰色シルト
13. 灰オリーブ砂質シルト
14. 暗灰色シルト（黒色シルトブロックまじり）

図12 遺構実測図(3) (S=1/60)



1. 灰オリーブ (極) 細砂
2. 黒褐色シルト (SD16)
3. 灰色砂質シルト
4. 茶褐色砂質シルト
5. 黄灰色細～粗砂 (淘汰悪い)
6. 灰色中～粗砂 (黒色シルトまじり 淘汰悪い)
7. 暗灰色シルト質 (極) 細砂
8. 灰色中砂
9. 不明
10. 黒褐色粗砂
11. 暗灰色シルト質極細砂
12. 灰色中～粗砂 (淡い黄緑色がかる)
13. 黄灰色極細砂
14. (淡) 茶褐色シルト
15. 灰色 (粗～) 中砂
16. 暗灰色粗砂
17. 灰色中～粗砂 (15より粗く 白っぽい)
18. 暗灰色極細砂質シルト
19. 暗灰色礫混中 (～粗) 砂
20. 暗灰色シルトと中砂の互層
21. 灰色 (粗～) 中砂 (15より明るい)
22. 暗灰色砂質シルト
23. 暗灰褐色砂質シルト (30と酷似)
24. 黄灰色 (シルト質) 中砂 (暗灰色シルト混じりの地山土)
25. 暗灰色砂質シルト (28より暗い)
26. だく黄灰色砂質シルト (よごれた地山土)
27. 灰色 (砂質) シルト
28. 暗灰色砂質シルト (炭片含む。25より地山多く混入)
29. 黄灰色 (シルト質) 中砂 (地山)
30. 暗灰褐色砂質シルト (地山粒含む)

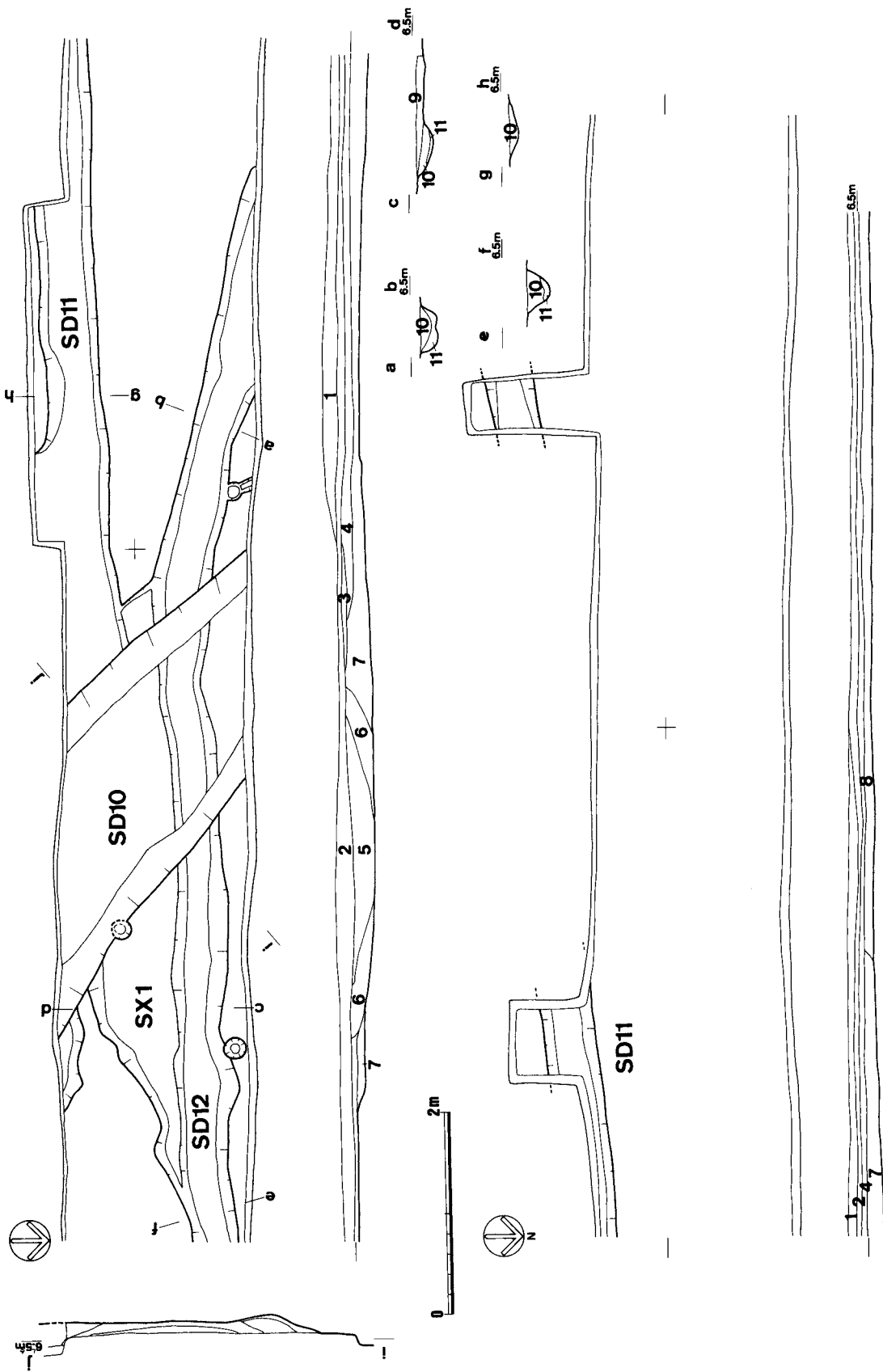
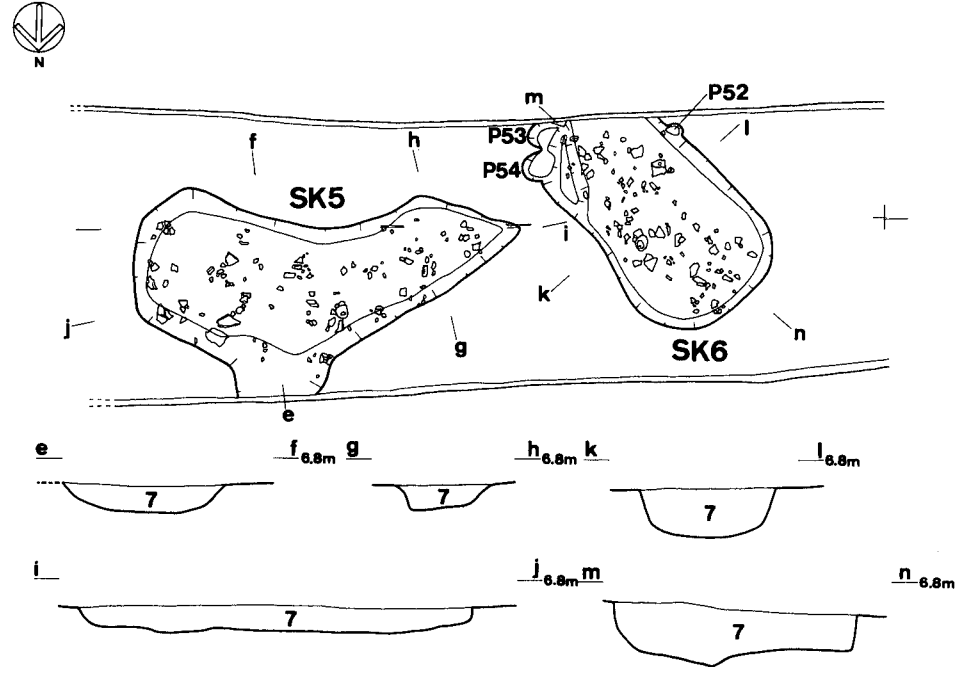
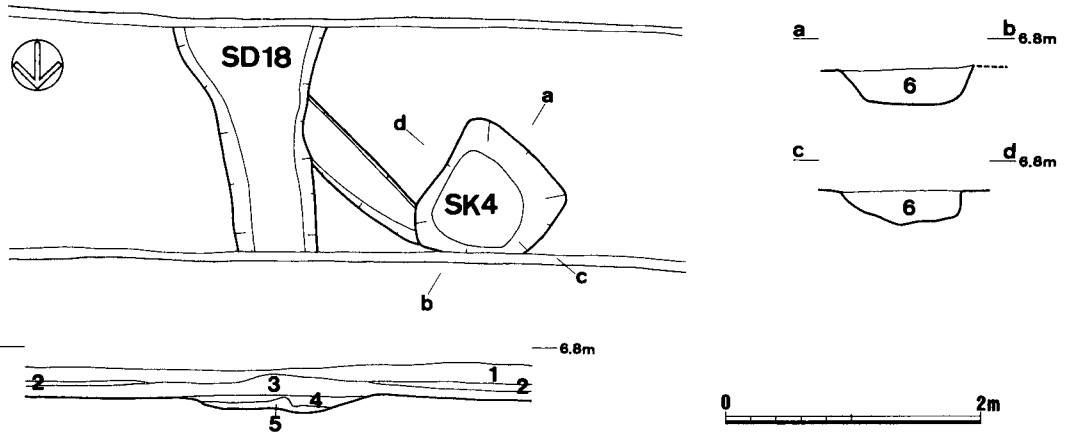
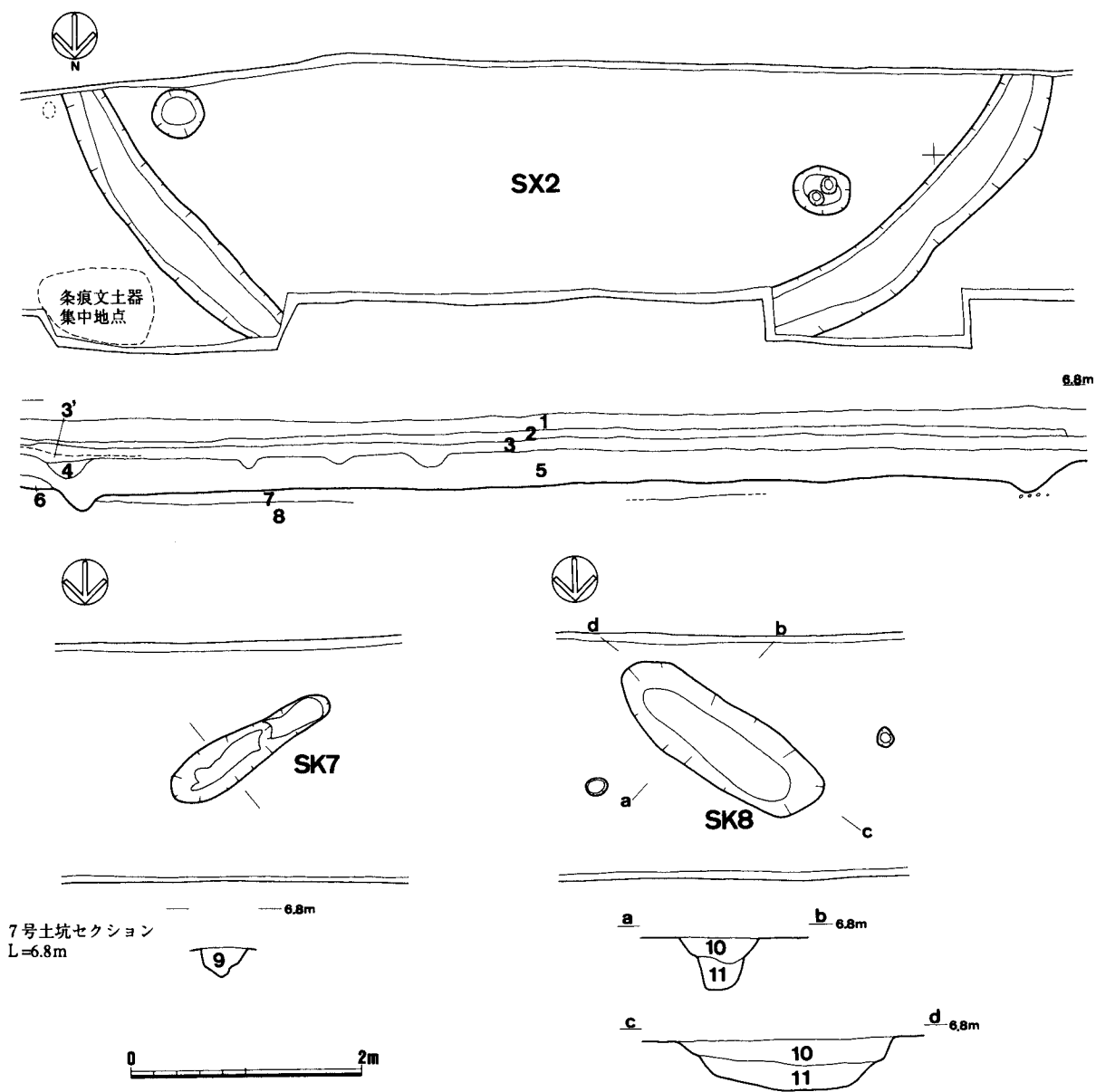


图14 遺構実測図(5) (S=1/60)



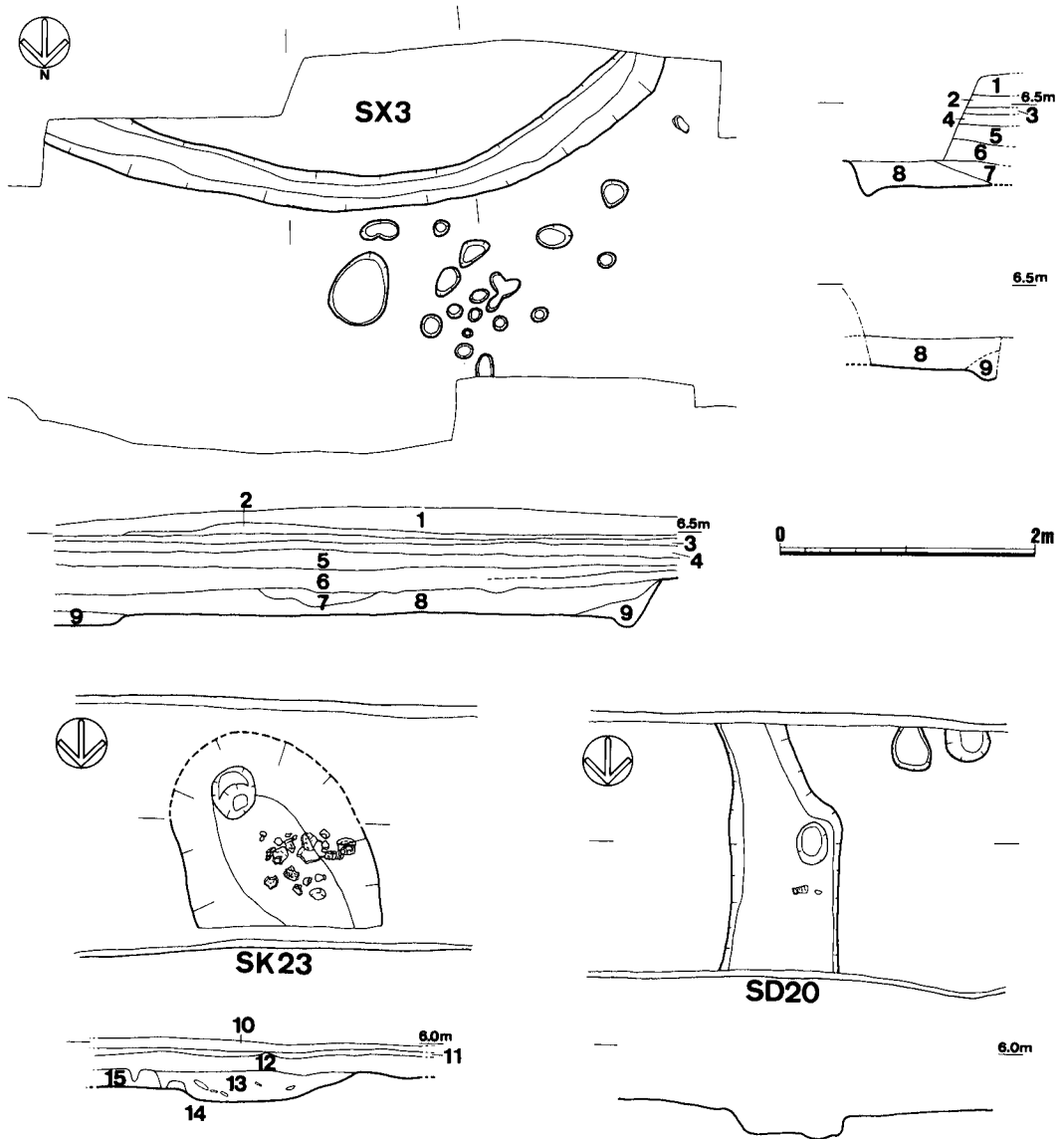
- | | |
|------------------|---------------|
| 1. 灰オリーブ色 (極) 細砂 | 5. 暗灰色シルト質極細砂 |
| 2. 灰色砂質シルト | 6. 暗褐色シルト |
| 3. 茶褐色砂質シルト | 7. 暗灰褐色砂質シルト |
| 4. 黒褐色シルト | |

図15 遺構実測図(6) (S=1/60)



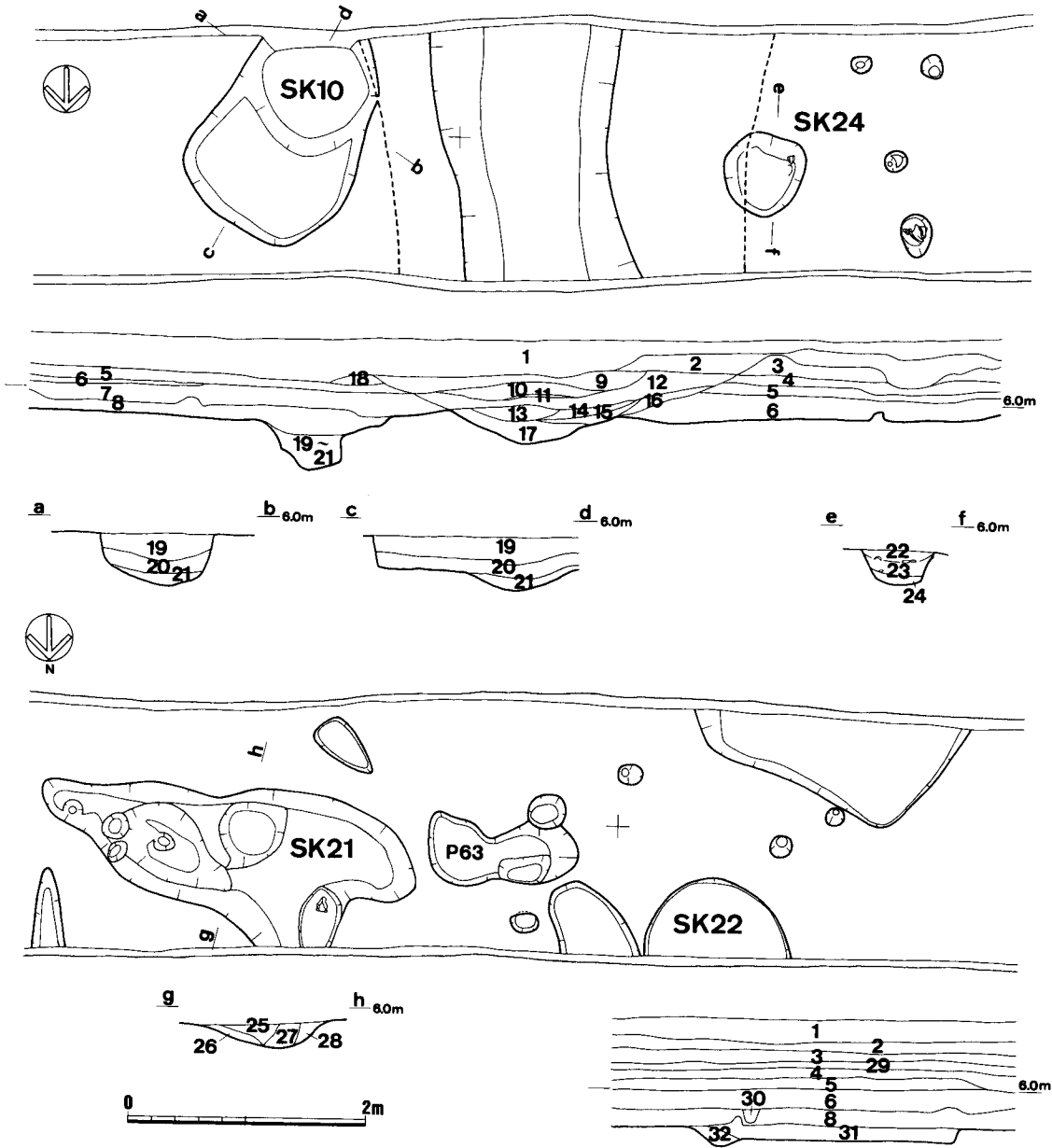
- | | |
|-----------------------------|-----------------------------|
| 1. 灰オリーブ色 (極) 細砂 | 6. 灰色砂質シルト |
| 2. 灰色砂質シルト | 7. 黄灰色シルト質中砂 (はり床) |
| 3. 黒褐色砂質シルト (3' 層から漸移的に変化) | 8. 灰色中砂 (礫含む。地山) |
| 3'. 茶褐色砂質シルト | 9. 不明 |
| 4. 暗灰色砂質シルト (5より暗く、3'より明るい) | 10. 暗灰色砂質シルト (炭片・土器含む) |
| 5. 暗灰褐色砂質シルト | 11. 暗灰色シルト質中砂 (　　。10より土器多い) |

図16 遺構実測図(7) (S=1/60)



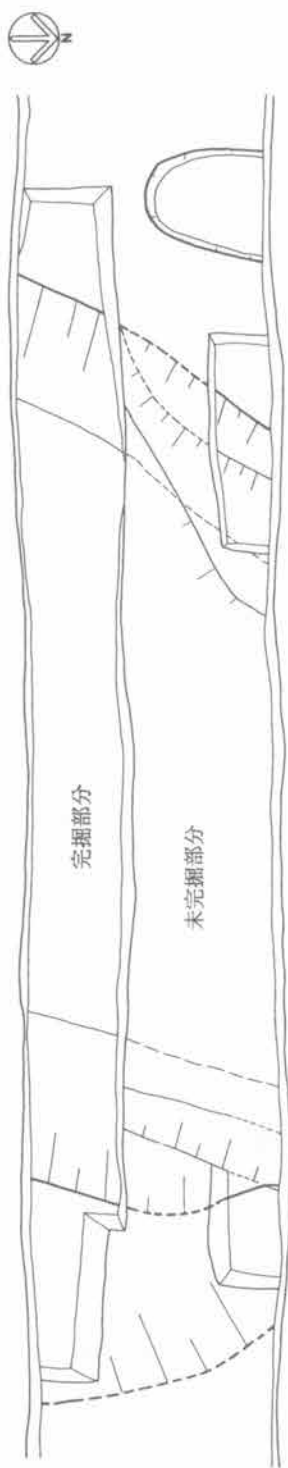
- | | |
|---|---|
| <p>1. 灰色砂質シルト (しまり悪い。耕土)
 2. 黄褐色シルト質極細砂
 3. 灰色砂質シルト
 4. 淡灰褐色砂質シルト
 5. 黒褐色砂質シルト
 6. 暗灰 (褐) 色砂質シルト (弥生包含層。上位は淡い褐灰色)
 7. 褐灰色砂質シルト (6より濃い)
 8. (暗) 灰褐色砂質シルト</p> | <p>9. (暗) 灰褐色砂質シルト (8より粘性にとみ、やや青味がかかる)
 10. 黄灰色シルト質極細砂 (地山もどき層。汚れた地山)
 11. 暗灰色砂質シルト
 12. 黒褐色シルト (13より砂質っぽく、炭少なく、微妙に明るい。
 6の下層部分が徐々に黒くなった層)
 13. 黒褐色シルト (土器・炭を含む。10~12よりやわらかい)
 14. 白灰色極細砂の流れ込み状混入土
 15. 掘すぎか。</p> |
|---|---|

図17 遺構実測図(8) (S=1/60)

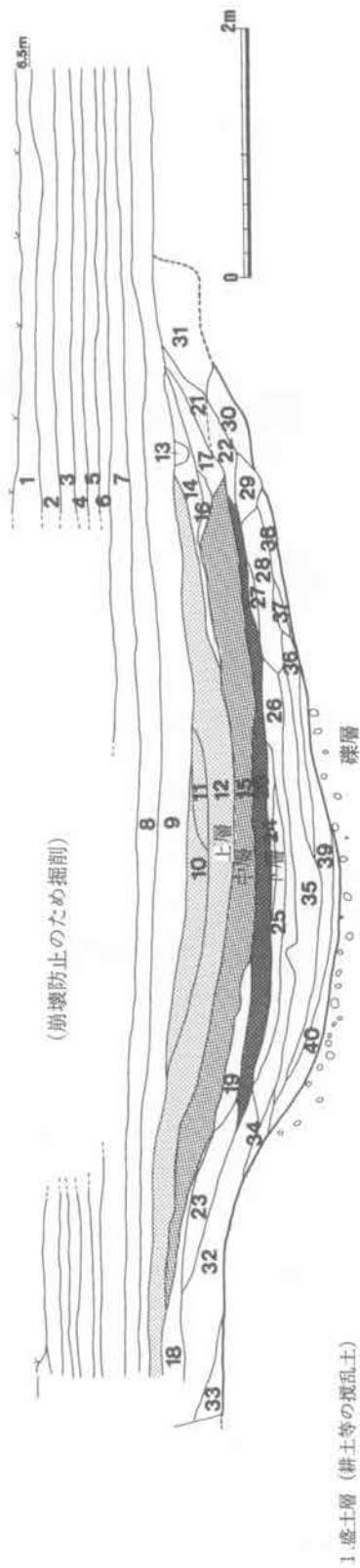


- | | | |
|----------------------------|-----------------------------------|----------------------------|
| 1. 盛土層 (耕土等の攪乱土) | 12. 灰色極細砂 | 23. 暗灰色シルト (22より暗い) |
| 2. 灰色砂質シルト | 13. 赤褐色粗砂 | 24. 淡黒色シルト |
| 3. 茶褐色砂質シルト | 14. 褐色まじり灰色細~極細砂 | 25. 暗灰色シルト |
| 4. 黒褐色シルト (3の下位が漸移した層) | 15. 褐色粒砂まじり灰色中砂 | 26. (暗) 灰色シルト (25より明るい) |
| 5. 黒灰色褐色砂質シルト | 16. 灰色極細砂 | 27. 暗灰色シルト () |
| 6. 黒灰色 (砂質) シルト | 17. (赤) 褐色粗砂 | 28. (暗) 灰色シルト (白色 地山土多量混入) |
| 7. 暗灰褐色砂質シルト (5より砂気強い) | 18. 灰褐色砂質シルト | 29. 灰色シルト (3より砂気少なく粘性強い) |
| 8. 暗灰色シルト質細 (~中) 砂 (弥生包含層) | 19. 暗灰色シルト | 30. 暗灰色シルト |
| 9. 灰色極細砂 | 20. 暗灰色シルト (19より暗い。19・21よりしまりよい) | 31. やや青味がかかる暗灰色シルト |
| 10. 灰色粗~細砂 (互層) | 21. 砂ブロックまじり暗 (青) 灰色シルト (別土抺の残存か) | 32. 灰色シルト |
| 11. 灰褐色シルト | 22. 暗灰色シルト | |

図18 遺構実測図(9) (S=1/60)



SD24



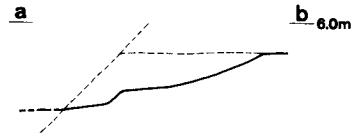
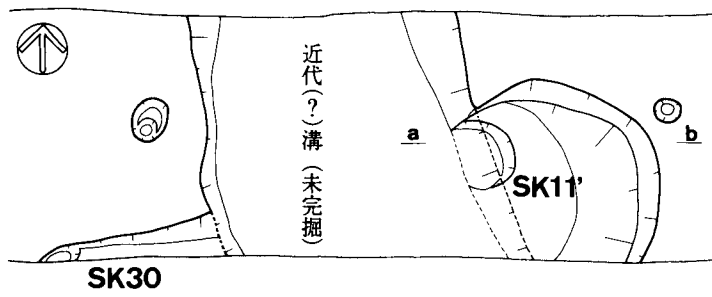
1. 盛土層 (耕土等の攪乱土)
2. 黄褐色シルト質極細砂
3. 灰色砂質シルト
4. 灰色シルト
5. 暗灰色砂質シルト (中世包含層だろう)
6. 暗灰色砂質シルト (5より砂質強い)
7. 黒灰色 (砂質) シルト
8. 黄灰色シルト (地山もどき層)
9. 暗灰色シルト質細 (~中) 砂 (強生包含層)
10. 淡黒灰色シルト (炭含 S D 24 上層)
11. 淡黒色シルト (10より濃く、12より淡い。S D 24 上層)
12. 黒色シルト (S D 24 上層)
13. 黒灰色シルト・灰色シルトの混合土
14. 暗灰色シルト (9・15より淡い)
15. 暗灰色シルト
16. (暗) 灰色シルト (14より淡い)
17. 黄灰~青灰色シルト (21・22よりシルト強い)

18. 層名記入もれ
19. 暗灰色シルト (15よりやや淡い)
20. 茶褐色シルト (腐蝕物多量に含む。S D 24 下層)
21. 黄灰色極細砂質シルト
22. (青) 灰色極細砂質シルト
23. (緑) 灰色シルト (暗灰色シルトまじり)
24. 茶褐色シルト質腐蝕 (20より腐蝕物多い)
25. 茶灰色シルト (腐蝕物含む)
26. 茶色シルト質腐蝕層
27. 淡茶灰色シルト (腐蝕物含む)
28. 茶灰色シルト (腐蝕物多い)
29. だく暗灰色シルト (腐蝕物含む)
30. 青灰色極細砂 (サクサクした質感)

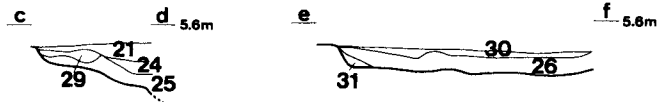
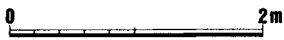
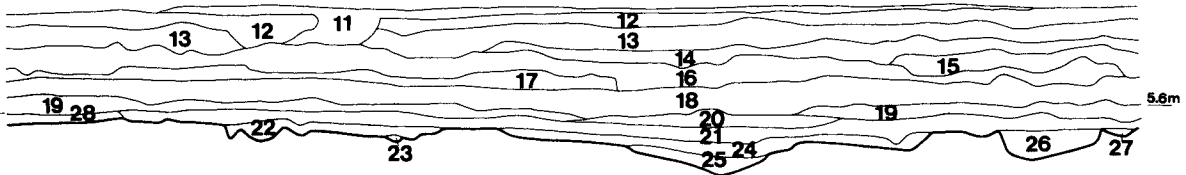
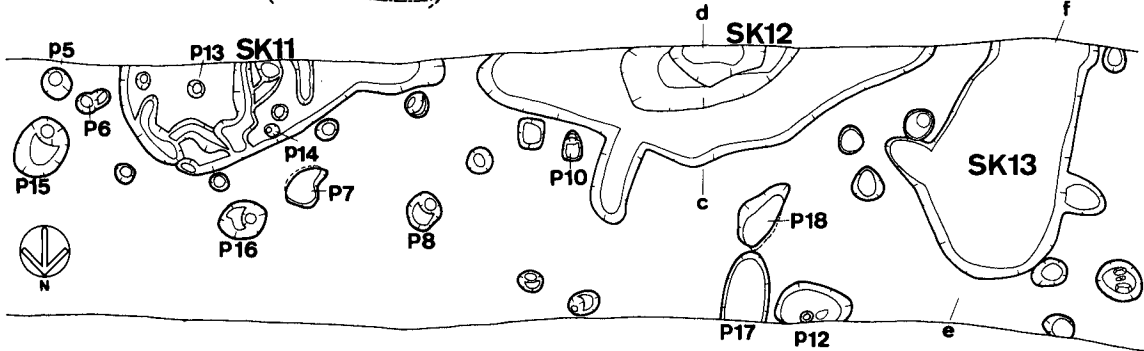
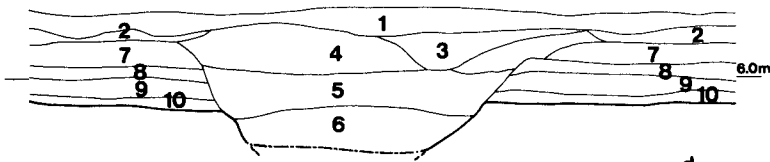
31. 黄灰色極細砂 (サクサクした質感)
32. 緑灰色シルト (23より汚れ少なく緑が強い)
33. 青灰色シルト (汚れる)
34. 淡茶灰色シルト (腐蝕物含む)
35. 茶灰色シルト (茶色腐蝕層と灰色シルト層の薄い互層)
36. 茶色シルト質腐蝕層 (35より濃い)
37. 灰色シルト (腐蝕物ほとんど含まず)
38. 灰色シルト質腐蝕層 (ほとんどが腐蝕物)
39. 灰色シルト (腐蝕物ほとんど含まず)
40. 茶灰色シルト質腐蝕層 (腐蝕層と灰色シルトの薄い互層)

※10~12を「上層」として、12を「黒層」として、15を「暗灰色シルト (下層)」として、20を「腐蝕土層」として取り上げる。

図19 遺構実測図(10) (S=1/60)

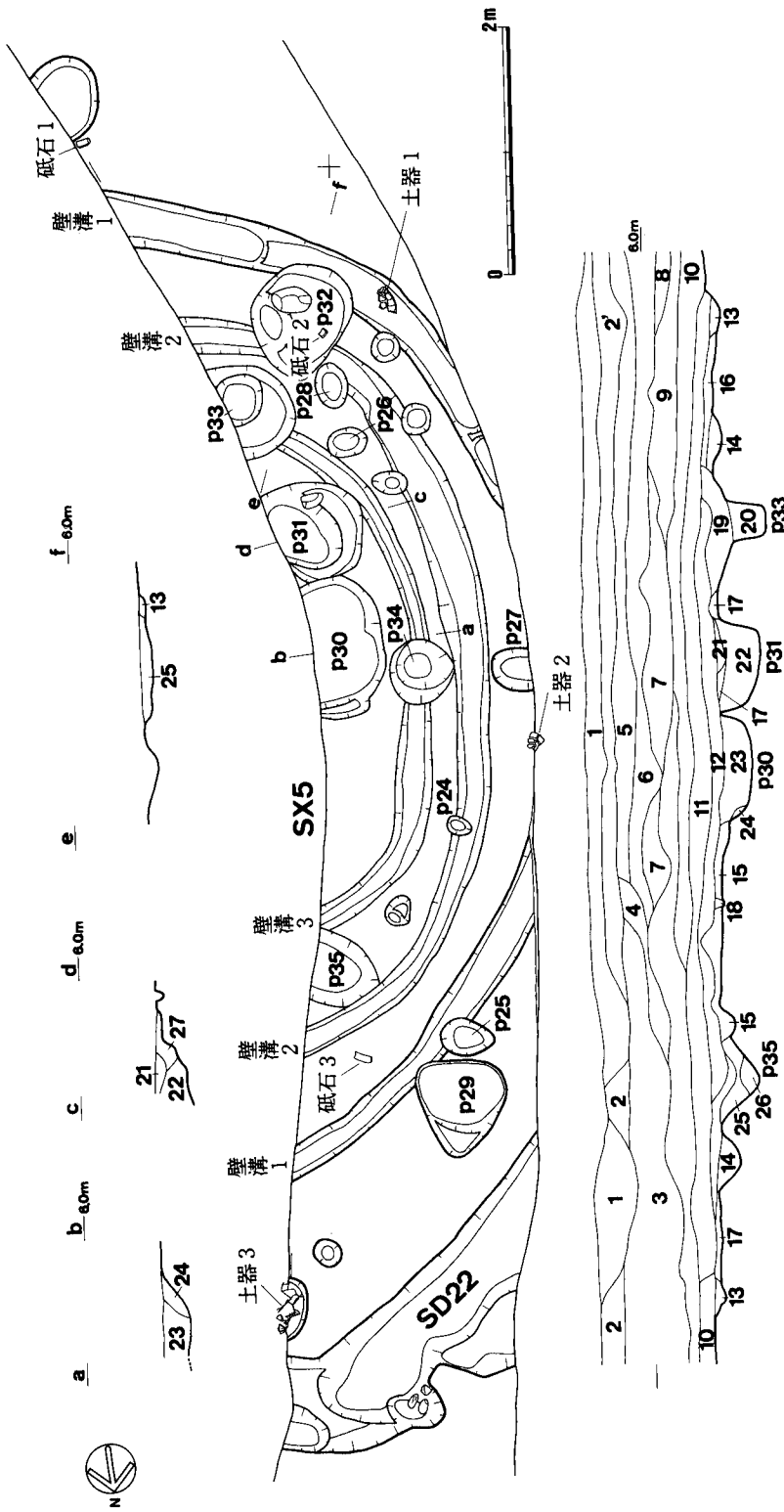


1. だく青灰色砂質シルト (しまりなし)
2. 灰褐色砂質シルト (1より硬く7よりやわらかい)
3. 褐灰色細～中砂
4. 灰褐色 (砂質) シルト (2より灰色強く、しまりよい)
5. 灰色砂質シルト
6. 灰色中～粗砂 (シマ状堆積)
7. 赤褐色まじり灰色砂質シルト (中世包含層か)
8. 暗灰色砂質シルト (しまり極めてよい)
9. 黒灰色砂質シルト ()
10. 暗青灰色砂質シルト (しまりよい。遺物多い)



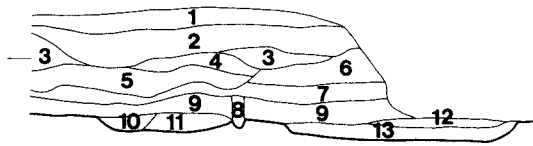
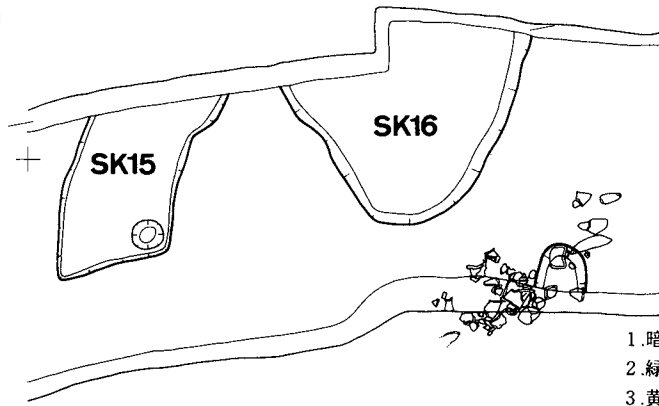
- | | |
|---|--|
| <ol style="list-style-type: none"> 11. 暗い緑灰色シルト質中～細砂 12. 緑灰色シルトまじり暗茶褐色中～細砂 13. 暗灰色シルト質中～細砂 14. 暗灰色シルト質中砂 (しまりよい) 15. 黄灰色中砂 (13より明るく黄色い) 16. 暗灰色砂質シルト (中世包含層か) 17. 暗褐色シルト (13層の砂質混入) 18. 黒灰色砂質シルト 19. 暗灰色砂質シルト (しまりよい。17よりやわらかい) 20. 暗灰色砂質シルト (19より暗い) | <ol style="list-style-type: none"> 21. 暗 (青) 灰色シルト (土器細片多い) 22. 黄灰色極細砂 (地山土) まじりの21 23. 暗青灰色シルトまじり黄灰色極細砂 (22より地山土多い) 24. 暗 (青) 灰色砂質シルト (20よりやや明るく砂多い) 25. (青) 灰色砂質シルト (24より明るく砂多い) 26. 22と同じ 27. 23と同じ 28. だく灰色砂質シルト (黒灰色シルト粒子若干含む) 29. 黄白色極細砂 30. 暗 (青) 灰色シルト 31. 暗灰色シルト質極細砂 (26より地山土多い) |
|---|--|

図20 遺構実測図(1) (S=1/60)

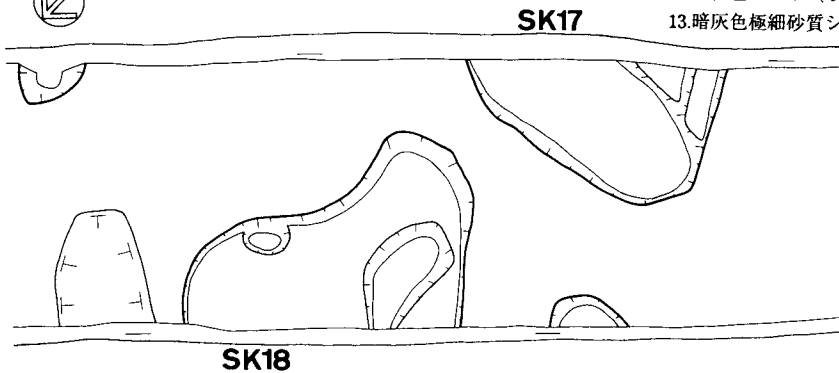


1. 暗緑灰色シルト質中～細砂 (極めてしまり悪い。ボンボン)
2. 緑灰色シルト (均一) 混じり暗黄褐色中～細砂 (しまり悪い。サクサク)
- 2' 2より緑色強く、シルト質。2よりしまりよい
3. 黄灰色中～細砂 (やや暗く、緑色おびる。しまりよくない。サクサク)
4. 灰色シルト
5. 灰色中～細砂 (しまりややよい)
6. 暗灰色シルト質中～細砂 (暗灰色シルトまじり。しまりややよい)
7. 淡黄褐色中砂 (しまり悪い)
8. (淡) 黒色シルト・暗灰色シルトの混合
9. (淡) 黒灰色シルト (トレンチ反衬壁では8に近い)
10. 暗灰色シルト (弥生包含層)
11. 暗灰色砂質シルト (pit30付近では黒色に近い)
12. 黒灰色砂質シルト
13. 暗灰色極細砂質シルト (細かなまだら状の地山土多い壁溝1)
14. 〃 (壁溝2)
15. 〃 (壁溝3含む)
16. 暗灰色砂質シルト (13・14より地山土少なく、暗い)
17. 暗い灰色砂質シルトまじり黄白灰色極細砂 (汚れた地山)
18. 黒灰色極細砂質シルト
19. 小石多く含む暗灰色極細砂質シルト (12より淡く、シルト気味)
20. 礫混灰色極細砂質シルト
21. 淡黒灰色極細砂質シルト (12より淡く極細砂質強い)
22. 礫まじり暗灰色極細砂質シルト (13～15と同じだが、礫まじる)
23. 暗灰色極細砂質シルト (ややあらまじり状に地山土、黒色シルトまじる)
24. 暗灰色シルトまじり黄灰色極細砂 (やや汚れた地山)
25. 13～15と酷似
26. 青灰色極細砂質シルト
27. 淡黒灰色シルトまじり暗灰色砂質シルト (礫まじり。23よりやや暗い)

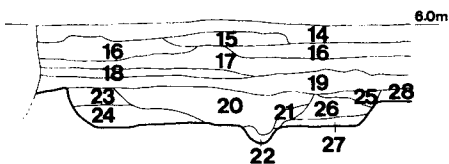
図21 遺構実測図(2) (S=1/60)



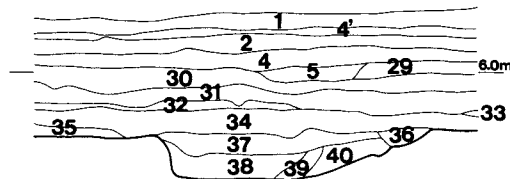
1. 暗緑灰色シルト質中～細砂 (しまり悪い)
2. 緑灰色シルトまじり暗黄褐色中～細砂 (しまり悪い)
3. 黄灰色中～細砂 (やや暗く、緑色がかかる。しまり悪い)
4. 灰色中～細砂 (しまりややよい)
5. 淡黄褐色中砂 (しまり悪い)
6. 暗灰色砂質シルト (しまり極めてよい 中世包含層か)
7. 黒灰色シルト
8. 暗灰色シルト (弥生包含層)
9. 暗灰色シルト (8より明るい)
10. 暗灰色シルト (炭含み、9よりやや暗い)
11. 灰色極細砂質シルト (10より地山土多く含む)
12. 暗灰色シルト (9・10より暗く、粘性高い)
13. 暗灰色極細砂質シルト



SK18

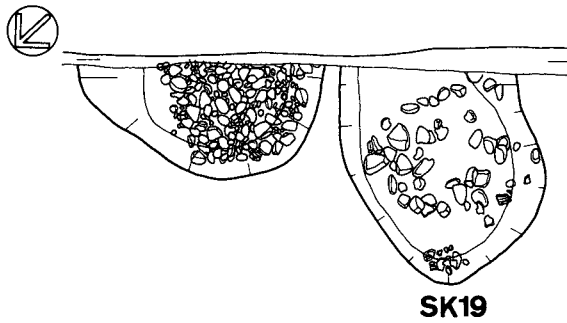


14. (暗) 灰色シルト質中～細砂
15. 暗灰色砂質シルト (しまり極めてよい)
16. 暗灰色シルト (6に連続。中世包含層か)
17. 黒灰色シルト (7に連続)
18. 淡黒灰色シルト
19. 暗灰色シルト (9に連続。弥生包含層)
20. 暗灰色シルト (19より淡く、粘性弱い)
21. 灰色極細砂質シルト
22. 暗灰色シルト少量まじり黄灰色極細砂
23. 暗灰色極細砂質シルト

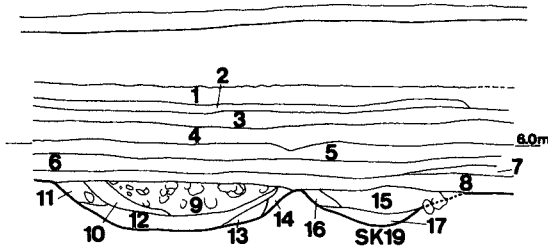


24. 暗灰色シルト (地山土ブロックが多く、20より淡い)
25. 暗灰色シルト (24より淡く、28より暗い)
26. 暗灰色極細砂質シルト (25、27より淡い)
27. 暗灰色シルト (25より淡く、26より暗い)
28. 暗灰色シルト (地山土多く含み、24より淡い)
29. 灰色シルト質細～中砂 (暗灰色シルトブロック含む)
30. 暗灰色シルト (6に連続。中世包含層か)
31. 黒灰色シルト (7に連続)
32. (暗) 灰色シルト
33. 淡黒灰色シルト (31・34の混合土)
34. 暗灰色シルト (弥生包含層)
35. 暗灰色極細砂質シルト (34と地山の混合土)
36. 暗灰色シルト (34より淡く 地山含む)
37. 暗 (青) 灰色シルト (34より暗い)
38. 暗灰色極細砂質シルト (39より粘性高い)
39. 暗灰色極細砂質シルト
40. 灰色シルト質極細砂
41. 灰色シルト質 (中～) 細砂 (しまりよい)

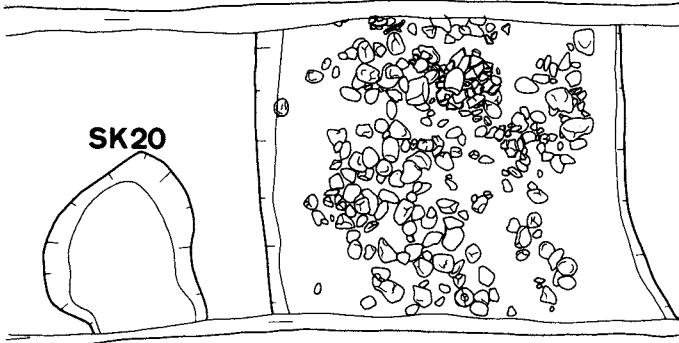
図22 遺構実測図(12) (S=1/60)



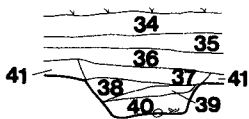
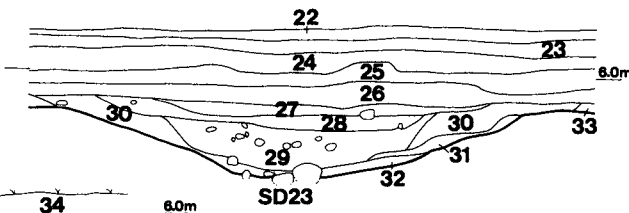
SK19



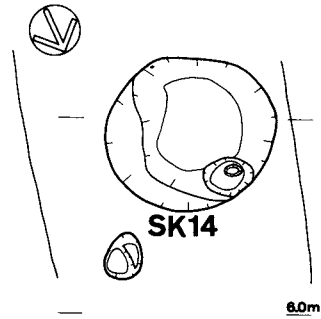
SD23



SK20

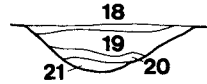


34. (暗) 灰色中砂
35. 暗灰色砂質シルト
36. 黒灰色シルト (7・26と同じ)
37. 灰色シルト
38. 灰色極細砂質シルト (37よりバサバサする)
39. 暗灰色極細砂色シルト (40よりバサバサする)
40. 暗灰色シルト
41. 暗灰色シルト (弥生包含層。ここでは39・40より淡い)



SK14

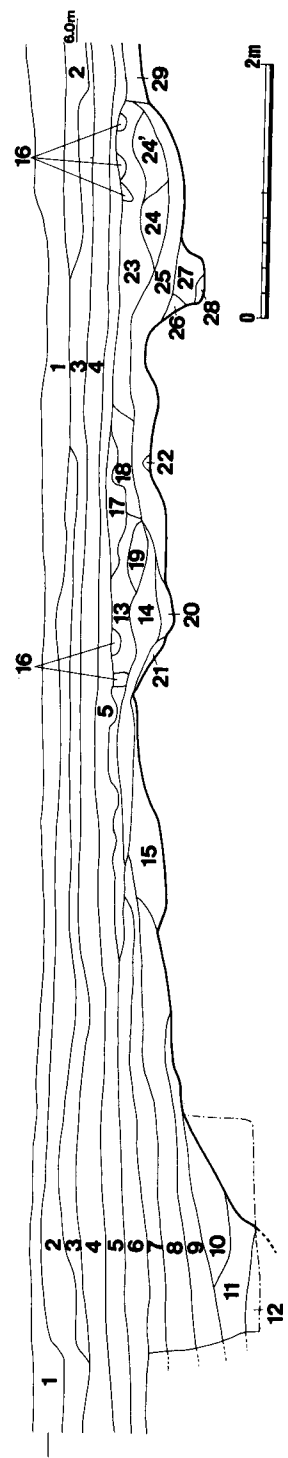
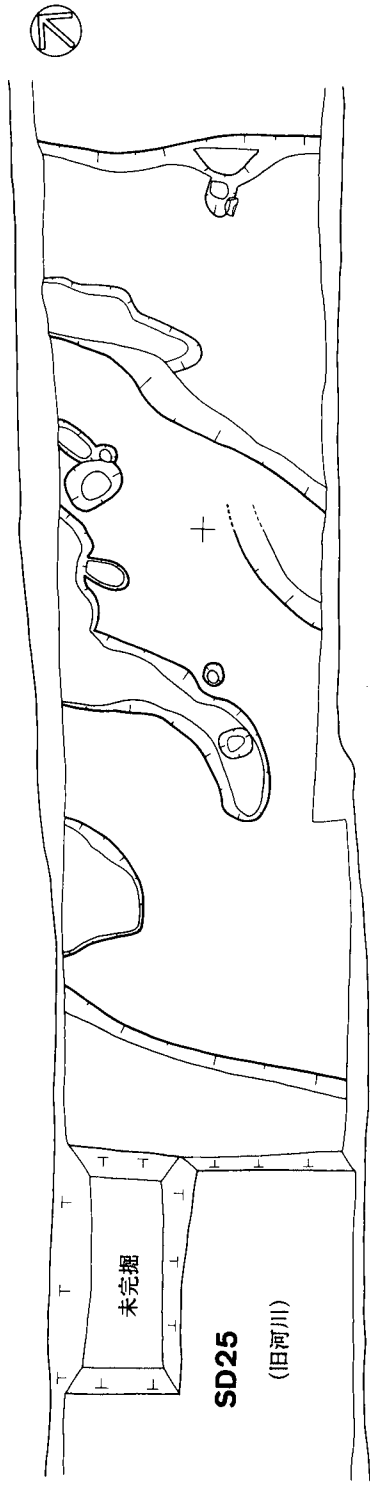
6.0m



0 2m

1. 暗緑灰色シルト質中～細砂 (極めてしまり悪い)
2. (暗) 灰色シルト質細砂
3. 灰色シルト質中～細砂
4. (暗) 灰色シルト質中砂 (3より暗く、砂粗い)
5. 暗灰色シルト
6. 黒灰色砂質シルト
7. 黒灰色シルト
8. 暗灰色シルト (弥生包含層)
9. 円礫 (灰色砂質シルト充填)
10. 灰色シルト (炭まじりで少し汚れる)
11. 灰色極細砂質シルト (10よりバサバサする)
12. 灰色砂質シルト (11より砂粗い)
13. 淡灰色砂質シルト (11よりバサバサする)
14. 灰色シルト (13よりシルト気強く、やや黄色おびる)
15. 暗灰色シルト (黄灰色シルトブロック混。8より暗い)
16. 暗灰色シルト (15よりやや淡い)
17. 暗灰色シルトと黄灰色シルトの混合層
18. (暗) 灰色極細砂質シルト (19より茶色い)
19. (暗) 灰色シルト (炭比較的多く含む)
20. だく黄灰色極細砂質シルト (地山に暗灰色シルトのまじったもの)
21. 暗灰色シルト
22. だく暗灰色シルト質中～細砂
23. 暗黄褐色中～細砂
24. 暗灰色シルト質中 (～細) 砂
25. 暗灰色砂質シルト
26. 黒灰色シルト (7と同じ)
27. 黄灰色シルト
28. 暗灰色シルト
29. 黒灰色シルト (礫多い)
30. (暗) 灰色シルト
31. (暗) 灰色極細砂質シルト (30よりバサバサし、淡い)
32. 灰色極細砂質シルト
33. 暗灰色シルト (弥生包含層。27より明るい)

図23 遺構実測図(13) (S=1/60)



- | | | |
|--|--|---|
| <p>1. だく(黄) 灰色中砂</p> <p>2. 灰色中砂</p> <p>3. 灰色シルト質中砂 (2よりやや暗く、暗灰色シルト粒含む)</p> <p>4. 暗灰色砂質シルト</p> <p>5. 黒灰色シルト</p> <p>6. 赤褐色がかった灰色粗砂</p> <p>7. 灰色極細砂 (粗砂含み淘汰悪い)</p> <p>8. 暗灰色シルト質細砂</p> <p>9. 黒灰色シルト (5より淡く砂気が強い)</p> <p>10. (緑) 灰色極細砂質シルト</p> | <p>11. 暗灰色シルト (10よりやや暗く腐蝕植物遺体含む)</p> <p>12. 褐色礫含み粗砂・青灰色極細砂の互層</p> <p>13. 黄灰色砂質シルト (極めて淘汰悪い しまりよい)</p> <p>14. (暗) 灰色シルト質極細砂 (13より暗く 15より明るい)</p> <p>15. 暗灰色シルト質極細砂 (暗灰・灰・黄灰色ブロック混入)</p> <p>16. 15と同じ</p> <p>17. 黄灰色シルト質 極細砂粒含む黒灰色砂質シルト</p> <p>18. 灰色粗砂 (淘汰悪い。褐色の部分あり)</p> <p>19. 灰色細砂 (14より明るく、13より暗い)</p> <p>20. 青灰色シルト質中砂</p> | <p>21. 青灰色極細砂質シルト</p> <p>22. だく灰色細砂 (汚れた地山土)</p> <p>23. 明黄灰色 (砂質) シルト</p> <p>24. 褐色まじり灰色中～粗砂</p> <p>24'. 灰色砂質シルト</p> <p>25. 暗灰色シルト質粗～細砂</p> <p>26. 明灰色極細砂 (きれいな地山土)</p> <p>27. 黄灰色極細砂まじり暗灰色砂質シルト (25より暗い)</p> <p>28. 灰色砂質シルト</p> <p>29. 暗灰色砂質シルト (25より明るい、5～7トレンチの弥生包含層に相当する)</p> |
|--|--|---|

図24 遺構実測図(15) (S=1/60)



1トレンチ調査前風景（東から）



6トレンチ調査前風景（南から）



1トレンチ調査風景（東から）



6トレンチ調査風景（南から）



1トレンチ工事風景（東から）



6トレンチ工事完了風景（南から
1991.7.3 撮影）



1トレンチ工事完了風景（東から
1991.7.3 撮影）



3トレンチ冠水状態（西から）

第6章 遺物

第1節 土器

土器については出土地点・層位ごとにまとめて図版を作成したが、資料整理に不備な部分があり、図版作成後に出土地点に誤りがあるものがいくつか確認された。そのため、みにくい部分がある点をお許し願いたい。

SD24出土土器（下層＝1～20・中層＝21～52・上層＝53～91）

この溝から出土した土器は、本遺跡のなかでもっとも多かった。ただし、遺物の出土する部分に限られており、3つの層に分層して取り上げることができた。層の中間や不明瞭なものは、より上の層に帰属するものとして現場で取り上げたので、本来下層に属すべきものでも中層として取り上げたものがある。

31は下層、中層、上層のすべてから破片が出土し、接合できることを製版後に確認した。よって、31は下層に属する土器である。下層出土土器のなかでも、5と13は他よりもやや古い可能性がある。49と50は同一個体の可能性がある。46の口縁内面には縄紋が付けられ、瘤状の突起も付けられている。

下層では凹線文土器が確認できないが、中層ではごくわずかに凹線文土器（35）を確認できる。そのことから、下層は磯部運動公園遺跡の段階に、中層は戸水B遺跡の段階に比定できるであろう。ただし、中層では凹線文土器が極めて少なく、大量に存在する戸水B遺跡とは大きく異なっており、時期差、もしくは性格の差などが想定される。上層は溝埋没後の凹地の堆積層であり、下層の段階からSX2やSX5の段階までの土器が混在していた。溝資料であることから、多少の混入や時間幅の広さなどは考慮されるが、大まかには層序関係が時期差を示しているであろう。

木田清氏の御教示によると、SD24下層出土土器の半数以上が胎土に海綿骨片を含んでいる。それに対して、中層出土土器には少ない。通常、松任市域には海綿骨片は少なく、近距離にある法仏遺跡でも海綿骨片を含む土器は少ないという。海綿骨片を多く含む土器はもっとも近いところでは伏見・高橋川の周辺以北である。下層出土土器に海綿骨片を含むものが多い点は松任市域にあっては特異である。時期差と産地の差が下層と中層の土器の間に表れている可能性があることが分かった。重要な指摘であり、当遺跡全体の土器もそうした観点で整理すべきであろうが、果たせなかった。今後の検討課題としたい。

竪穴住居出土土器

SX5（92～94）

SX5は上面が削平されており、少ないながらもほぼ床面直上に相当する出土状態を確認できた。SD24の中層にあたる段階の可能性はある。なお、SK14から出土した137はSX5と接合した資料である。

SX2（95～102）・SX3（103～106）

SX2、SX3は、ともに弥生時代後期後半の竪穴住居と推定されるが、床面から出土した土器は少

なく、図示したものもほとんどが住居廃絶後の凹地に堆積したものであった。

土坑出土土器

多くの土坑が弥生時代中期後半の段階のものと考えられるが、大量の土器を出土する土坑が少なく、時期を限定できる遺構は少ない。若干後期に下がる土坑も確認できる。

SK6 (107～111)

107はSK5出土土器と接合した。

SK7 (112・113)

SK5 (114～123)

117は実際にはもっと器形が大きく、器壁ももっと傾くことを製版後確認した。

SK8 (124～127)

SK9 (128)

SD19とも接合した。

SK10 (129)・SK11 (130～132)・SK13 (133)・SK18 (134～136)・SK14 (137～139)

SK17 (140～150)

SD24の下層段階に相当するようなものが多い。144の口縁端部の装飾は極めて丁寧である。

SK21 (151～155)

弥生時代後期の土器が主体を占めている。

SK19 (156～164)

弥生時代後期の土器が主体を占めている。156のみ混入品であろう。

SK20 (165～166)

弥生時代後期と推定されるが土器量が少ない。

SK24 (167)

SK23 (168～171・174～178) (172・173はSK23直上包含層出土)

168は明らかに混入品である。172・173は土坑内からの出土ではなく、その上面からの出土であることを製版後確認した。そうした混入品を除けば、比較的まとまった時期の遺物であることが分かる。久田正弘氏の御教示によれば169は、中部高地系であり、底部に木の葉の圧痕が残っている。胎土に黒色の雲母を含みやや異質である。171は口縁部が水平ではなく、わずかではあるが何箇所か波状に反りあがって、平面形が五角形をなすものである。胎土にガラスを割ったような石英粒を含んでおり、胎土からも明らかな搬入品であると考えられる。

溝出土土器

SD15 (182)・SD18 (193～202)・SD19 (184～187)・SD20 (183)・SD23 (188～191、203～212)・SD? (192)

SD18以外はほとんどが弥生時代後期の土器である。SD18のみ古い段階のものが多い。しかし、201のような中期でも古いもの、198のように後期のもの、194のようなごく新しい遺物までを含んでいる。

ピット出土土器

P14 (179) ・ P51 (180) ・ P60 (181)

その他

C-192区 出土土器 (213)

いわゆる深鉢形の土器。外面に条痕文が残る。弥生時代前期頃の土器と推定される。SX2の東側から出土した(図8参照)。出土層位は図6の11層の上位部分であった。遺構検出はこの11層上面でおこなったが、この部分で11層中から土器がたまたま顔を見せていたため、周辺の11層上面を削ったところ、この土器がまとまって出土した。この時期の土器の出土量は極めて少ないが、11層の掘り下げや、全面的な発掘調査を行えば資料が増加したと推定される。今回は十分に調査できなかった。

包含層等出土遺物 (214~260)

弥生時代中期後半~後期にかけての土器がほとんどである。弥生時代以外の遺物としては248・255~260の土錘がある。中世~近代にいたる土錘であろう。いずれも表面採集、もしくは排土採集されたものである。225や168のような中世後半の「かわらけ」の他、図示しなかったが、青磁や越前焼きの小片がごくわずかに出土している。

なお、254は土器に注記がされておらず、整理段階で別遺跡から混入した可能性があることを製版後確認した。この段階の土器は254以外に当遺跡では一切確認されていない。整理段階の不手際を反省している。

土器については、久田正弘氏や木田清氏をはじめ、弥生土器を見る会の多くの方々から御教示をいただいたが、十分に生かすことができなかった。記して感謝するとともに、実力不足を反省したい。

第2節 木製品

木製品はすべてSD24の下層から出土した。樹種同定は櫛のみ行った。また、261と335以外は調査後の保管が悪く、整理・実測以前に乾燥させてしまった。そのため、若干の歪みが生じている。なお、図示した以外にも鋤未製品と思われる加工木などが数点確認されている。

下層は腐蝕土層であるため、自然木と思われる木片も多かったし、炭化米も出土している。土壌洗浄を行って微細な種子なども確認しているが、今回は分析することができなかった。

罎 (261)

長さ約42cm、幅約23cm、深さ約3.2cm、高さ約4.4cmを測るが、かなり柔らかくなっており、若干変形していると思われる。くり抜いて成形しており、木目の観察から広葉樹と思われる。

容器 (262)

長さ30cm以上、幅7cm以上、深さ4.5cm以上を測る。厚さは底が約1.4cm、側が0.7~0.9cmである。くり抜いて成形した長方形の容器と思われる。

杵 (264)

小型の杵状木製品。明瞭な使用痕は確認できない。握り手の部分は加工痕が明瞭で、先端は折れている。

杭 (266)

直径約3.5cm、長さ約21.7cmを測る。表皮を残した幹で、先端は鉄器によって尖らせており、その刃こぼれの痕跡が確認できる。上端にも鉄器で周辺から何度も切り込みを入れて切りとった痕跡が確認できる。地面に打ち込んだあとで切ったのであろうか。

用途不明品 (263・265)

263は両端を削り出してソケット状にした板状の棒である。加工痕が明瞭に確認できるが、鋭利な加工痕ではなく丸みを帯びている。やや光沢をもった面の状態などからも「手ずれ」した痕跡と推定される。

265は棒状の加工木で下端部分が折れている。264の上端かとも推定されるが、木目などから明らかに異個体である。

櫛 (335) (144頁)

残存長8.6cm、最大幅6.3cm、ムネの残存長6.2cm、歯の長さ2.4cmを測る縦長の櫛。推定全長は約9.6cmと推定される。歯の断面形は長楕円形で長径約3mm、短径1.5mmを測る。ムネ部分は断面長方形で面取りをしていない。そのため長辺約3～4mmと歯よりも若干長い。歯の部分は先端を尖らせたり、面取りをしたりして滑らかな形に加工している。

棒をたばねて折り曲げられたと推定される。折り曲げた部分では薄く削り出して曲げやすくしている。桜の皮状のもので歯と横棒を縛りつけている。横棒は櫛の表裏両面から当てている。表面に彩色などの痕跡は一切確認されない。

なお、鈴木三男氏によって樹種はアジサイ属ユキノシタ科ノリウツギと鑑定されている〔鈴木1989〕。鈴木氏が1988年当時までに分析したなかではじめての材質である。鈴木氏のご教授によると、ノリウツギはねばっこく硬い木であり、珍しい材質ではあるが、吟味された樹種であると推定される。

このような櫛の類例は愛知県朝日遺跡で確認されている〔宮腰1992〕。朝日遺跡の櫛は現存長9.6cm、幅4.9cm、厚さ0.4cmで、「10本の細い竹板を折り曲げ、屈曲部と両端を樹皮紐で縛ってつくられている。全体に赤彩がなされていた痕跡が残っている」(P16)という。樹種同定はなされていないため、「竹板」とは肉眼観察による判断と推定される。時期は朝日遺跡のⅡ期～Ⅲa期に比定され、野本遺跡とほぼ似た時期と判断される。折り曲げて樹皮でしぼる点は共通するが、野本遺跡では彩色の痕跡が一切確認できないのに、朝日遺跡では全体に赤彩されている点が異なる。また、野本遺跡では横棒をあてているが、朝日遺跡では確認できない。朝日遺跡の櫛を実見しておらず、実測図からの推定だが、横棒が抜け落ちた可能性も想定しておきたい。

多少の相違点があるとは言え、出土櫛のなかではこのような類例はほとんどなく、時代的にもおなじであることから、この2例は櫛の歴史を知る上で極めて貴重な発見である。その意義については第7章で考察する。

なお、金沢市藤江B遺跡の古墳時代前期の井戸からラセン状になった樹皮が出土しており(石川県立埋蔵文化財センター発掘調査)、野本遺跡出土櫛の樹皮の結束方法と極めて類似している。結束された部材が残っていないため断定できないが、同様の櫛であった可能性がある。

[参考文献]

宮腰健司編 1992 『朝日遺跡』Ⅲ 勸愛知県埋蔵文化財センター

鈴木三男 1989 「1988年度に依頼を受けた木製品の樹種同定結果」『石川県立埋蔵文化財センター年報』第9号
(昭和62年度)

第3節 石製品

石製品には、玉関連遺物として石鋸、石針未製品、玉未製品が確認され、その他に、砥石、石包丁、石斧、打製石器剥片、凹み石、石皿、石錐、摩石、軽石、その他がある(表3参照)。

石鋸

全部で6点出土している。すべて破片で、SD24中層から出土した309を除くとすべて5トレンチ2区(SK11・12・13周辺)の包含層から出土している。厚さ2～4mm程度、唯一幅の分かる309は2.8cmを測る。欠けている306を除き、実測図で下側に向けた辺が擦りきる面と推定され、使用痕が確認される。

石針未製品(314)

314は輝石安山岩で上下に擦りきり痕跡がある。これ以外に玉未製品としたものの中に石錐未製品が含まれている可能性がある。

玉未製品(310～313・315～334)

擦りきり痕跡のあるものを中心に図化した。それ以外にも若干の資料がある。完成に近いものは少なく、320・322・325のように研磨段階まで進んだものはこれ以外にはない。これらは他の玉関連遺物同様、5トレンチ2区から集中して出土しており、この周辺で玉作りをしていた可能性が極めて高い。また、弥生後期の玉が混入している可能性も否定しきれないが、SD24下層でも確実に伴うことなどから、ほとんどが弥生時代中期後半のものとして推定される。石の質も通常の弥生後期に普遍的なやや柔らかいものよりも硬めの石が多い点もその推定を裏付ける。

遺構・包含層出土の緑色凝灰岩を図化しなかったものも含めてトレンチ毎に計測すると、1・2・4・8トレンチ0片・0g、3トレンチ25片・263g、5トレンチ49片・340g、6トレンチ14片・95g、7トレンチ25片・199gであった。

砥石

砥石には入念に加工された角柱状のAaタイプ(284・290・291・300)、板状のAbタイプ(268・283・298)、加工が少なく原石の形状を残す不整形なBaタイプ(269・297)、板状剥落のBbタイプ(293・296)がある。267・295は摂理面で割れているため、AaタイプかAbタイプか識別できないが、おそらく角柱状であったと推定される。300は縦断面が三角形になっており、下端部が丸みを帯びた原石の面を残している。もともと原石の形状を利用していたものが使用を重ねるうちに面を持つようになったのか、もともと角柱状であったものがすり減って断面が三角形になったのか、判然としにくい。とりあえず、やや不整形なAa類としておきたい。

また、石質も緻密なものから粗いものまであり、いわゆる「あら砥石」、「中砥石」、「仕上げ砥

石」に分化していた可能性があるが、表面の風化などを考慮すると基準の設定が難しい。砂岩と推定される269・268・283・284の石質は粗いが、269は特に粗く、284は細粒で緻密である。284を除けばあら砥石的である。それ以外は中砥石～仕上げ砥石的なもので298が特に緻密で仕上げ砥石的である。

歯こぼれをつぶしたと一般に言われている擦痕が293・300で確認され、砥石自体を整形した際の擦痕が267・291・296・297で認められる。284は使用頻度が高かったため、すり減って研ぐ面が反り上がっている。いわゆる「玉砥石」は確認されなかった。玉関連でないと言う証明は難しいが、ほとんどが一般的に利器用と考えられている砥石である。

石包丁 (282・289)

282は磨製の石包丁。もとは半円形であったと推定され、円弧を描く部分に刃が付けられている。裏面は大半が剝落している。網かけした部分は使用痕で、光沢をもった滑らかな面を確認できる。

289は打製の石包丁。大きな河原石を割っただけのもの。網かけの部分は使用痕で、光沢をもった滑らかな面である。原石の面を残した部分には使用痕が明瞭に確認できるが、割った面の使用痕はやや不明瞭である。刃部は当初鋭かったと思われるが、使用のため丸みを帯びている。他の部分が割ったままのやや鋭い切れ口を残しているのとは対象的である。

石斧 (270・281・294・299)

270・294は大型蛤刃石斧。281は偏平片刃石斧で、側面の片側にヒレ状の磨き残しがある。背の部分は欠けているが欠けた部分も磨かれており、何度か研ぎなおされたと推定される。299は小型だが打製石斧の可能性はある。

打製石器剝片 (271・272・274・280・285)

扇状地礫を割った破片が幾つか確認できる。打製石斧や打製石包丁の製作時に生じたものであろう。280は刃を成形しようとしており、製品に近い。当遺跡で打製の石器を製作していた証拠になるだろう。

凹み石 (273)

ほぼ全面に叩打したためと思われる剝落痕が認められる。石質はやや脆い。

石皿 (276・279)

279は自然石の形状を利用した石皿で、中央部分に叩打痕が確認される。一点に集中して叩打しており、叩打痕は径約6cm、深さ約9mmを測るすり鉢状の凹みになっている。叩打痕がある面は全体に磨耗しており、叩きつぶしたものを摩りつぶしたと推定される。279も基本的に同様な石皿であるが、使用頻度が低かったためか、叩打による凹みはごく浅い。図の最も下の面に確認できる。全体に磨耗して滑らかな面を持っているため使用痕との区別が難しいが、叩打痕をもつ面全体が磨耗して若干滑らかになっている。

石錐 (275)

下端部分を板状に削りだした略円筒形の石器。先端部分はやや丸くなり、最先端部分は突起状に盛り上がっている。突起の径は根元部分で約6mmである。先端部分は約5mmであるが、根元部

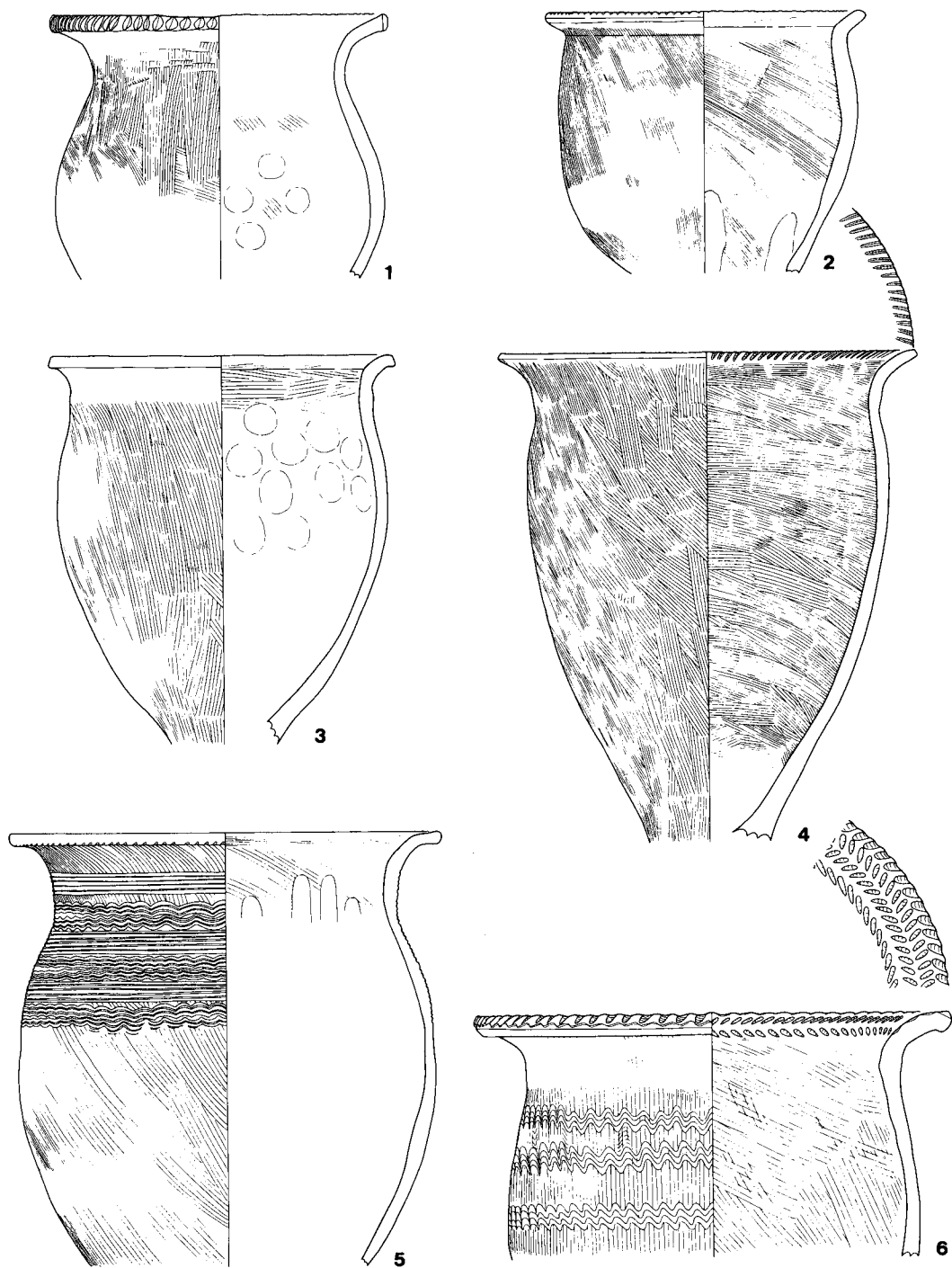


图25 S D24 (下層) 出土土器(1) (S=1/3)

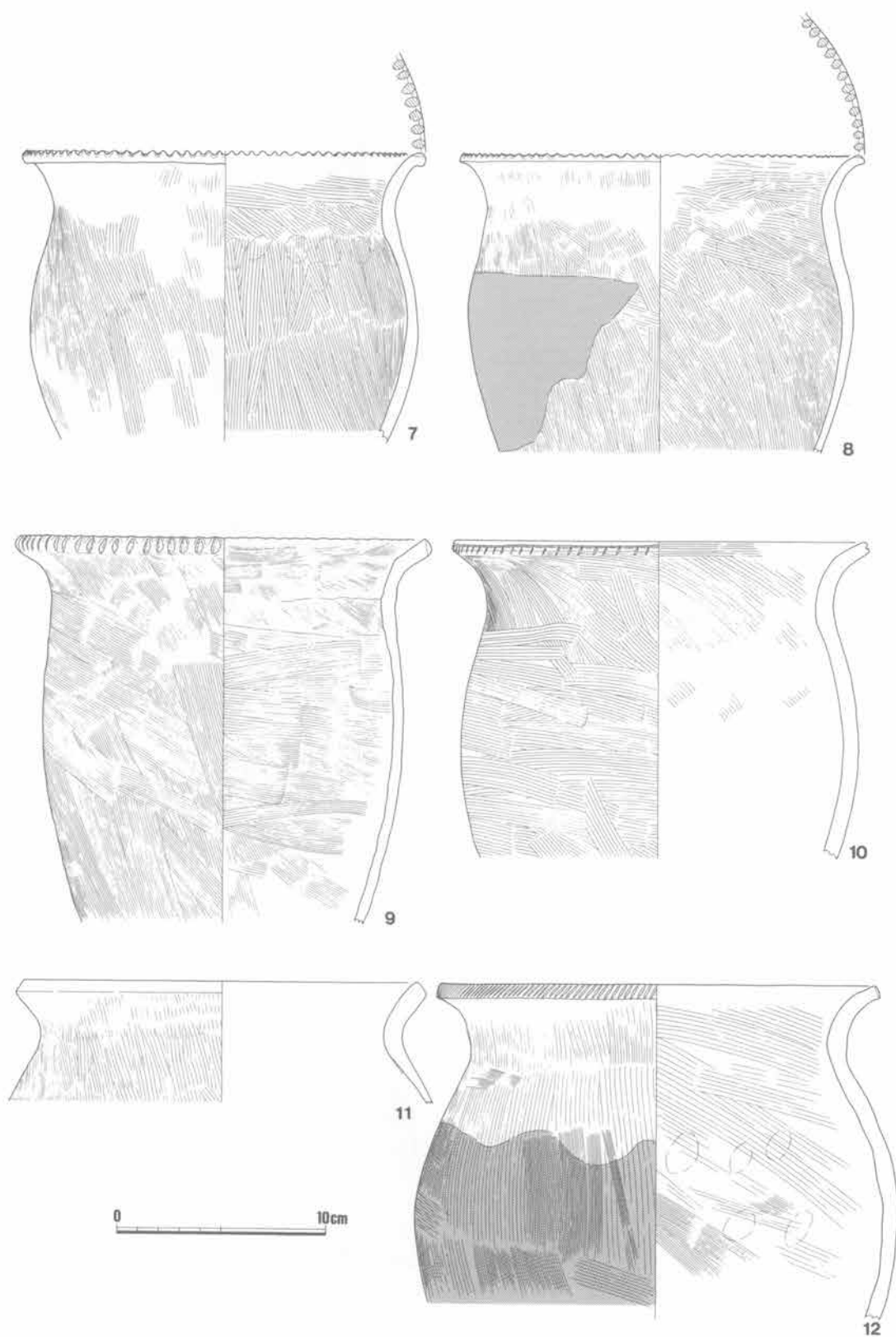


图26 S D24 (下層) 出土土器(2) (S=1/3)

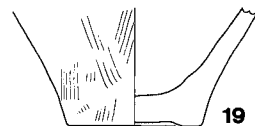
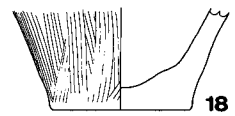
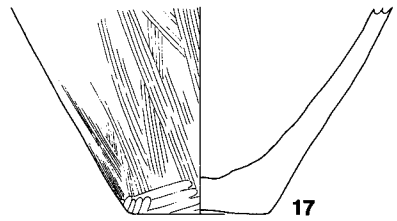
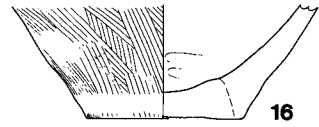
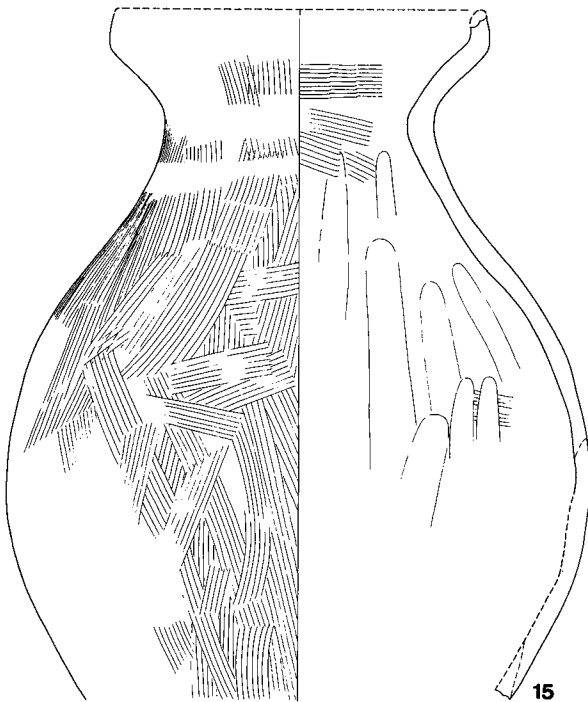
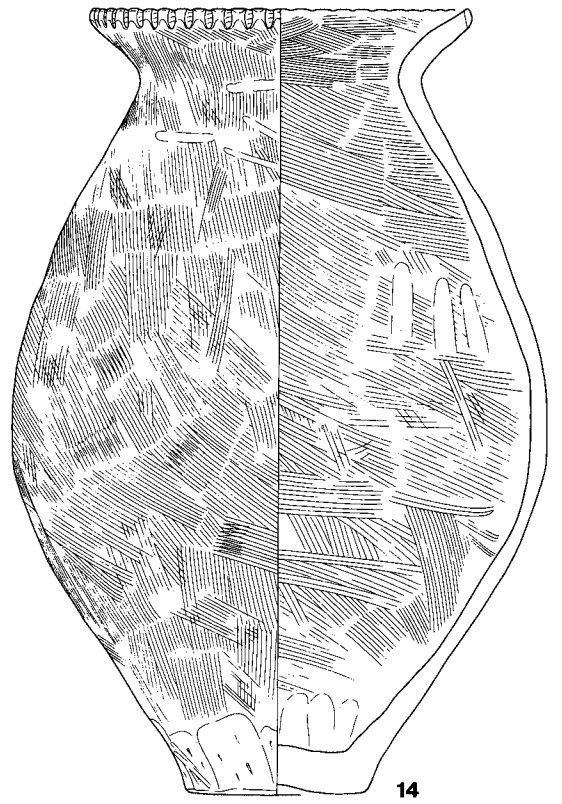


图27 S D24 (下層) 出土土器(3) (S=1/3)

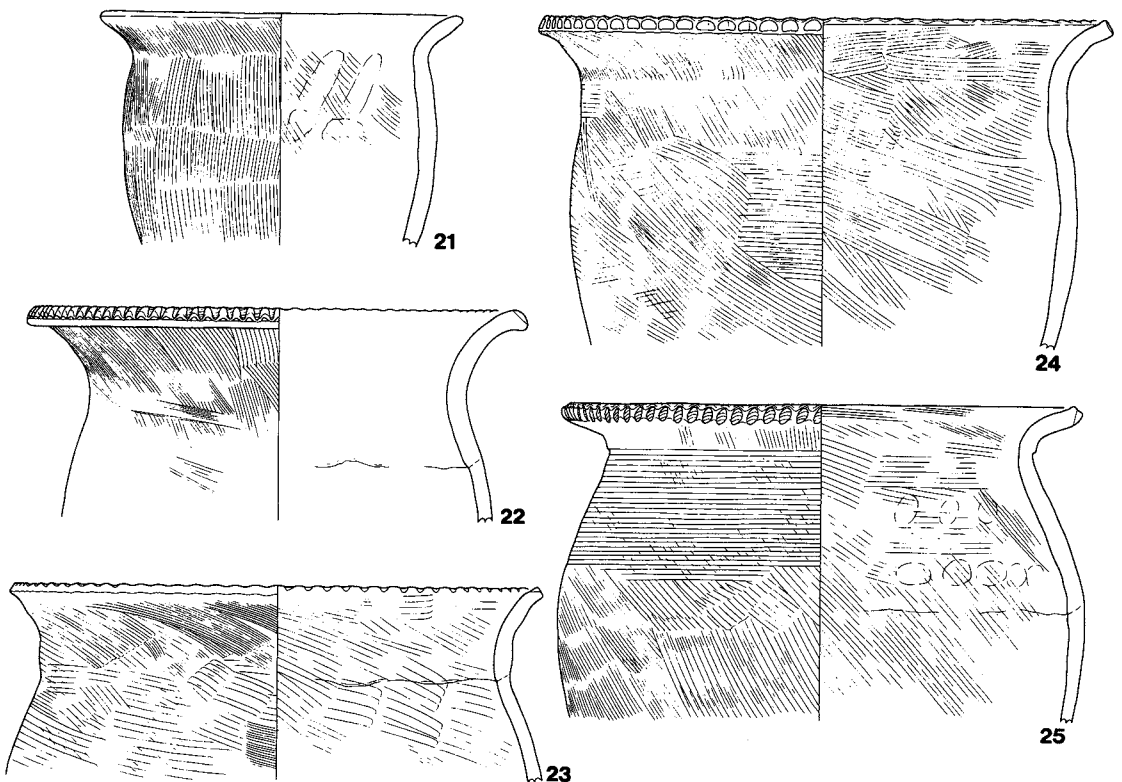


图28 S D24 (下層·中層) 出土土器(4) (S=1/3)

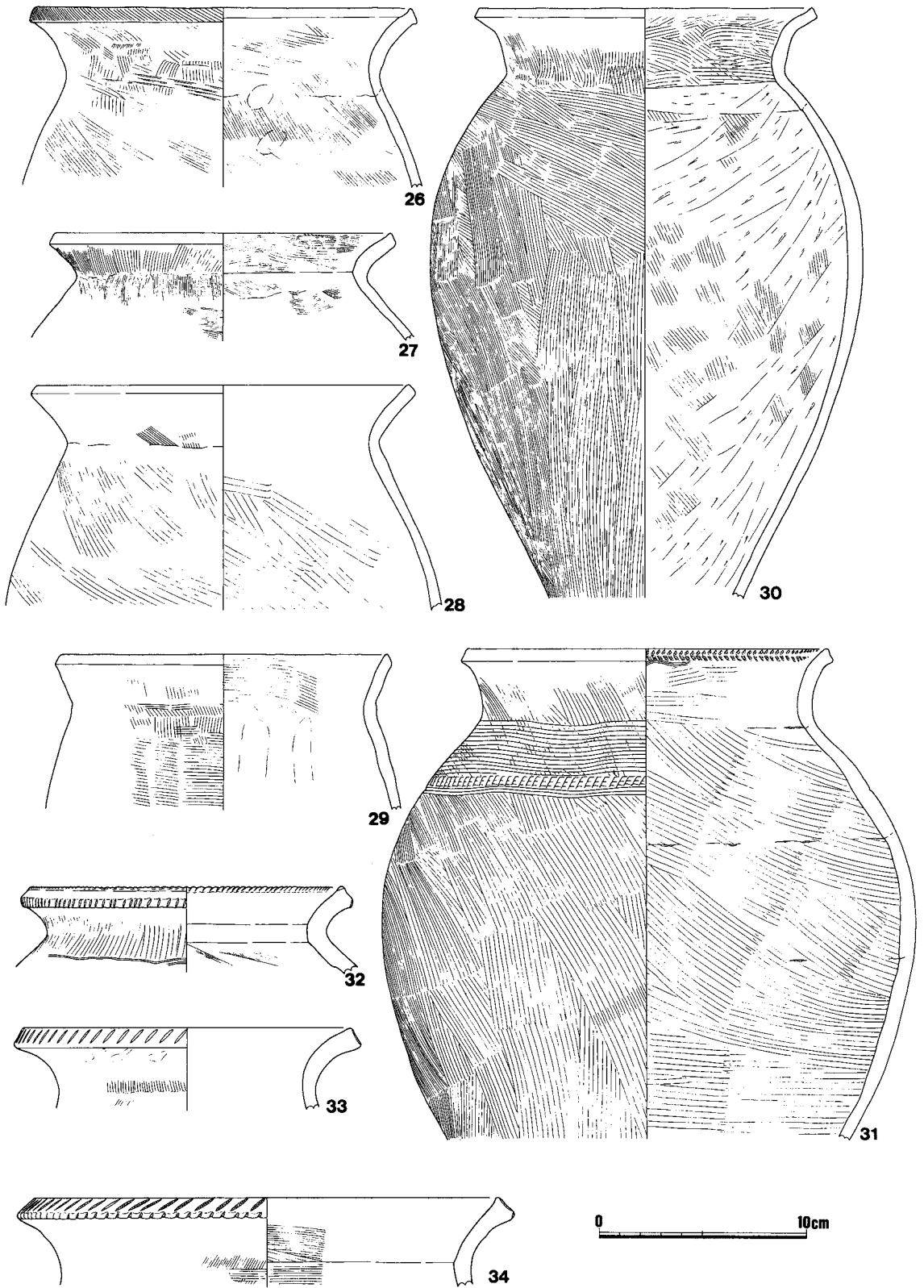


图29 S D24 (中層) 出土土器(5) (S=1/3)

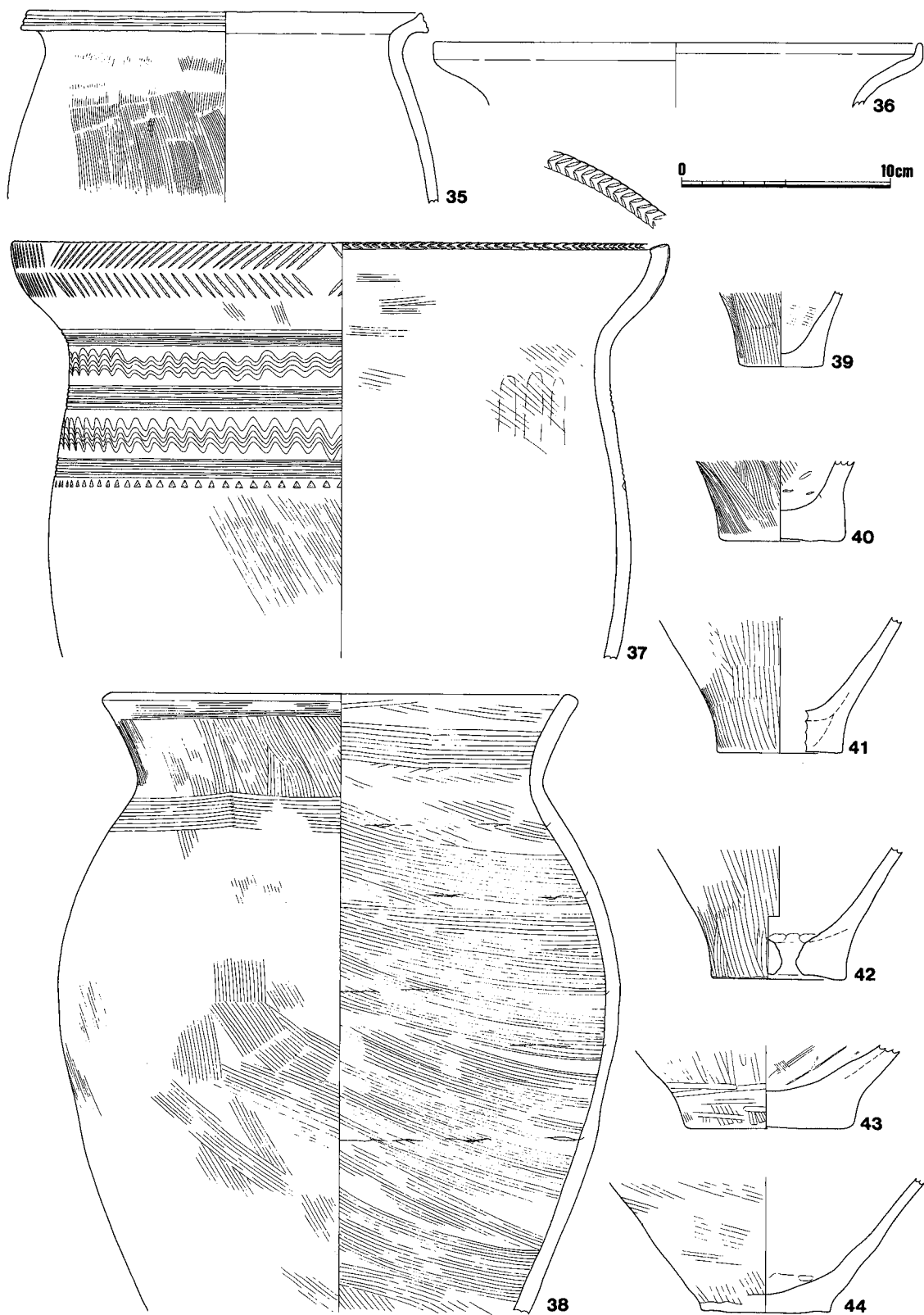


图30 S D24 (中層) 出土土器(6) (S=1/3)

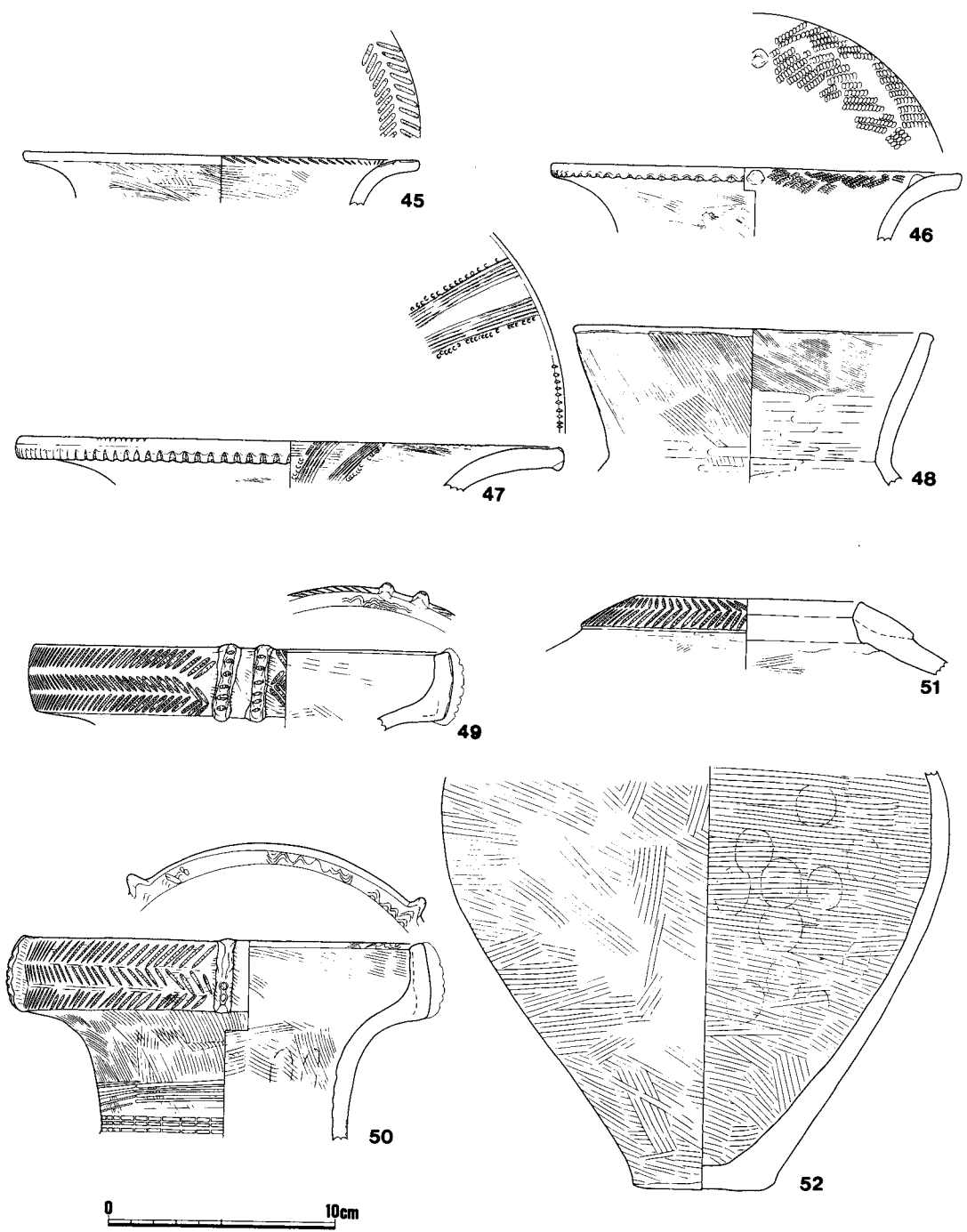


图31 S D24 (中層) 出土土器(7) (S=1/3)

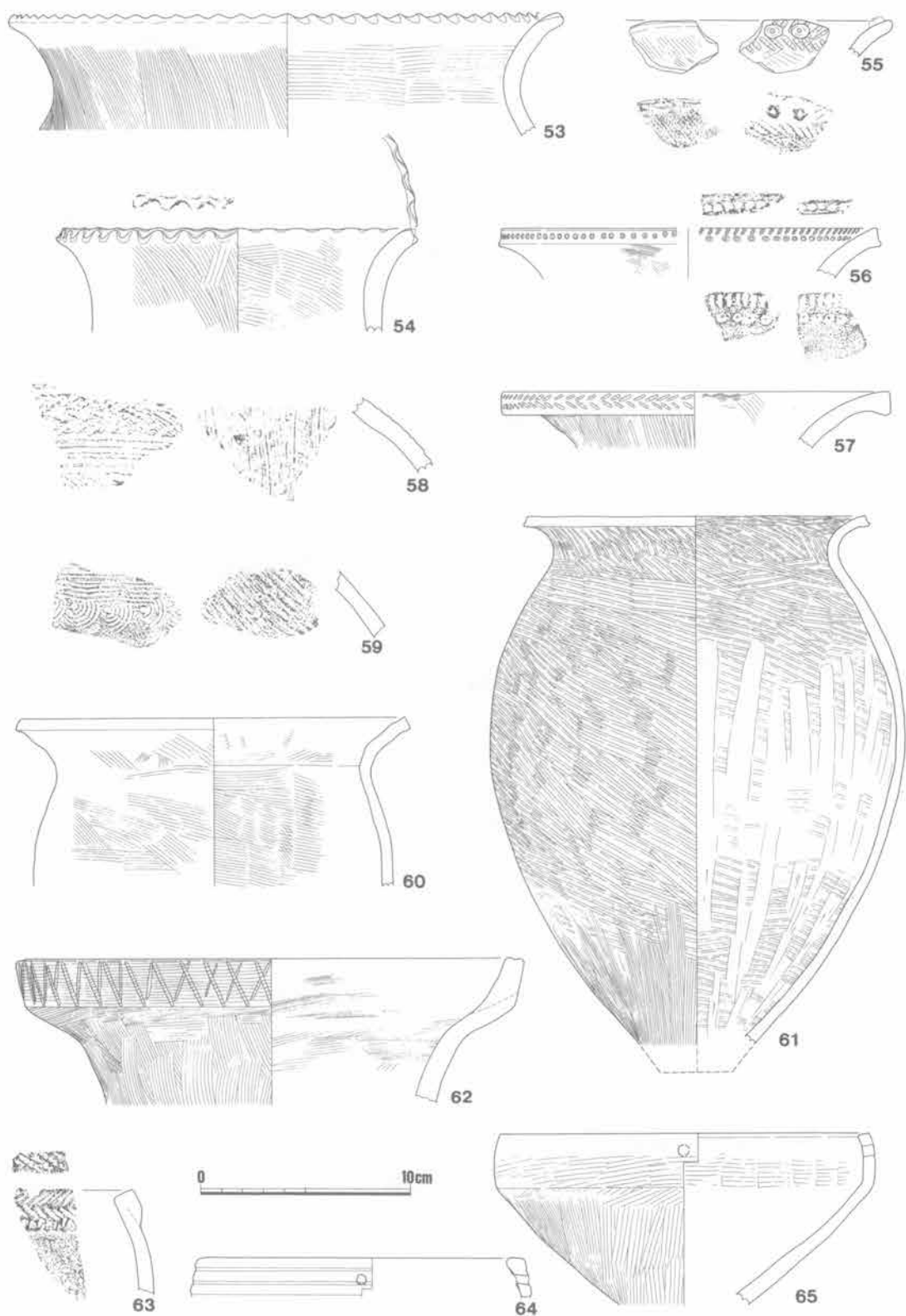


图32 S D24 (上層) 出土土器(8) (S=1/3)

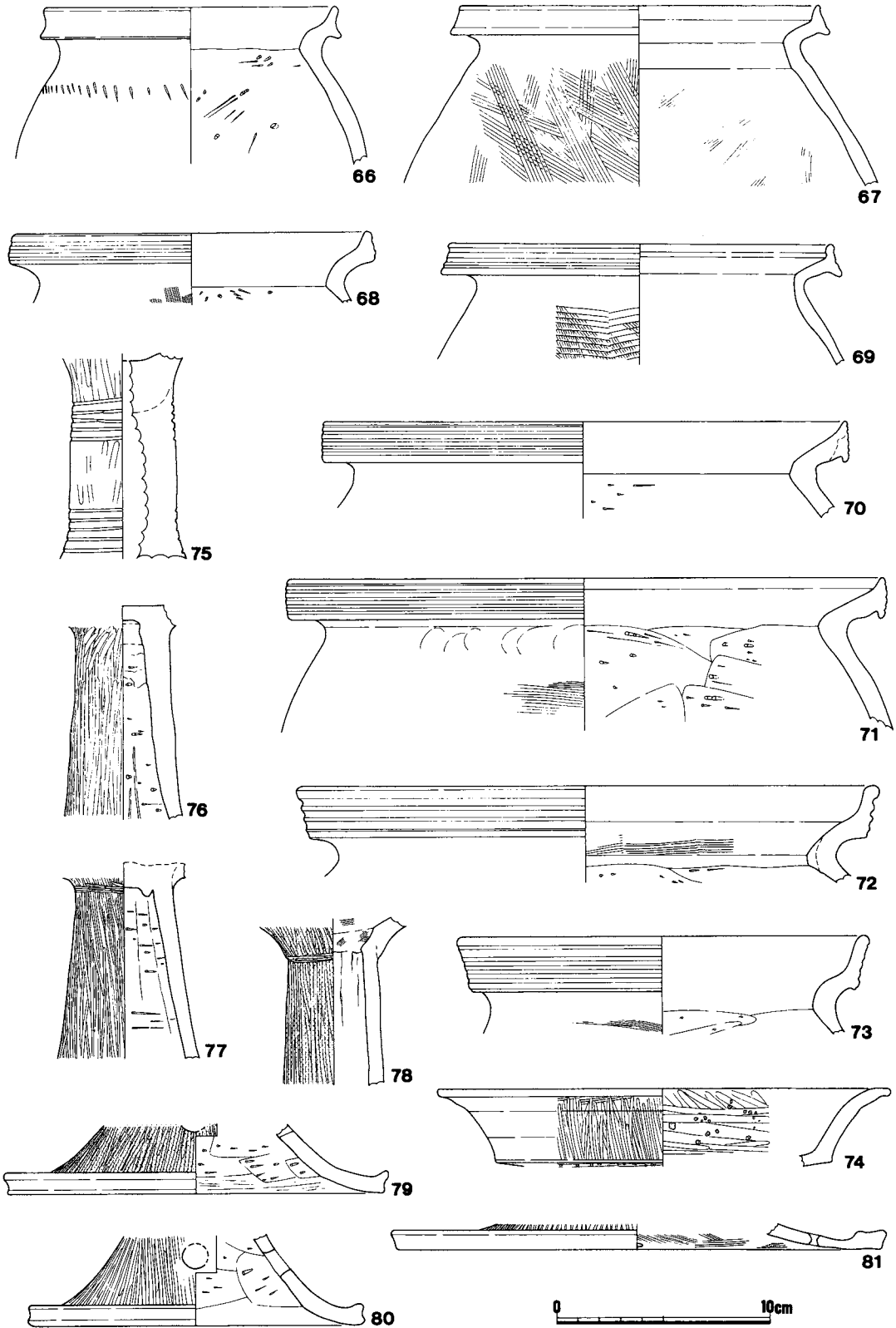


圖33 S D24 (上層) 出土土器(9) (S=1/3)

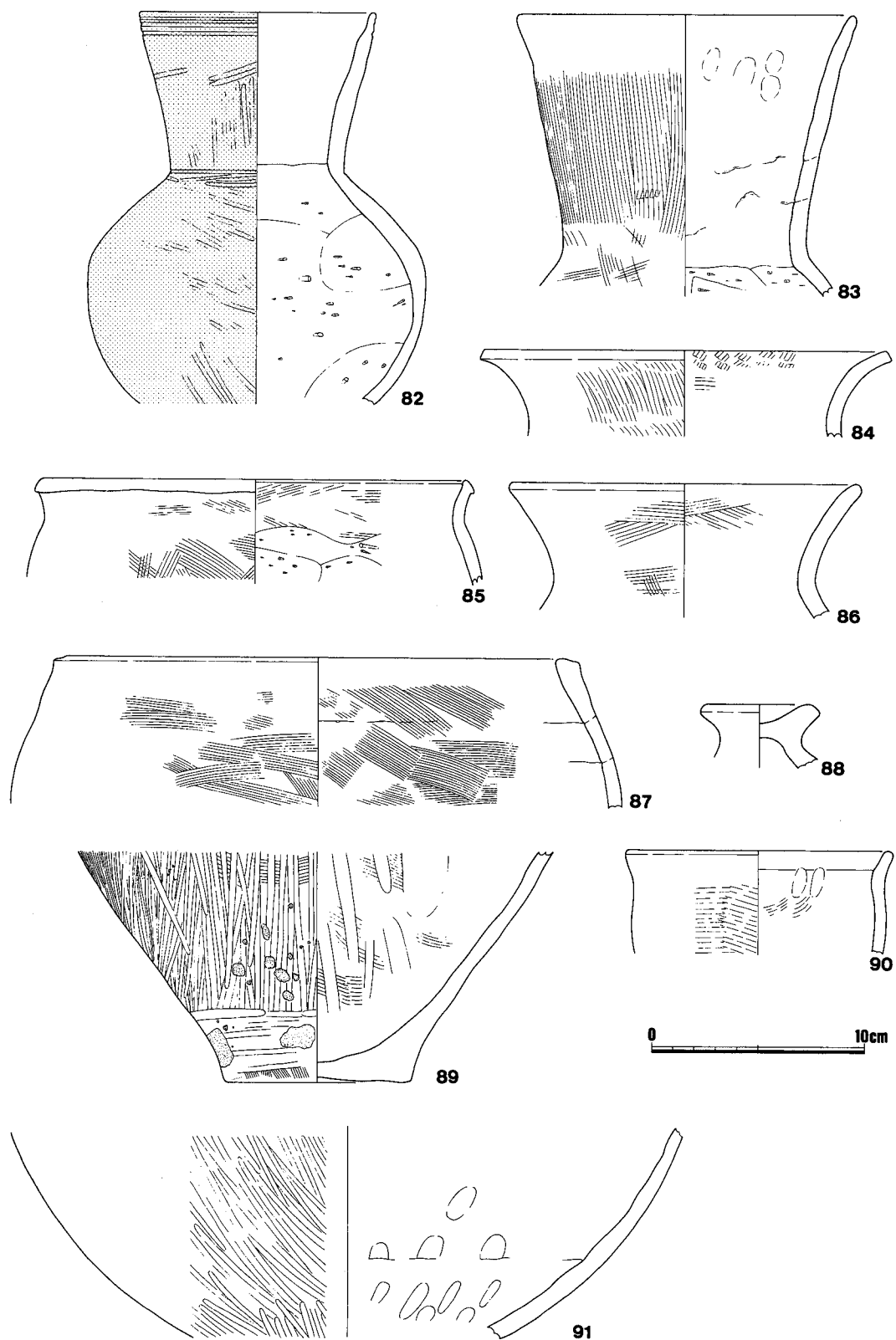
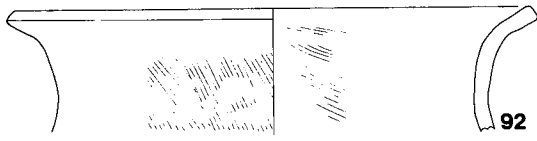
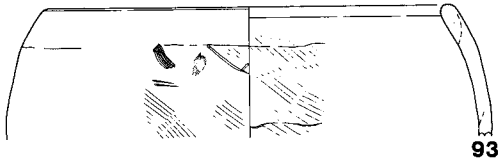


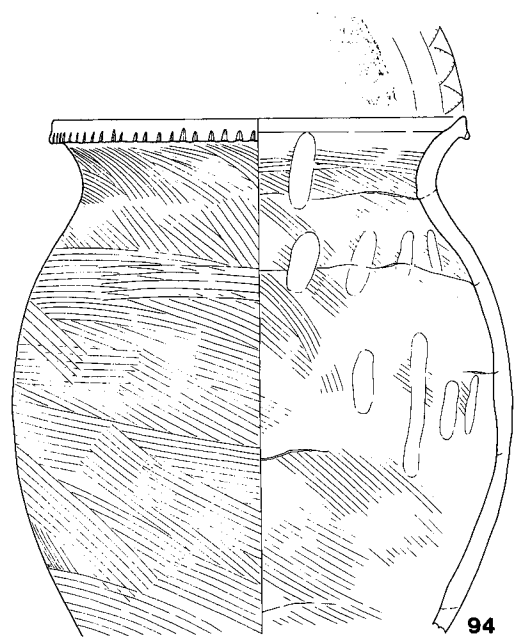
图34 S D24 (上層) 出土土器(10) (S=1/3)



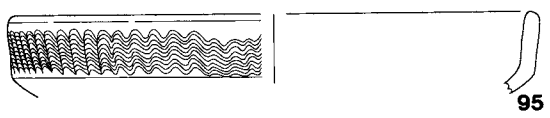
92



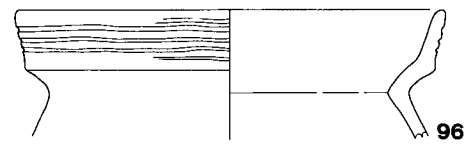
93



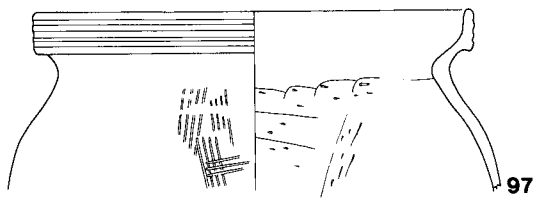
94



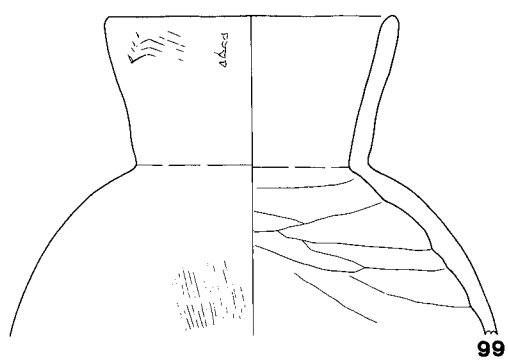
95



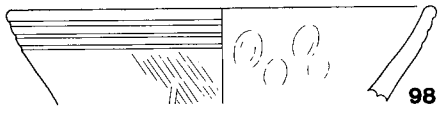
96



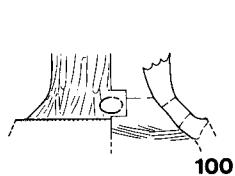
97



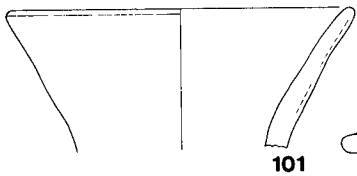
99



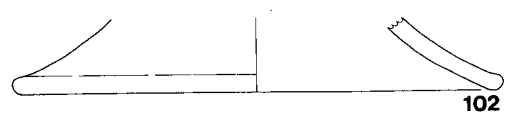
98



100



101



102

图35 S×5 S×2 出土土器 (S=1/3)

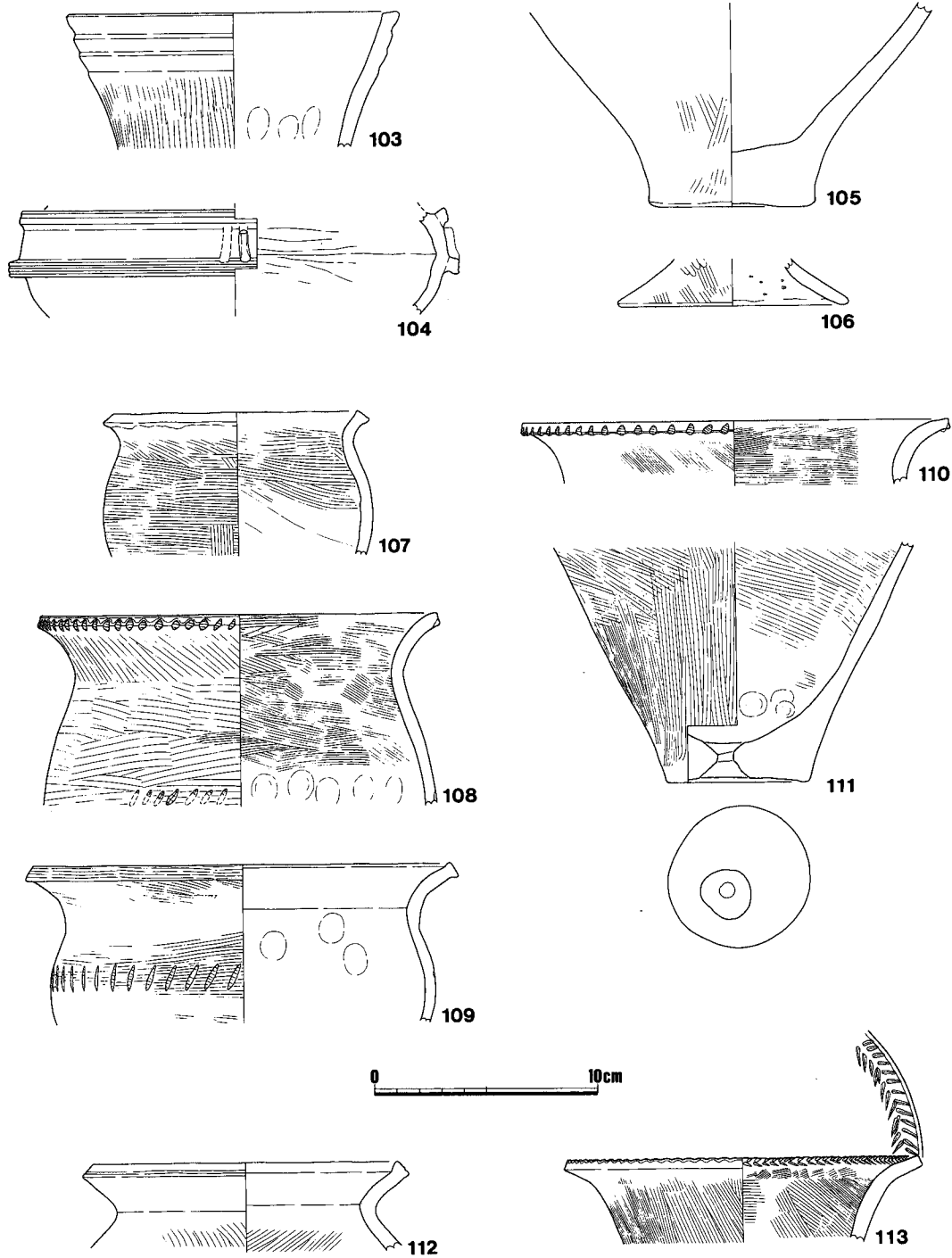


图36 S×3·SK6·SK7出土土器 (S=1/3)

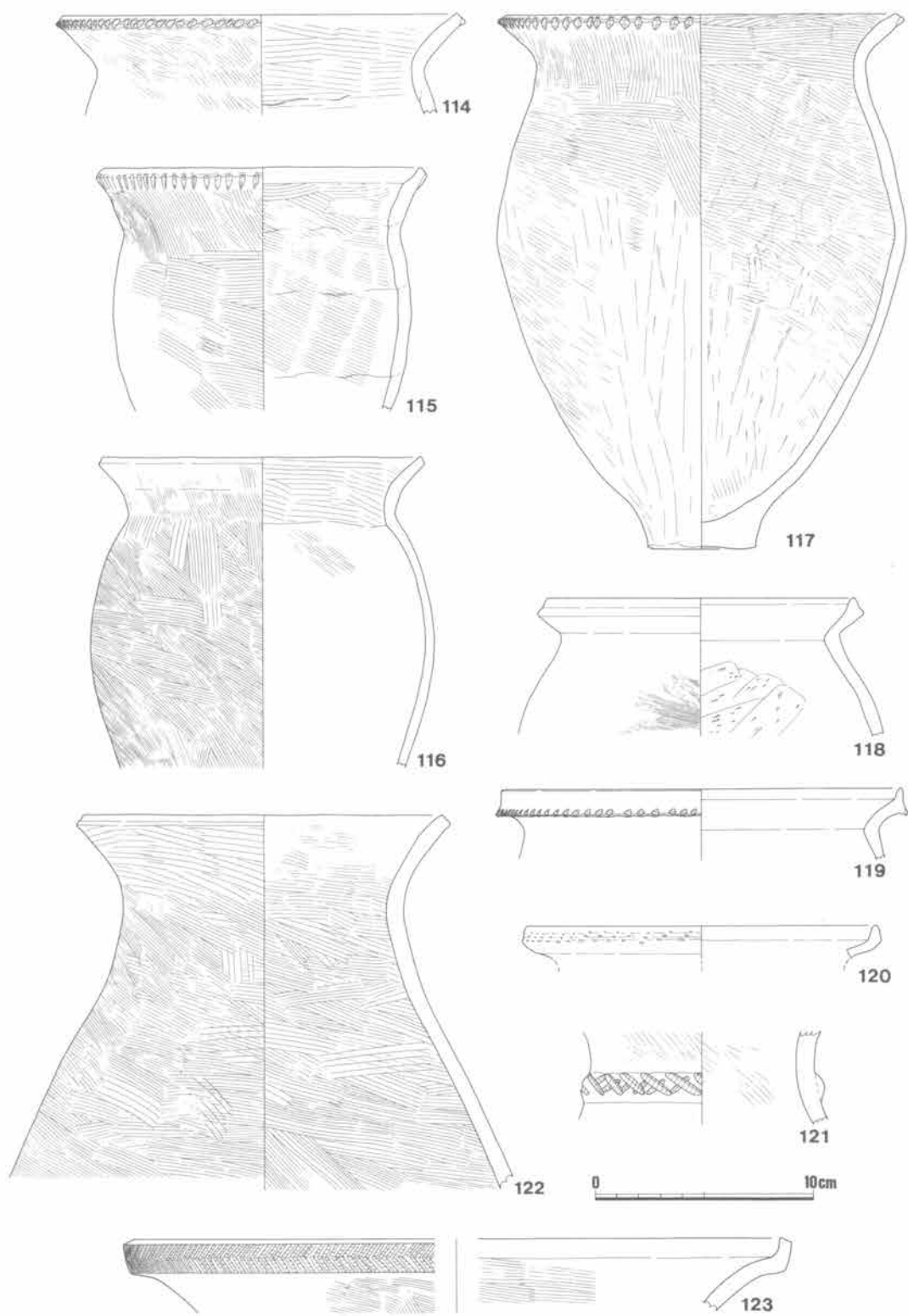


图37 SK 5 出土土器 (S=1/3)

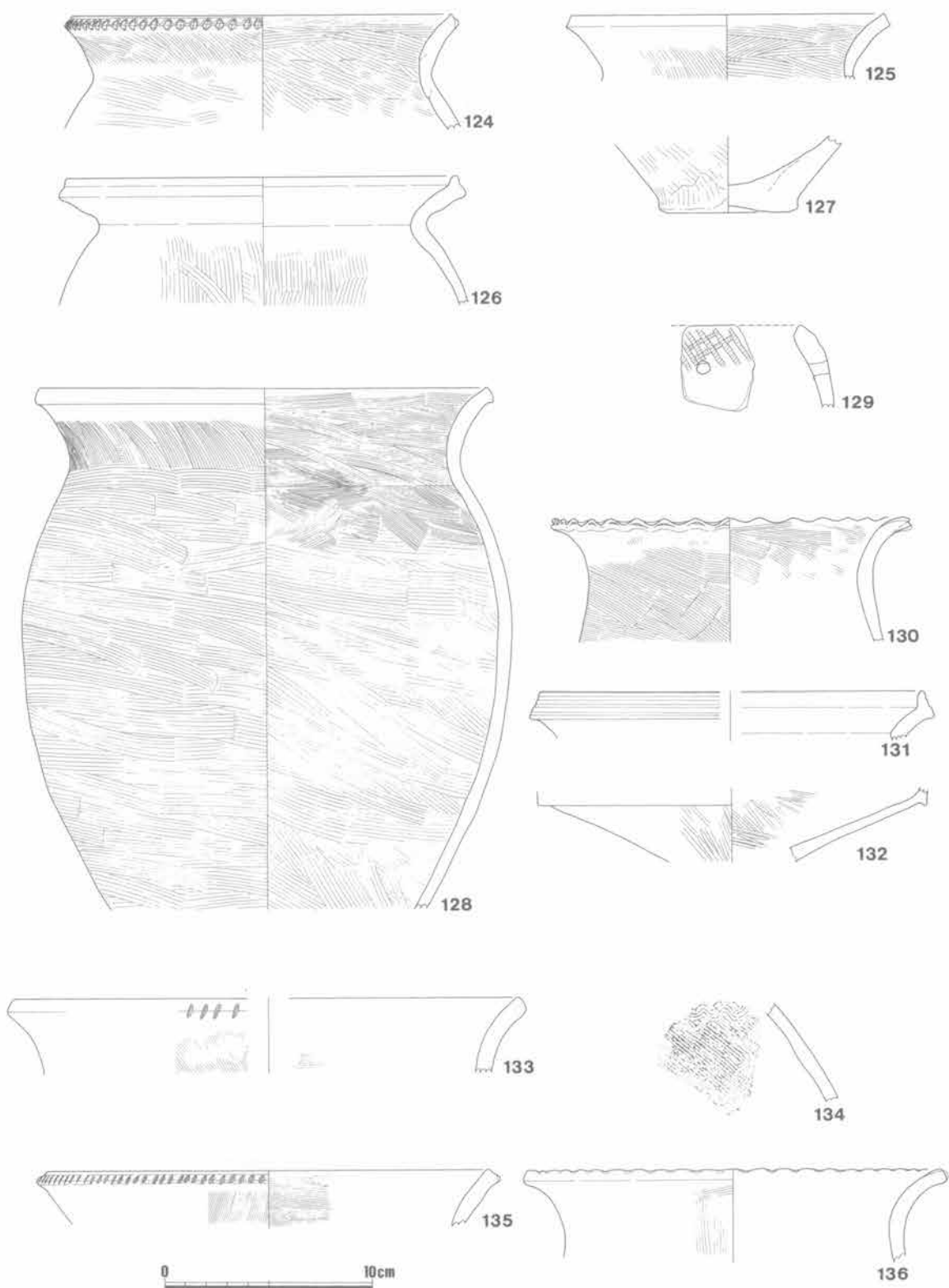


图38 SK 8 ~ 11 · SK 13 · SK 18出土土器 (S=1/3)

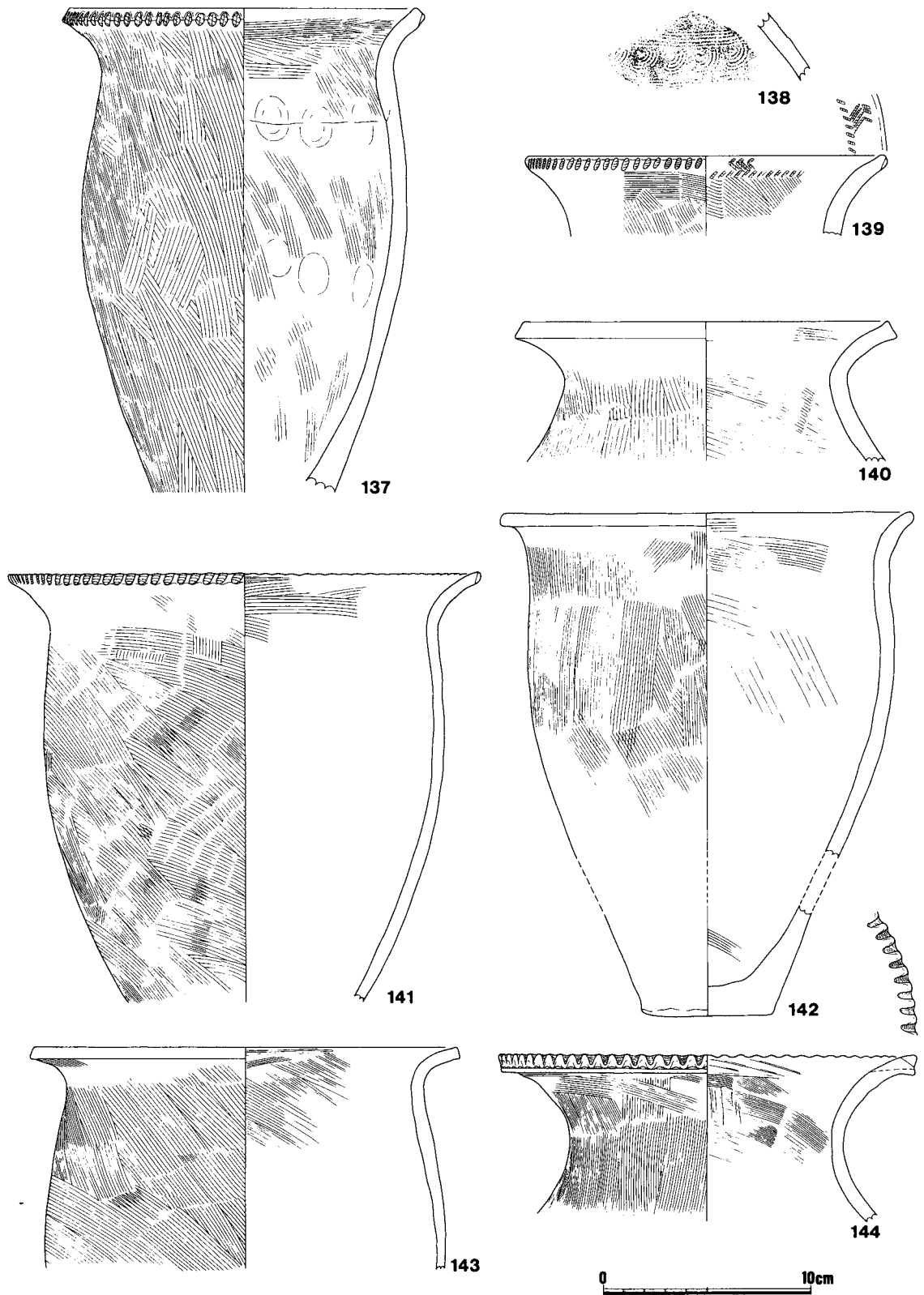


图39 S K14·S K17出土土器 (S=1/3)

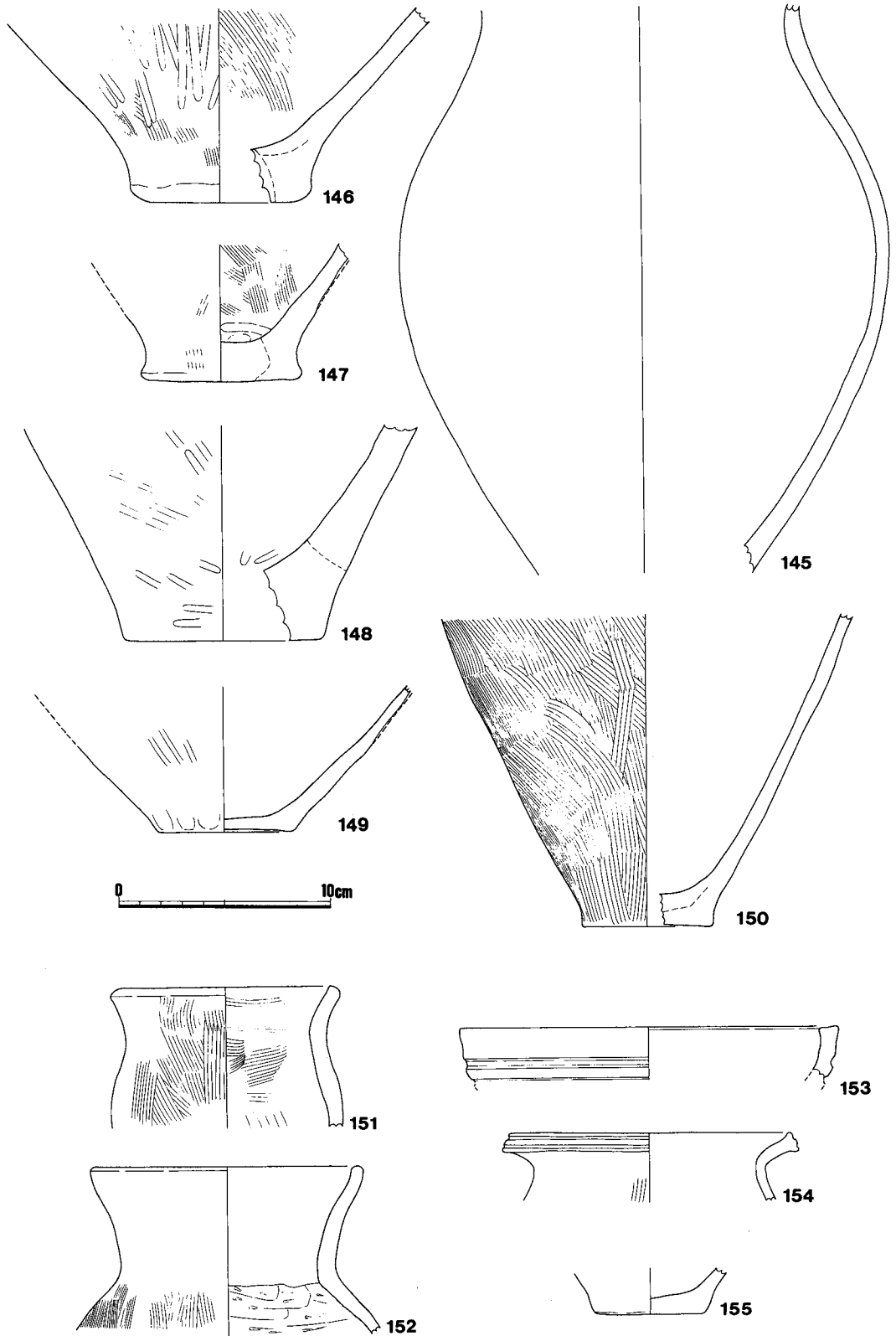


图40 SK17·SK21 出土土器 (S=1/3)

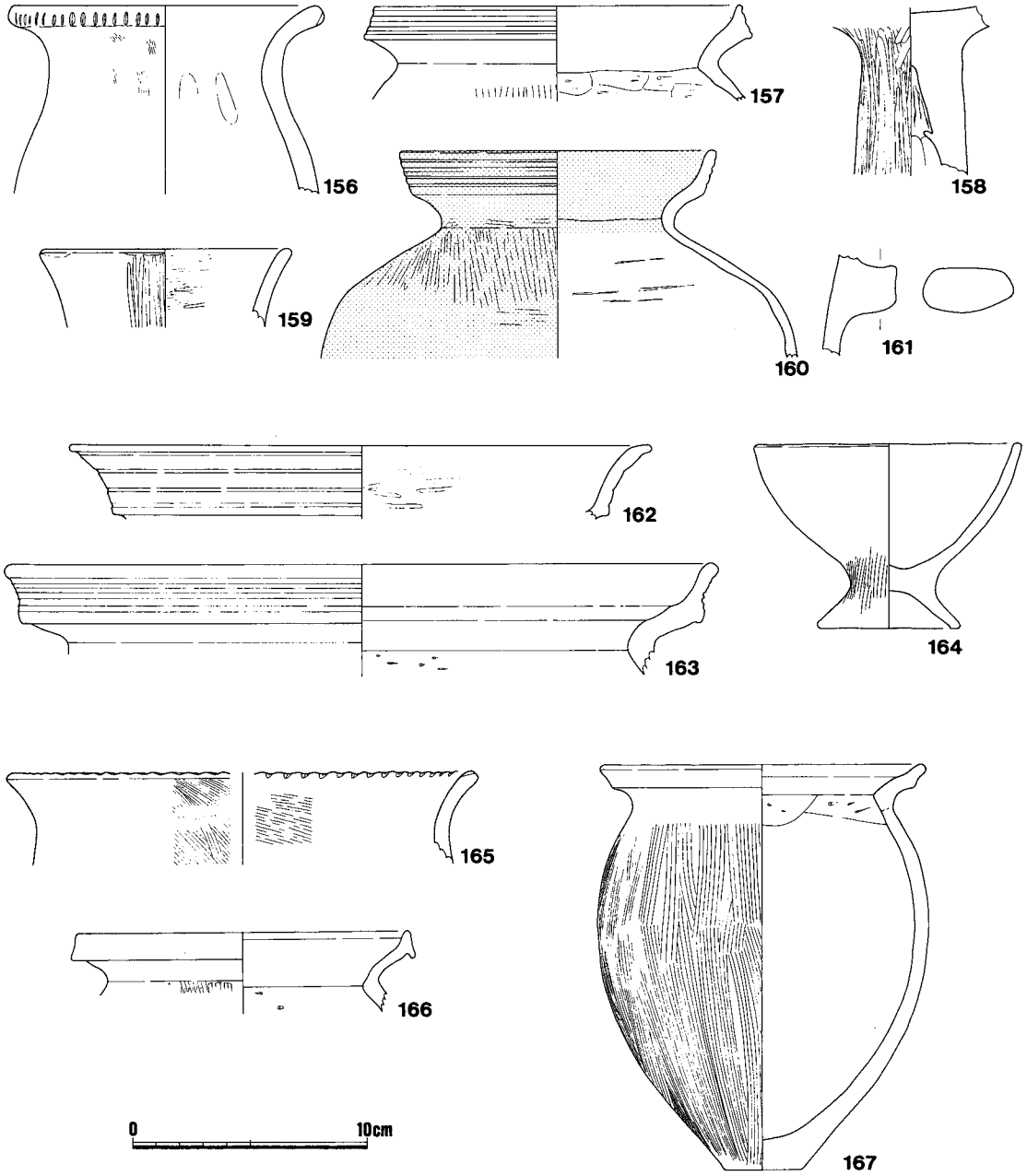


图41 SK19·SK20·SK24出土土器 (S=1/3)

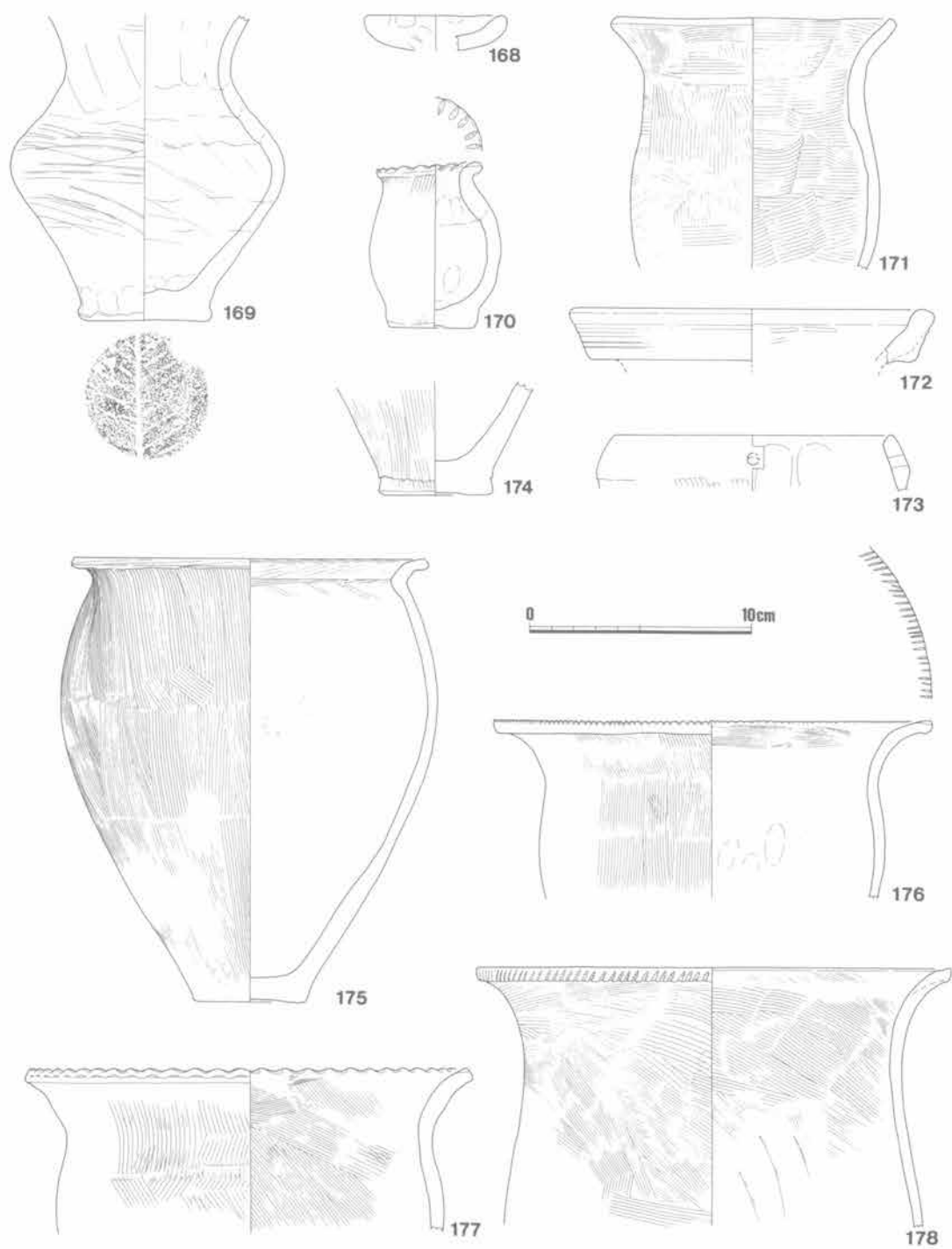


图42 S K23出土土器 (S=1/3)

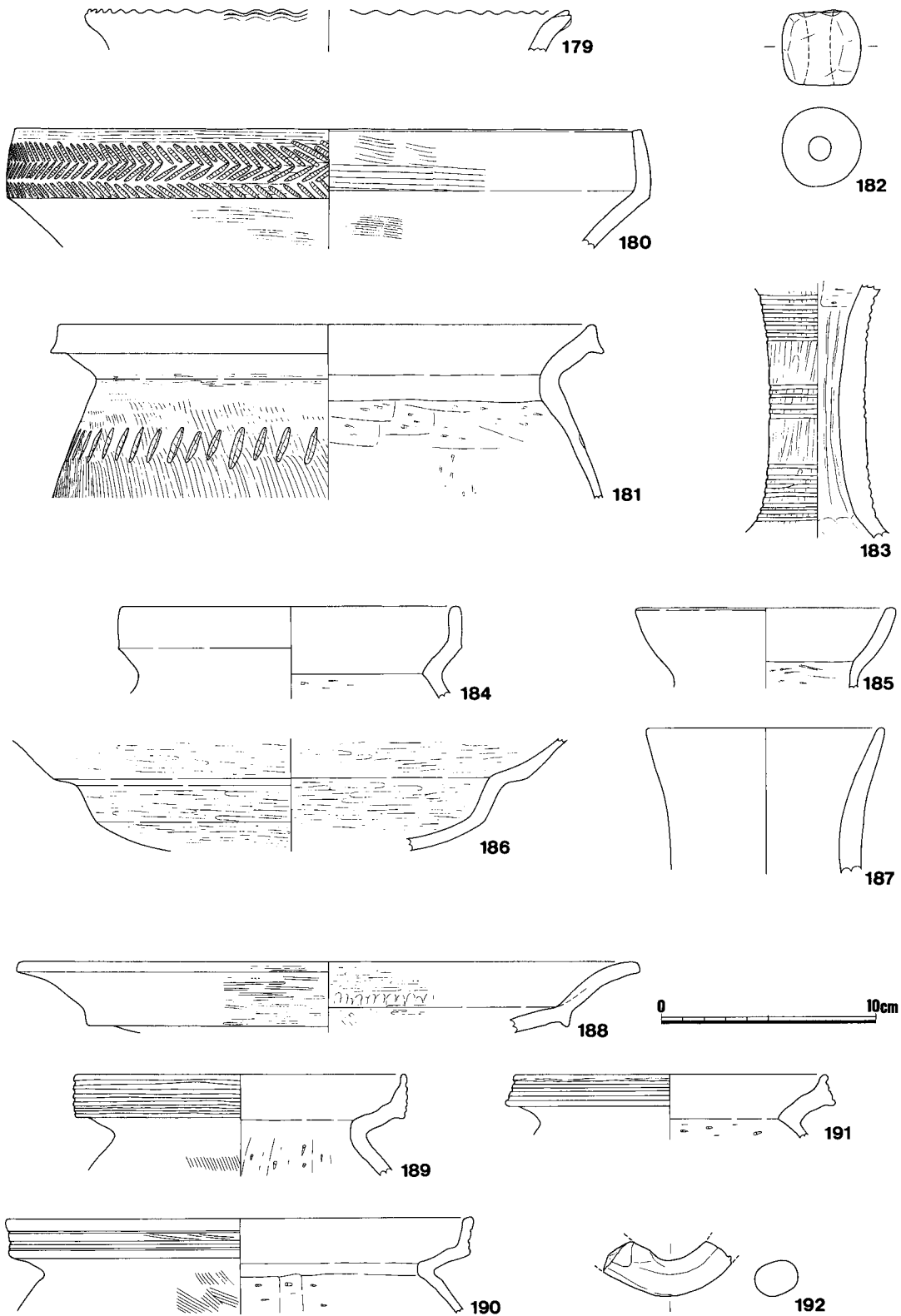


図43 ピット14・51・60・SD15・SD19・SD20・SD23出土土器 (S=1/3)

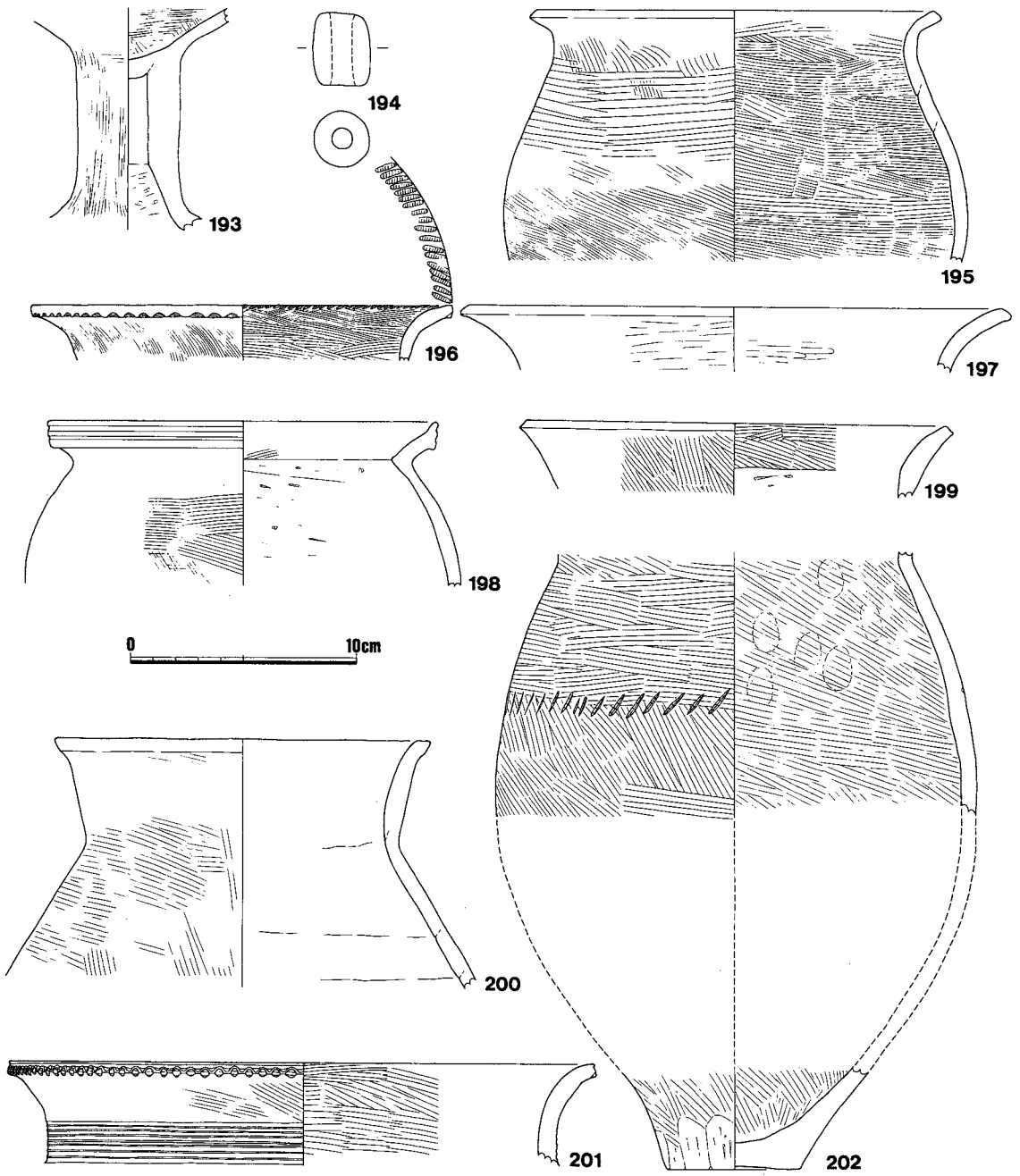


图44 S D18出土土器 (S=1/3)

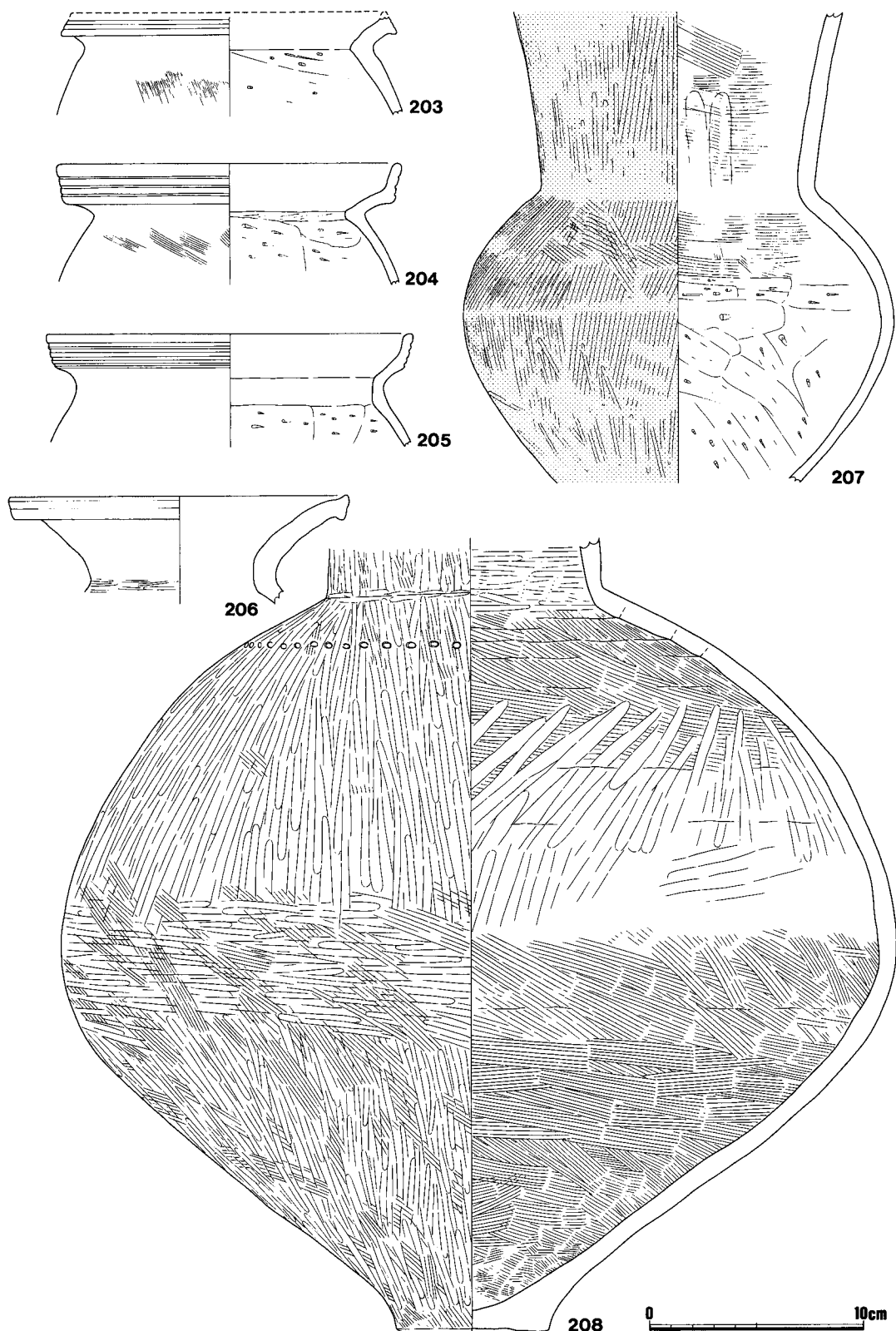


图45 S D23出土土器 (S=1/3)

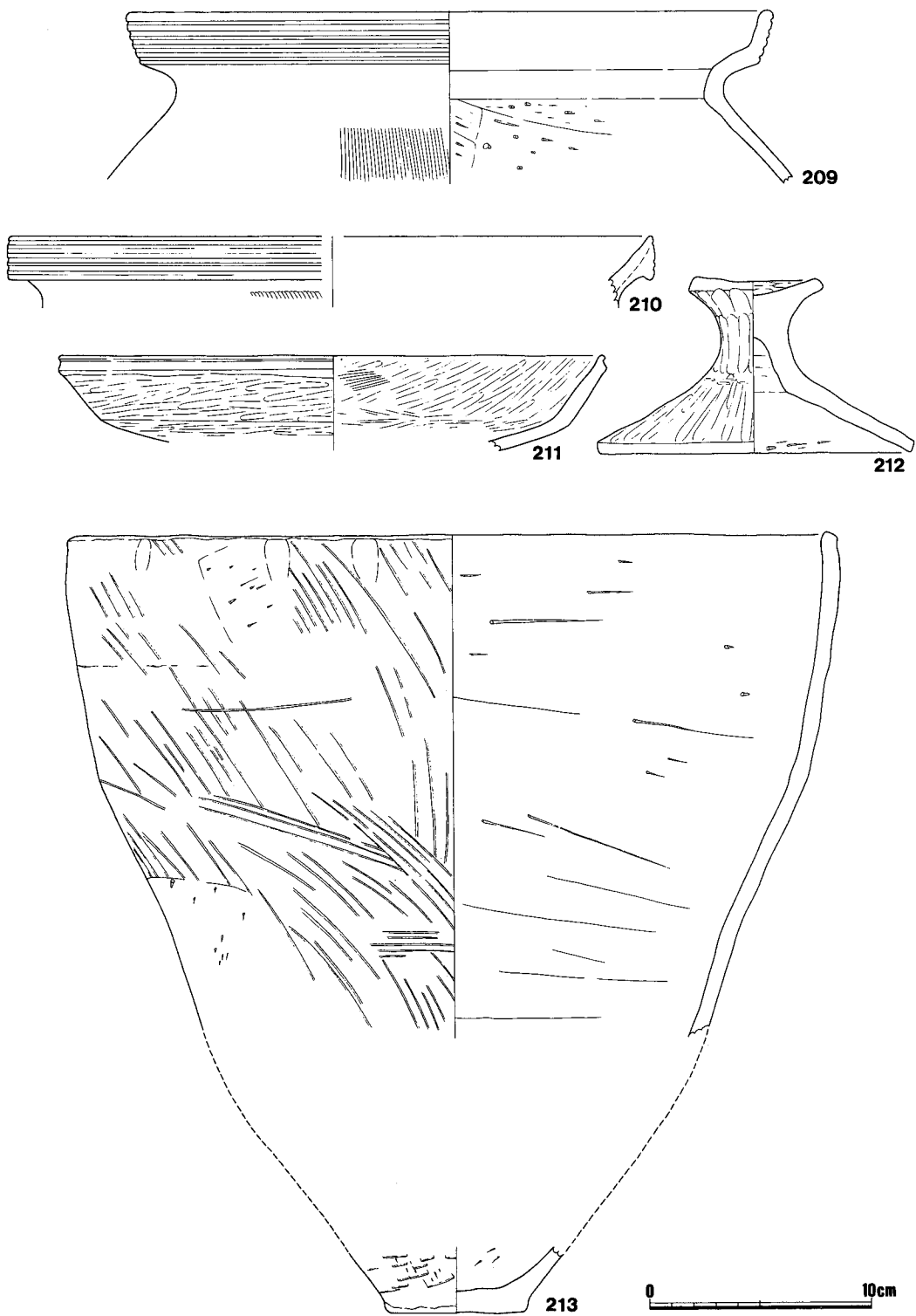


图46 S D23·C-192区出土土器 (S=1/3)

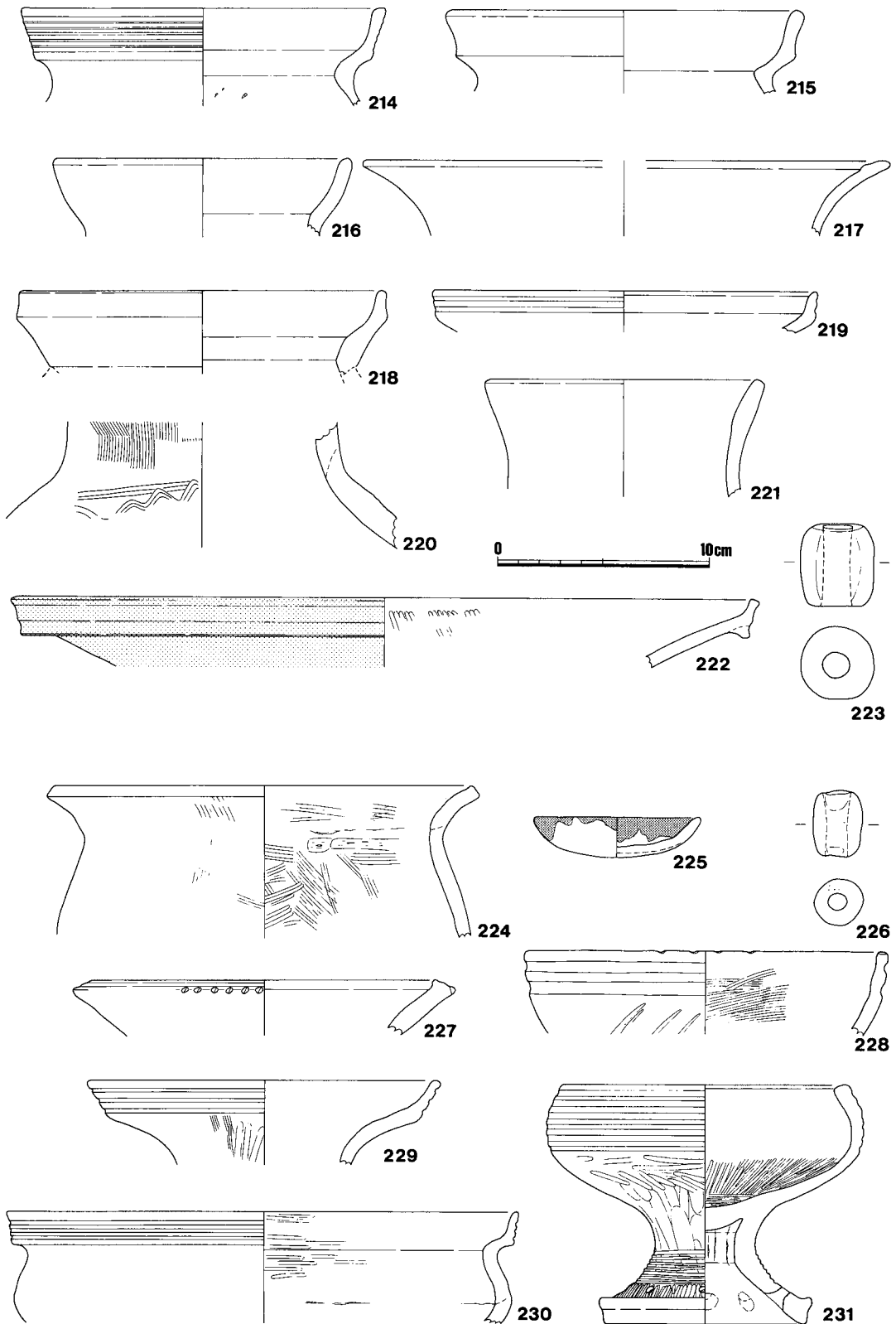


图47 包含層等出土土器 (S=1/3)

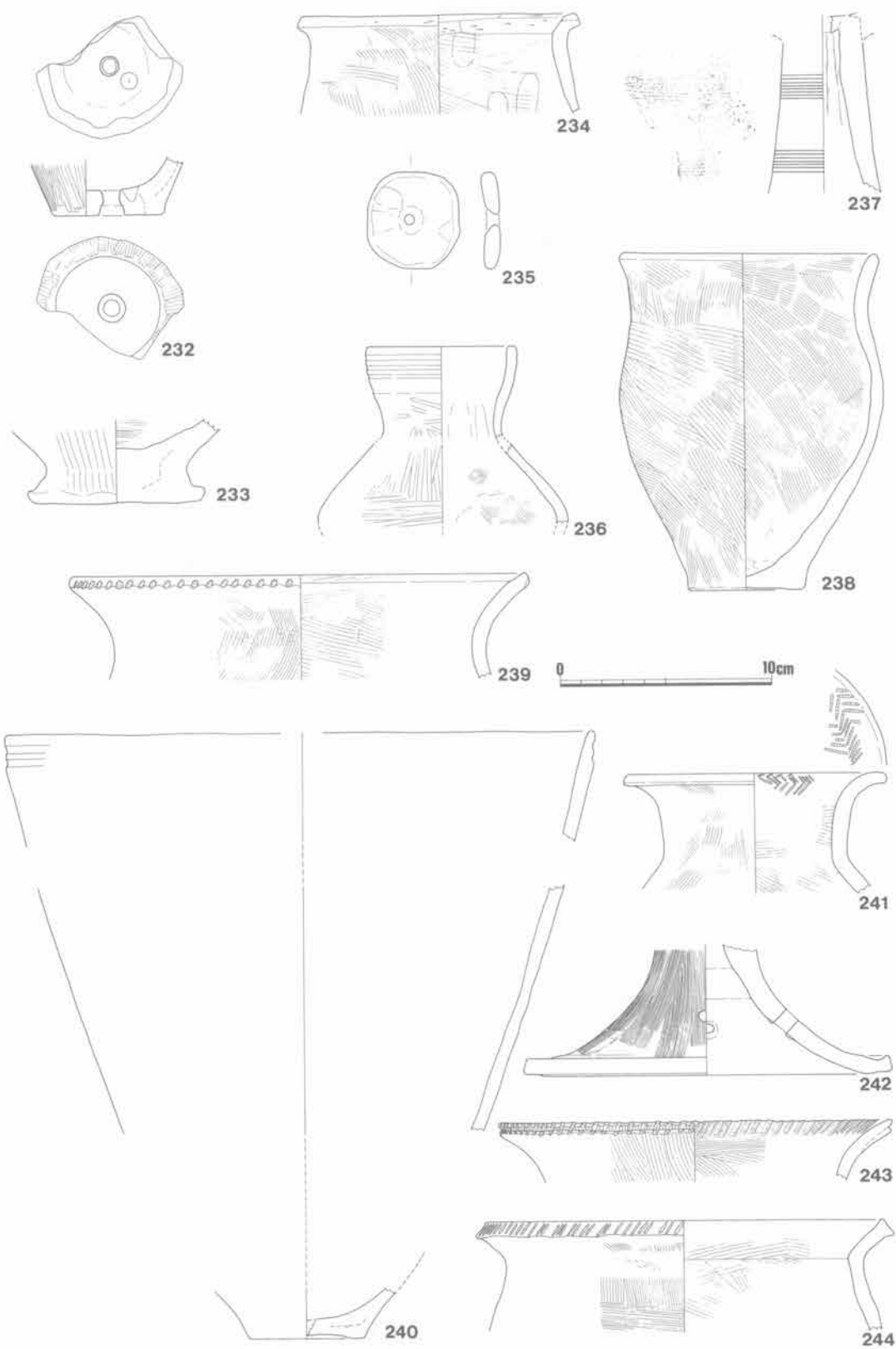


图48 包含層等出土土器 (S=1/3)

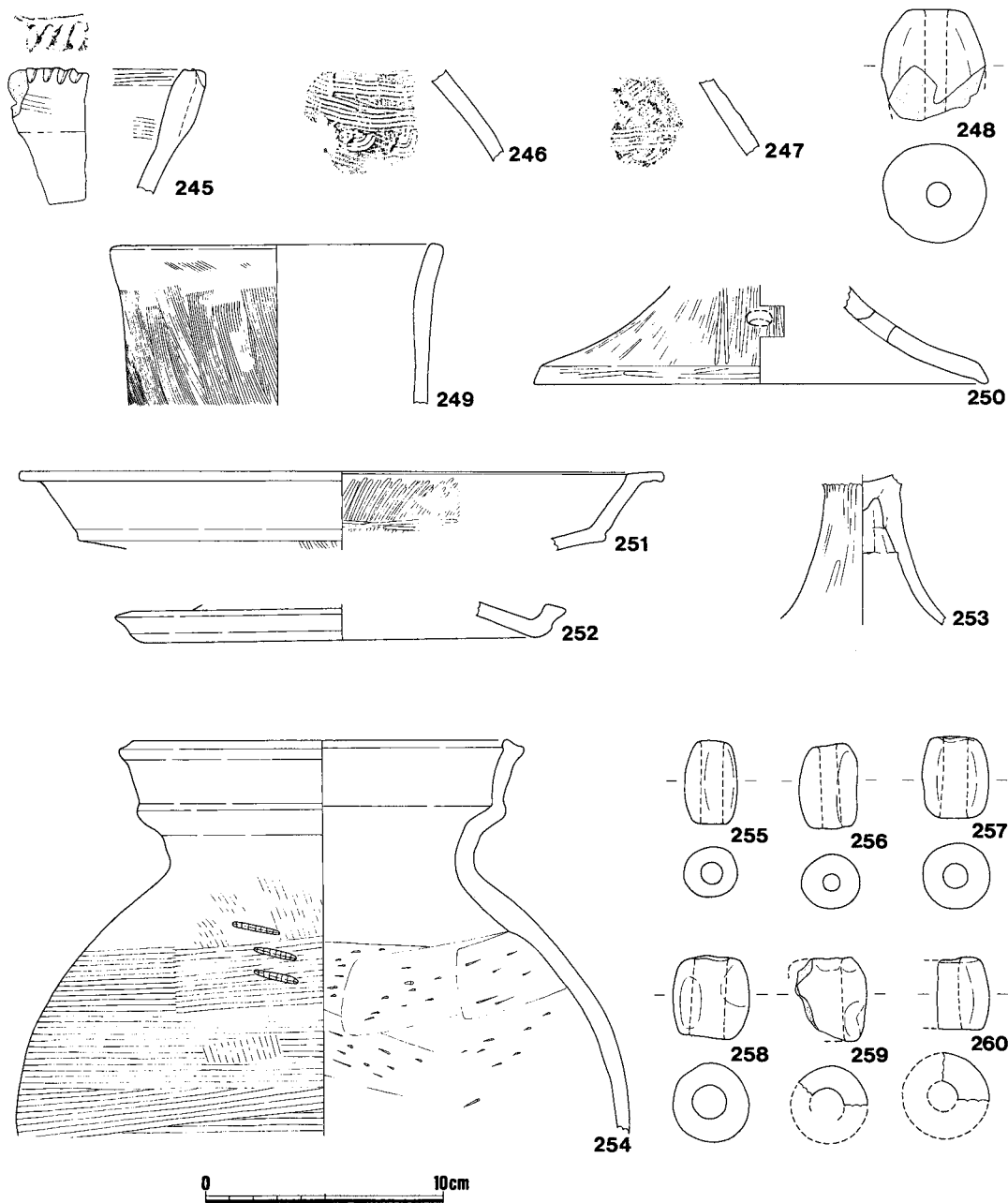


图49 包含層等出土土器 (S=1/3)

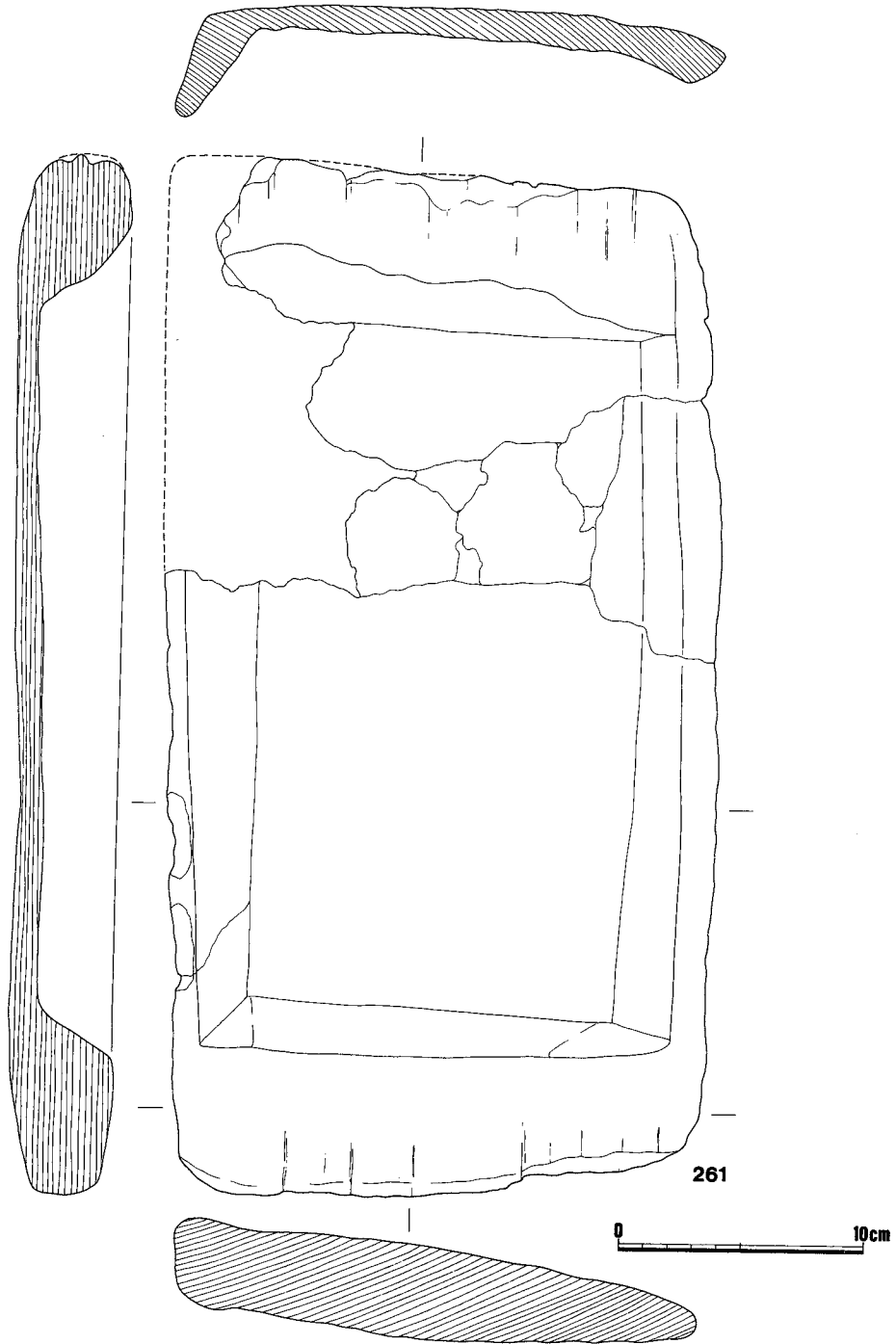


图50 S D24 (下層) 出土木製品 (S=1/3)

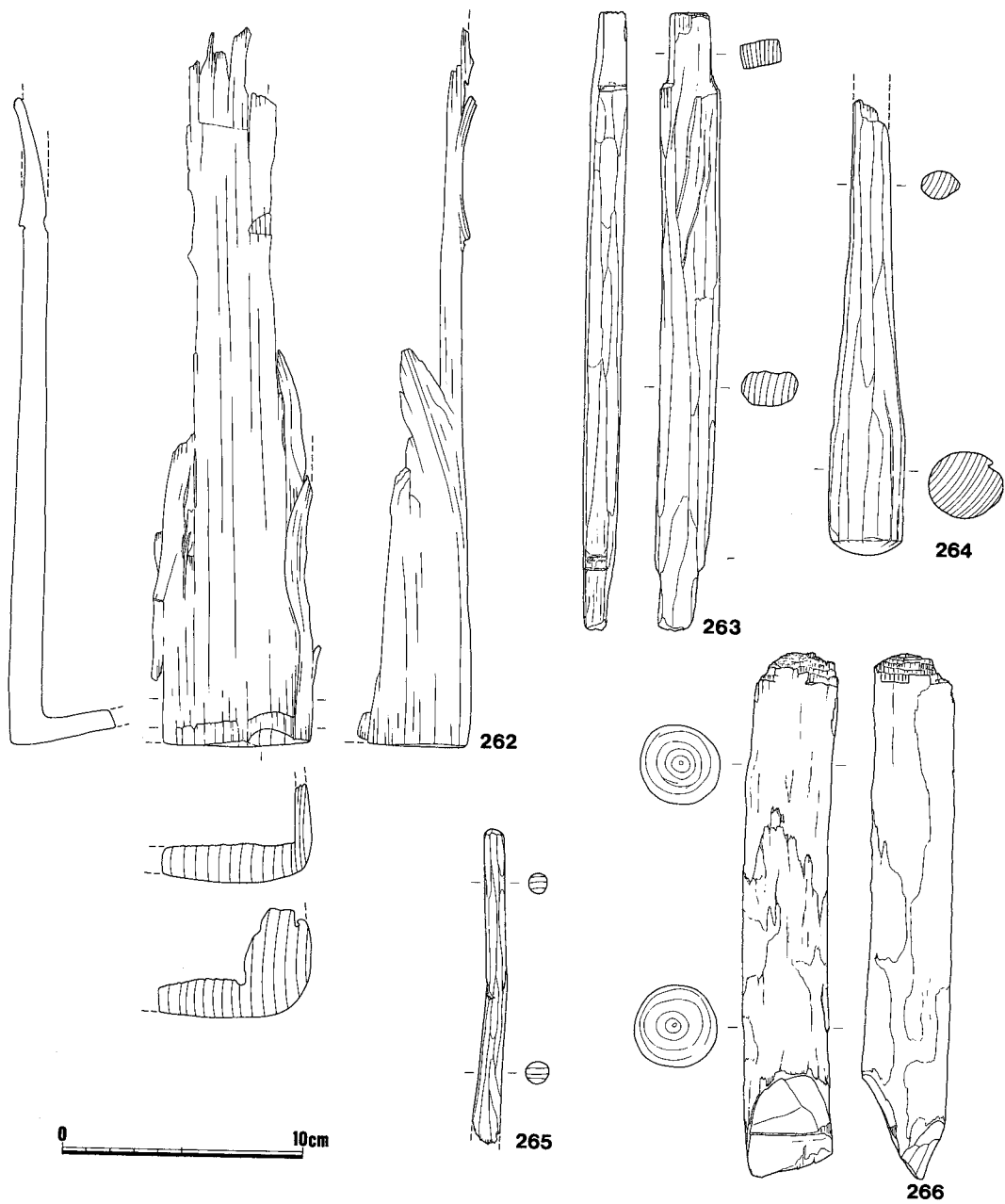


图51 S D24 (下層) 出土木製品 (S=1/3)

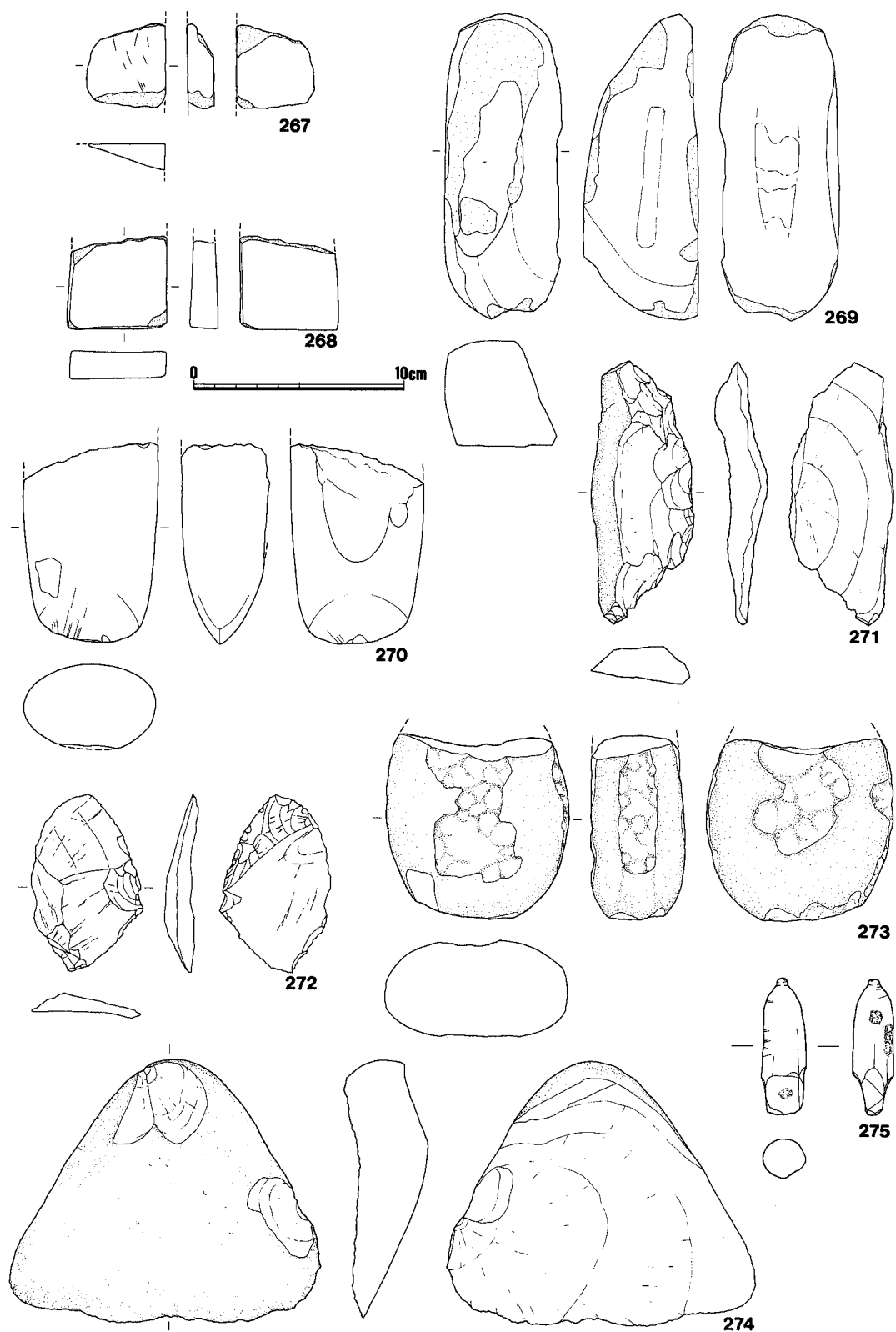


图52 S D24 出土石製品 (S=1/3)

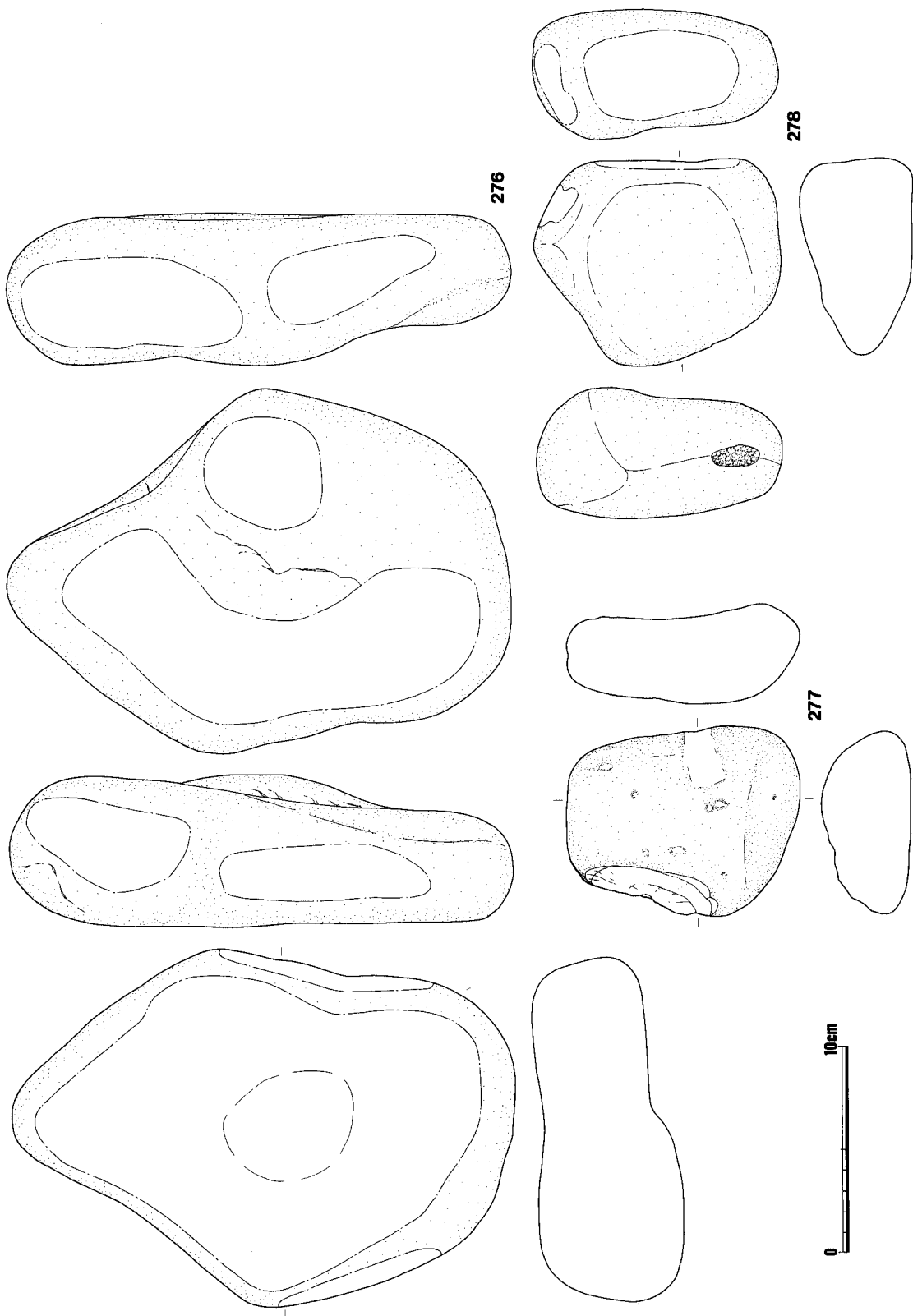


图53 S D24 出土石製品 (S=1/3)

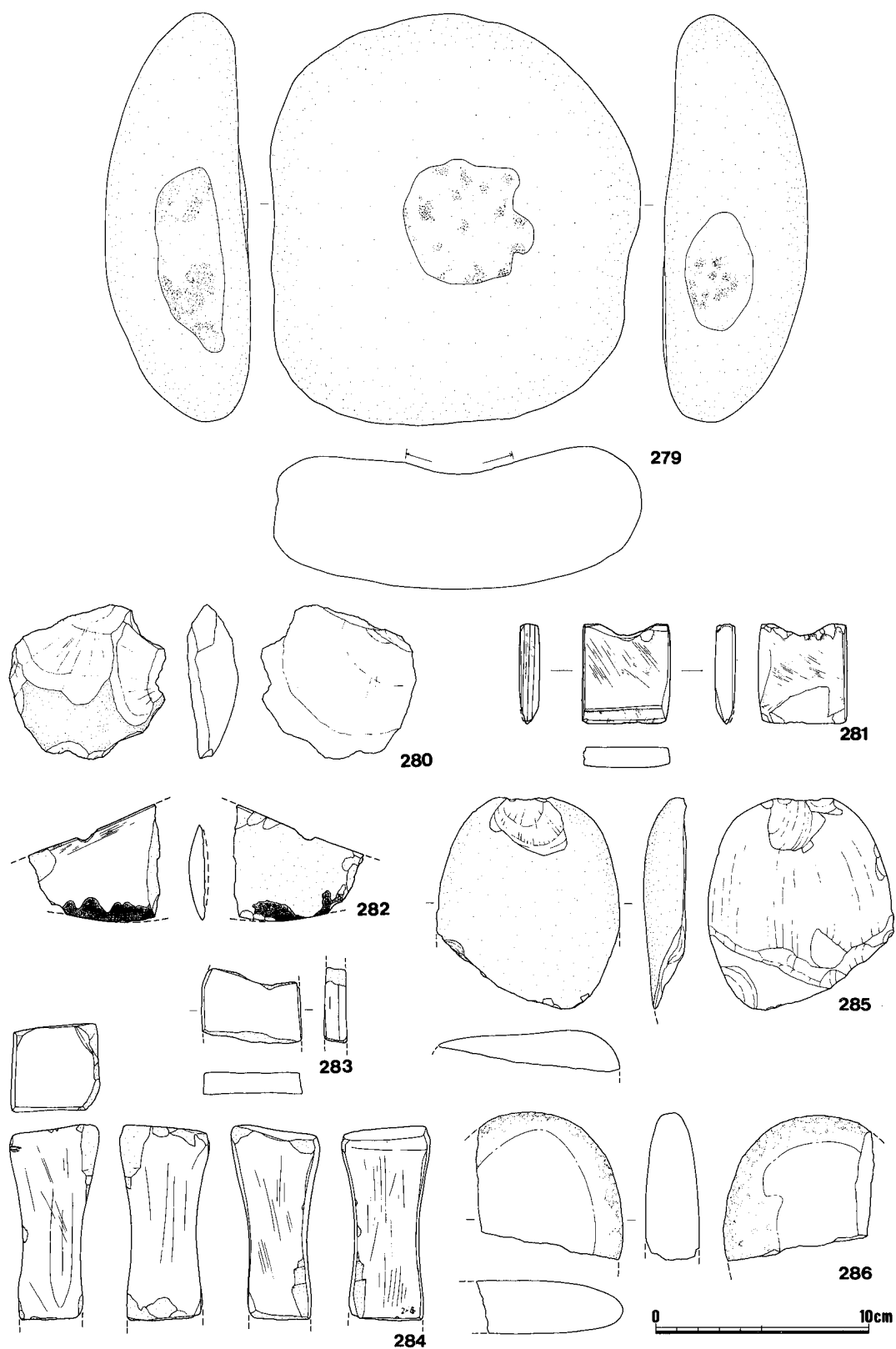


图54 遺構出土石製品 (S=1/3)

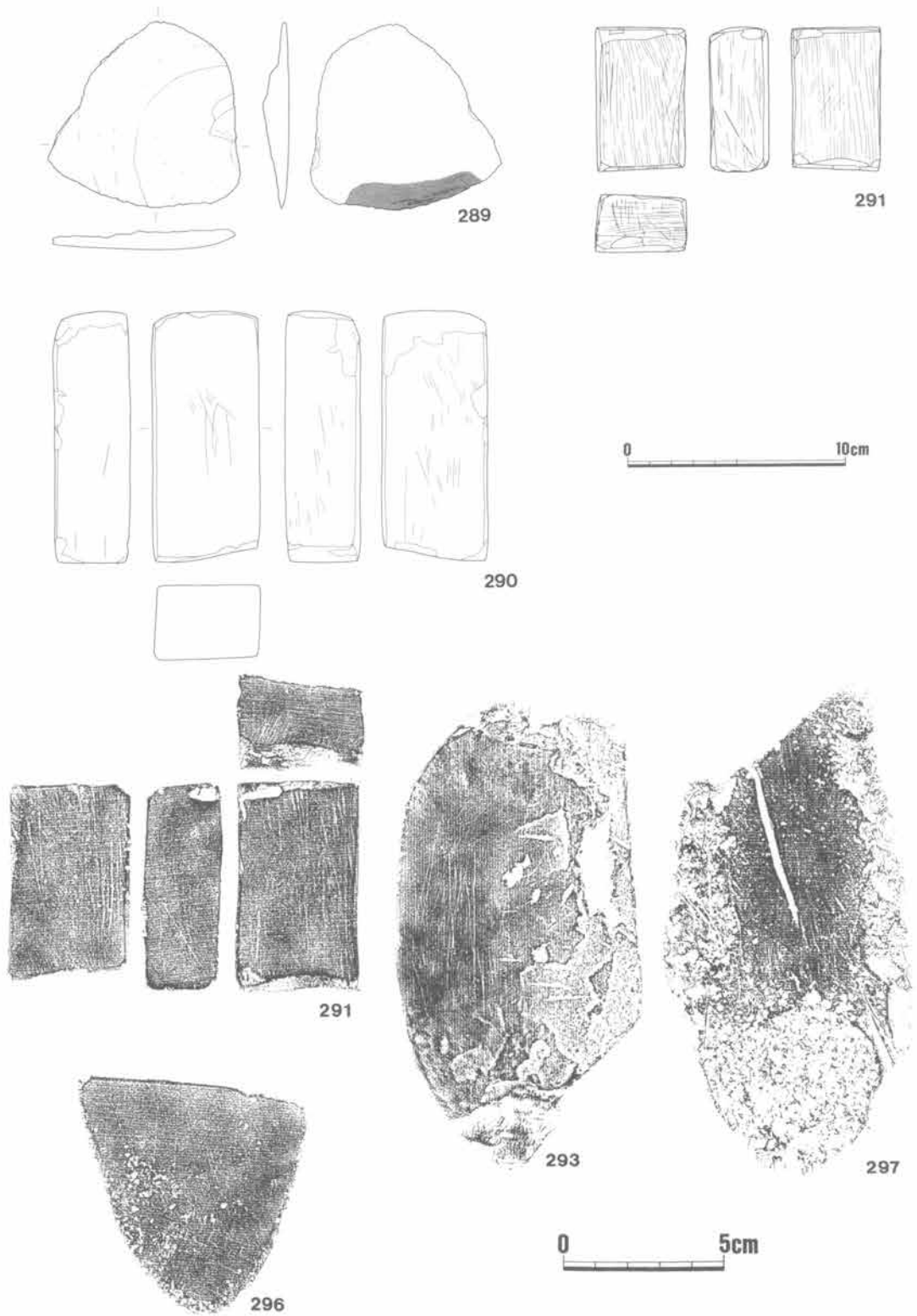


図55 遺構出土石製品 (S=1/3。拓本はS=1/2)

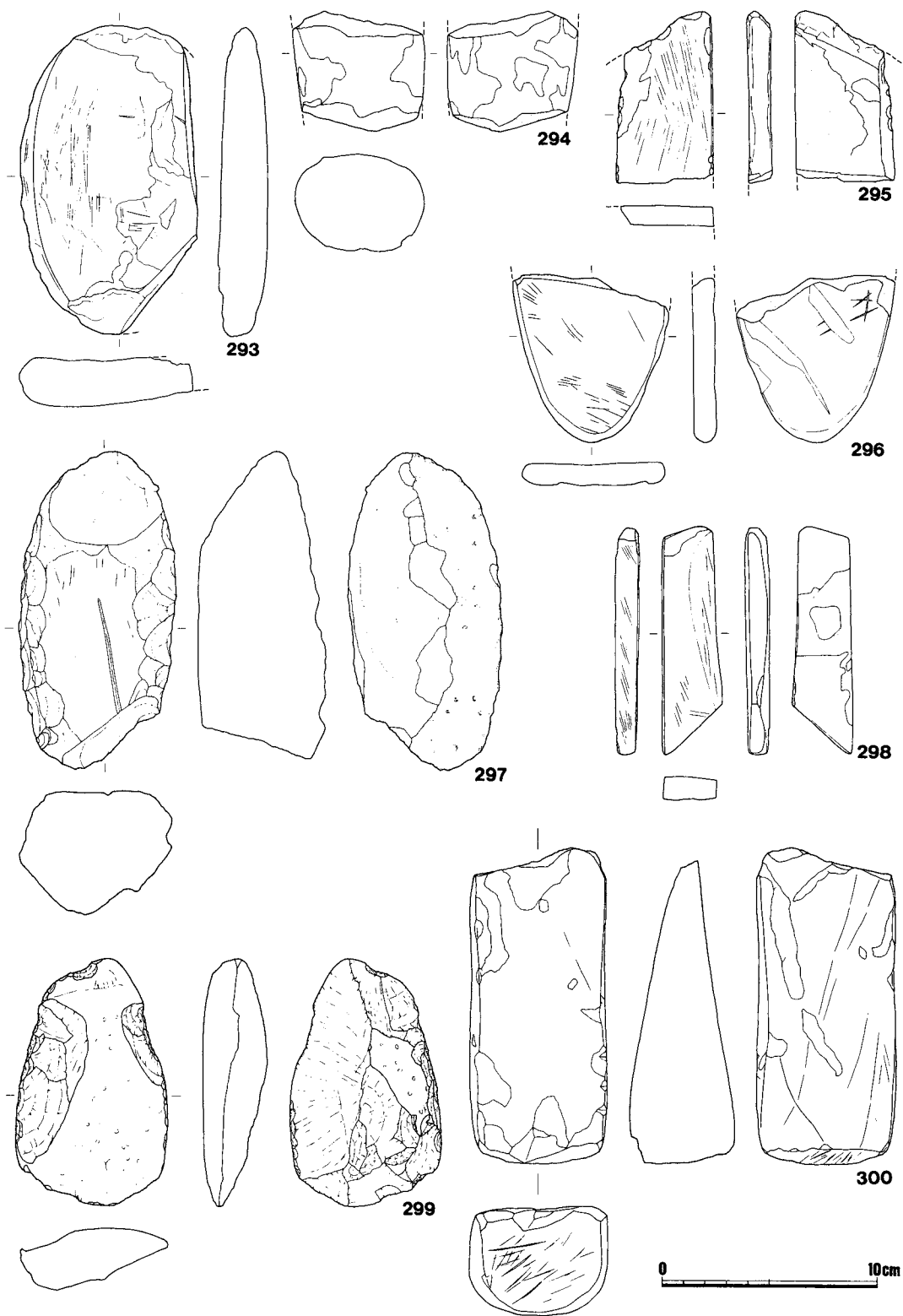


图56 包含層出土石製品 (S=1/3)

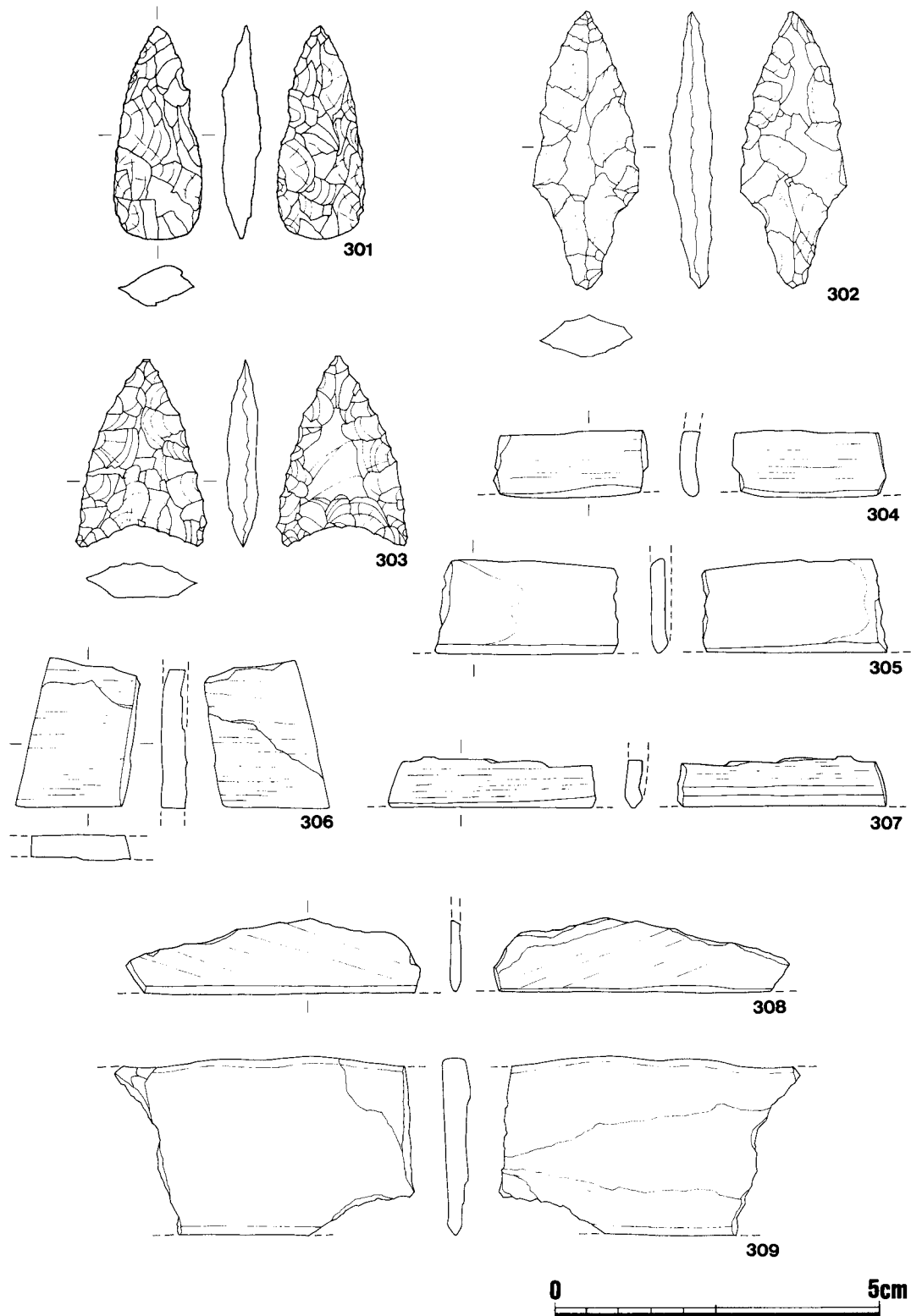


図57 石鏃・石鋸 (S=1/1)

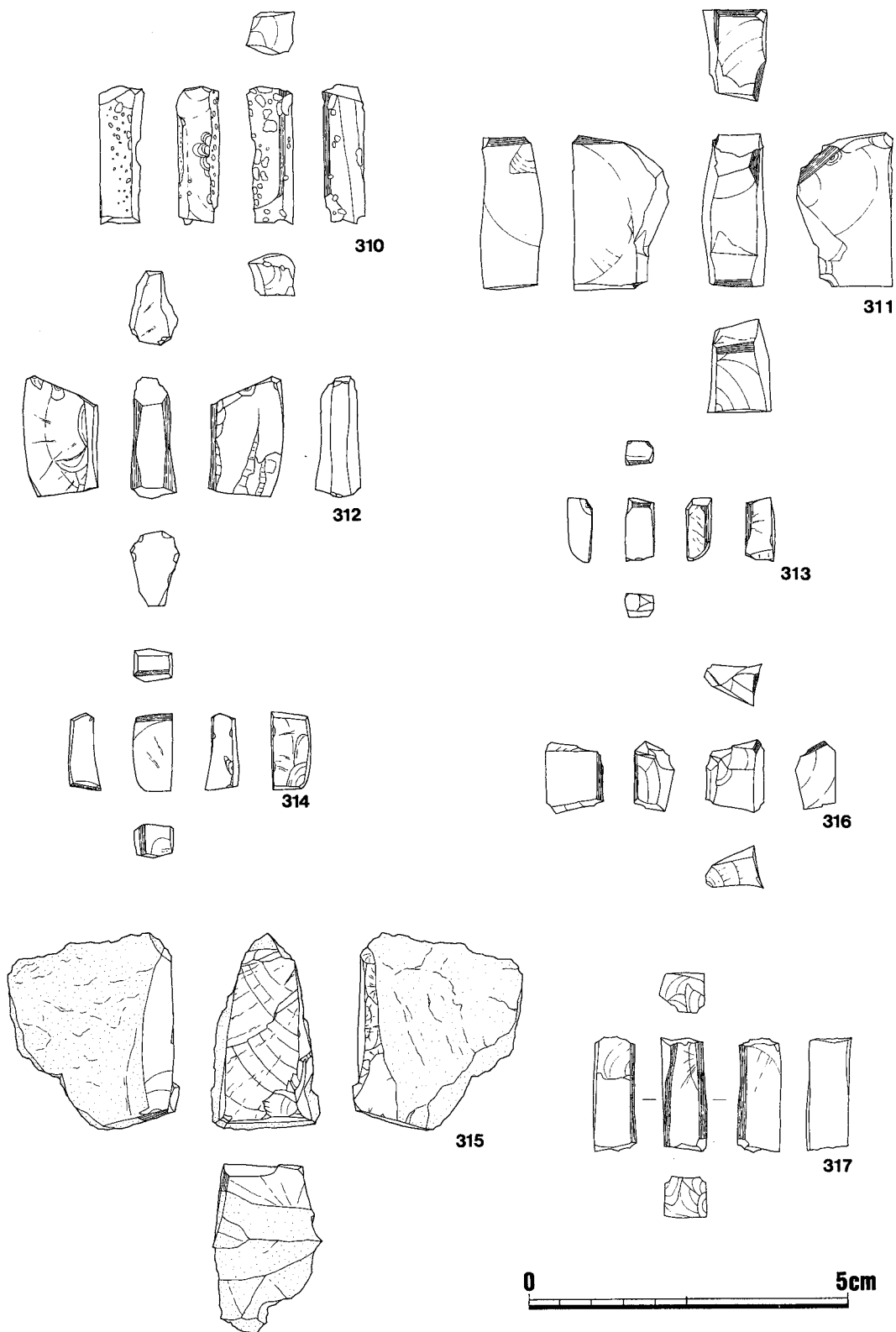


图58 碧玉等未製品 (S=1/1)

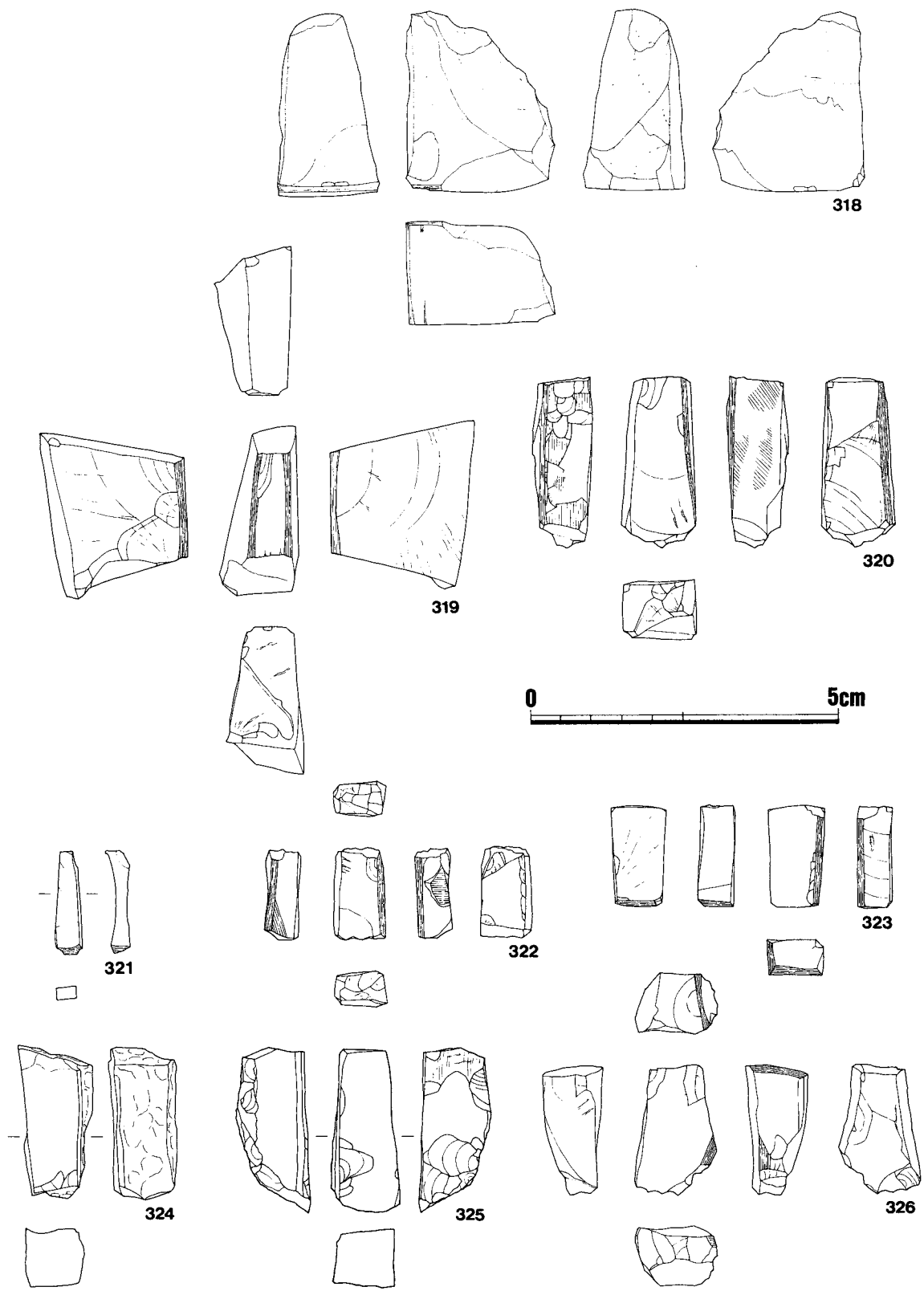
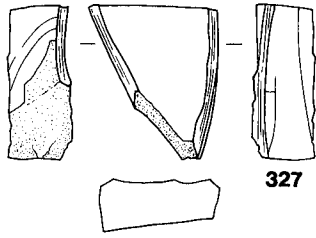
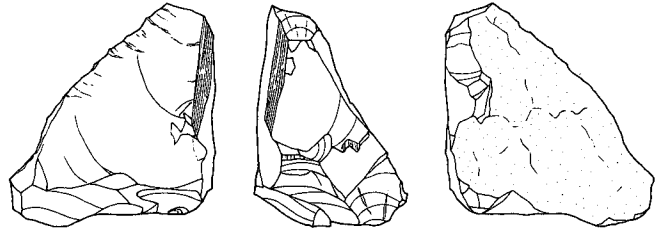


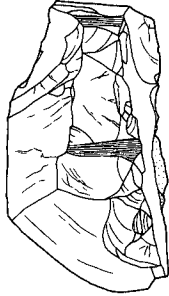
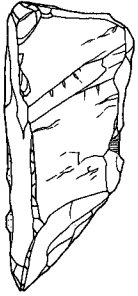
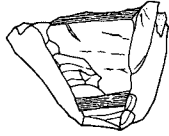
图59 碧玉未製品 (S=1/1)



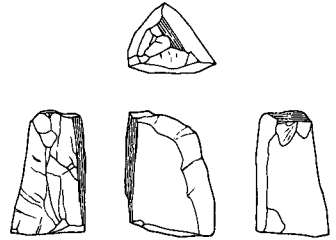
327



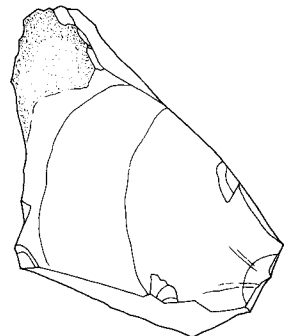
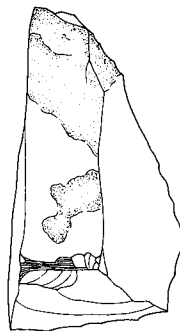
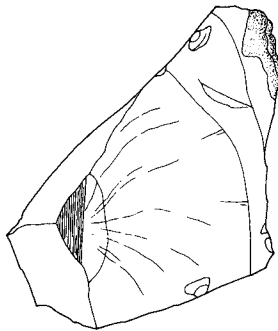
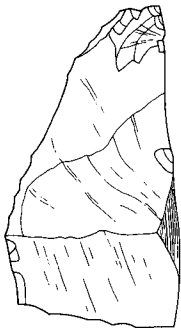
328



329



330



331

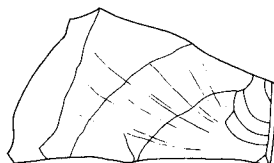


图60 碧玉未製品 (S=1/1)

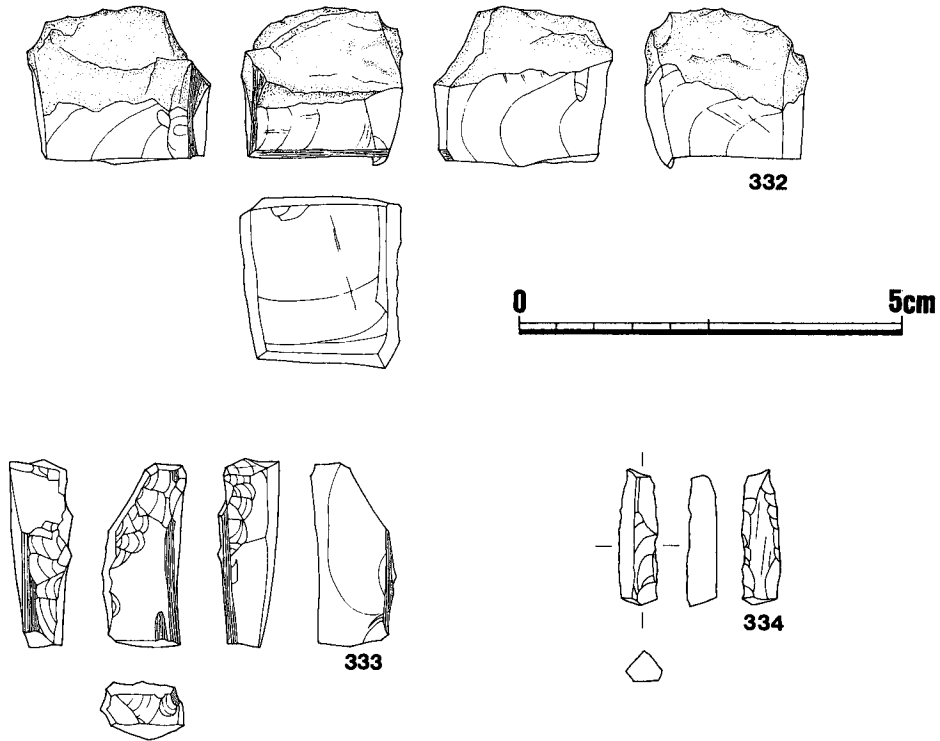


図61 碧玉未製品 (S=1/1)

分に比べて不整形である。胴部最大径は1.9~2.15cmを測る。この突起部分には微かに回転方向の擦痕を確認できるため、石錘と推定した。しかし、胴部はともかく、最先端の形状が完全な円形ではないため、若干疑問も残る。石質は粗く、やや柔らかい。あら砥石に近い。

摩石 (278)

自然石であるが、一面のみ磨耗して滑らかなため、摩石と考えた。

不明石器 (277・286)

277は一端を打ち欠いた自然石。石錘の可能性はある。286は偏平な自然石だが、両面が滑らかになっており、砥石などとして利用された可能性があるが、破片であるため不明である。

軽石

図化しなかったが、軽石が10片出土している。2片は23号溝、6片は24号溝上層、1片は3トレンチ包含層、1片は出土地不明である。24号溝上層から出土した軽石はクルミ大程度の小片が4片あり、23号溝のものも比較的小さい。砥石などに使用した痕跡はいずれにも確認できなかったが、何らかの目的で当遺跡に持ち込まれたものと推定される。

その他

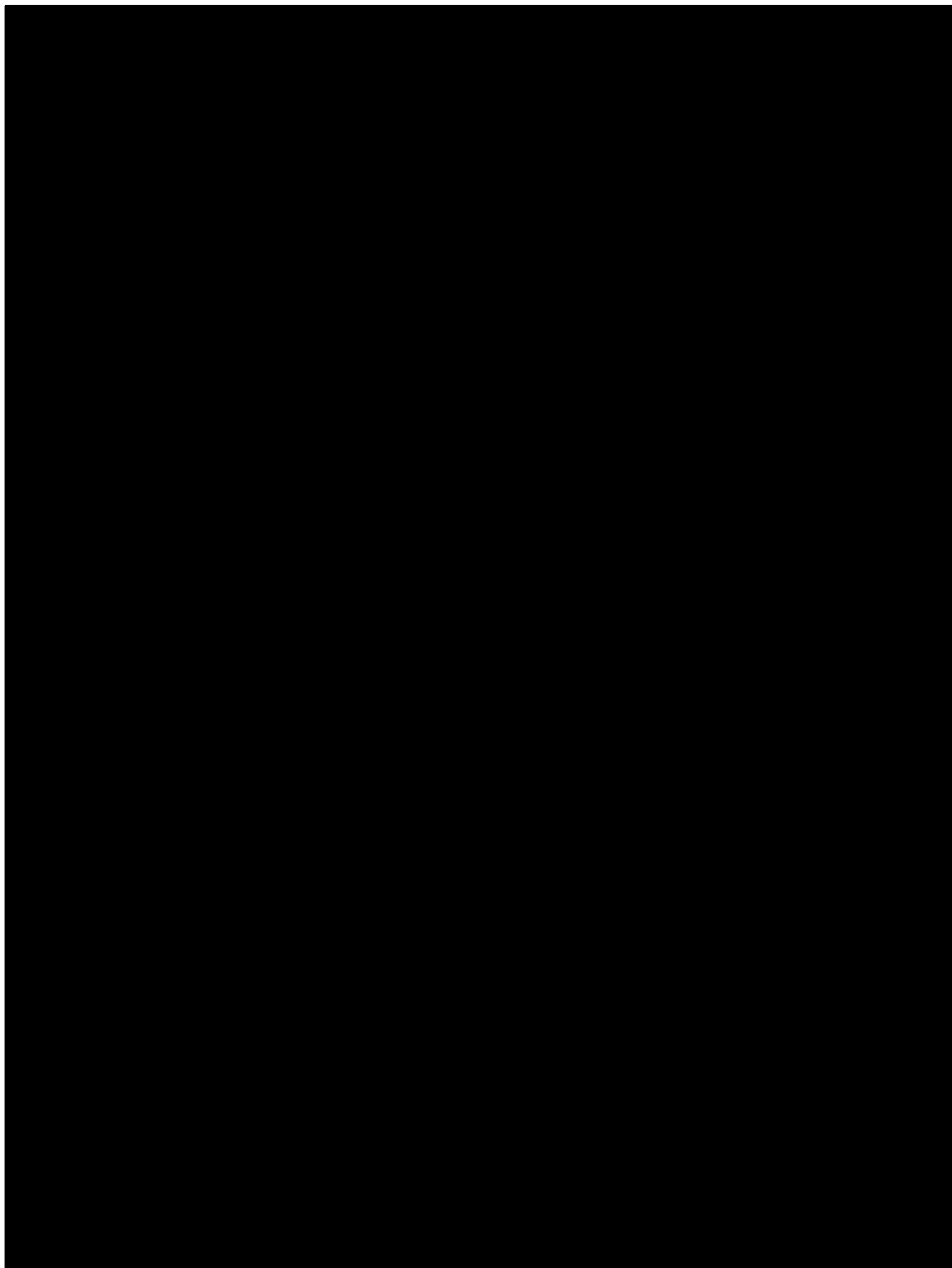
17号溝の最下層から5×6cm程度の球果状流紋岩が出土した。愛石家に喜ばれる紫色のきれいな石で、手取川扇状地でも数は少ないが存在する。自然に混入した可能性もあるが、数の少ない石であるから選ばれて持ち込まれた可能性も否定できない。

表3 野本遺跡出土石器一覧表

番号	出土位置	種類	石質	最大長	最大幅	最大厚	重量g	備考
267	SD24 下層	砥石	安山岩	4	3.75	1.3	20	目が細かい
268	SD24 中層	砥石	砂岩 中粒	4.4	4.7	1.4	49	目が粗い
269	SD24 下層	砥石	砂岩 粗粒	14.5	5.6	5	479.6	ほぼ全面使用
270	SD24 下層	大型蛤刃石斧	流紋岩	9.5	6.4	4.2	342.2	
271	SD24 下層	剥片	安山岩	12.5	4.9	2.5	102.5	
272	SD24 上層	剥片	未観察	4.1	2.6	0.6	4.7	
273	SD24 上層	凹み石	流紋岩	8.9	8.7	4.5	427.6	全面に叩き痕跡
274	SD24 下層	剥片	流紋岩	12.7	14.7	4.1	565	
275	SD24 上層	用途不明石器	軽石状凝灰岩	6.5	2.1	1.9	23.8	粗砥石状石質
276	SD24 下層	石皿	ひん岩	24.2	17.4	7	4000	側面にも使用痕?
277	SD24 下層	石錘	流紋岩	10.1	9.1	4.8	637.6	打ち欠き痕・磨耗痕
278	SD24 下層	摩石?	流紋岩	11.7	9.9	6.3	957.7	ほぼ全面磨耗
279	SD24 下層	石皿	安山岩	19.4	12.7	6	3270	側面に殴打痕
280	SK18	剥片	片麻岩	7.3	7.4	2.5	113	
281	SD18 下層	磨製石斧	片岩	4.1	1	4.7	42.7	
282	SK13	石包丁	流紋岩	5.7	6.4	1.1	31.8	刃部に光沢あり
283	SD33	砥石	砂岩	3.6	4.7	1.1	29.7	
284	包含層7T-3区	砥石	砂岩 細粒	9.4	4.3	4.1	203.5	SK20直上
285	SD18 上位	剥片	流紋岩	10.1	8.8	2	188.7	
286	SD18 下位	摩り石	砂岩	7.1	7	2.6	165.8	
289	SX5壁溝1	剥片	安山岩	8.7	9	1.2	84.7	
290	SX5砥石1	砥石	凝灰岩	11.7	5	3.4	418.3	
291	SX5砥石2	砥石	凝灰岩質砂岩	6.8	4.2	2.8	144.9	細粒砂岩
293	包含層2T-20区	砥石	流紋岩	14.4	8.2	2.3	304.2	風化している
294	包含層2T	大型蛤刃石斧	安山岩	5.6	6.2	4.5	235.4	
295	包含層3T-26区	砥石	流紋岩	7.9	4.6	1.2	56.3	
296	包含層4T	砥石	流紋岩	7.9	7.3	1	57.4	目が細かい
297	包含層3T25・26区	砥石	凝灰岩 細粒	14.9	7.4	6	577.2	
298	包含層3T24区	砥石	流紋岩	10.7	2.8	1.1	50.2	目が最も細かく緻密
299	包含層6T	打製石斧	流紋岩	11.6	7.1	3	235.9	
300	SX5砥石3	砥石	凝灰岩	14.7	6.5	5.1	646.2	珪岩か
301	SK13	石鏃	輝石安山岩	3.3	1.3	0.5	2.4	
302	Pit52	石鏃	輝石安山岩	4.3	1.6	0.7	3.2	
303	包含層5T-2区	石鏃	鉄石英	2.9	2	0.5	2.8	
304	包含層5T-2区	石鏃	紅簾石片岩	2.4	1.1	0.3	1.5	
305	包含層5T-2区	石鏃	紅簾石片岩	2.8	1.5	0.3	2	
306	包含層5T-2区	石鏃	紅簾石片岩	2.4	1.9	0.4	3	
307	包含層5T-2区	石鏃	紅簾石片岩	3.2	0.8	0.3	1.3	
308	包含層5T-2区	石鏃	紅簾石片岩	4.6	1.2	0.2	1.6	
309	SD24 中層	石鏃	紅簾石片岩	4.6	2.8	0.4	7.3	
310	SD24 中層	玉未製品	珪質凝灰岩	2.2	0.7	0.7	1.5	いわゆる緑色凝灰岩
311	SD24 下層	玉未製品	珪質凝灰岩	2.4	1.5	1	4.9	"
312	SD24 中層	玉未製品	珪質凝灰岩	1.9	0.7	1.2	1.8	"
313	SK11	玉未製品	珪質凝灰岩	1	0.5	0.4	0.3	"
314	SK12	石鏃未製品	輝石安山岩	1.2	0.6	0.5	0.5	
315	SK23	玉未製品	珪質凝灰岩	3.2	1.7	2.6	11.7	いわゆる緑色凝灰岩
316	Pit11	玉未製品	珪質凝灰岩	1.1	0.9	0.6	0.6	"
317	Pit13	玉未製品	珪質凝灰岩	1.8	0.6	0.6	1.5	"
318	Pit5	玉未製品	珪質凝灰岩	2.9	2.4	1.7	14.2	"
319	Pit12	玉未製品	珪質凝灰岩	2.8	1.2	2.3	9.7	"
320	Pit12	玉未製品 (研磨)	珪質凝灰岩	2.8	1.2	1	5.1	"
321	包含層5T-2区	玉剥片	珪質凝灰岩	1.7	0.4	0.3	0.3	"
322	包含層5T-2区	玉未製品 (研磨)	珪質凝灰岩	1.5	0.8	0.6	1.1	"
323	包含層5T-2区	玉未製品	珪質凝灰岩	1.7	0.9	0.6	1.4	"
324	包含層5T-2区	玉未製品	珪質凝灰岩	2.5	1.2	1	4.8	"
325	包含層5T-2区	玉未製品 (研磨)	珪質凝灰岩	2.7	1	1	4.8	"
326	包含層5T-2区	玉未製品	珪質凝灰岩	2.1	1.2	1	3	"
327	包含層5T-2区	玉未製品	珪質凝灰岩	1.8	0.8	2.1	3.2	"
328	包含層5T-2区	玉未製品	珪質凝灰岩	2.9	2.1	2.7	8.3	"
329	包含層5T-2区	玉未製品	珪質凝灰岩	3.8	2.1	1.6	12.7	"
330	包含層5T-2区	玉未製品	珪質凝灰岩	1.6	1.1	1	1.6	"
331	包含層5T-2区	玉未製品	珪質凝灰岩	4.2	3.6	2.8	28.8	"
332	包含層6T-1区	玉未製品	珪質凝灰岩	2.1	2.1	2.3	14.7	"
333	包含層6T-2区	玉未製品	珪質凝灰岩	2.4	1.1	0.8	2.4	"
334	不明	玉未製品	珪質凝灰岩	1.8	0.5	0.4	0.4	"

※ 287・288・292 は欠番 (石質は小島和夫氏に御教授いただいた)

第7章 考 察



第2節 木製櫛の変遷とその意義について

—野本遺跡出土櫛の理解のために—

木立雅朗

はじめに

櫛の考古学的な研究については、近年の代表的なものとして、弥生時代では木下尚子氏の研究〔木下1987〕、古墳時代では亀田博氏の研究〔亀田1985〕があげられる。木下氏は弥生時代の櫛が基本的に縄文時代の櫛と変わらないことを明らかにし、亀田氏は古墳時代の櫛がいわゆる「堅櫛」で占められ、6世紀後半～末頃にいわゆる「横櫛」と入れ替わることを明らかにしている。しかし、縄文時代から現在までの櫛の変遷をアツカッタ研究は、化粧や服飾の研究のなかで言及されることはアツタ〔久下1970〕・〔野間1966〕が、管見による限り、考古学的にはほとんど存在しない。

野本遺跡から出土した櫛は管見による限り全国で2例しか確認されていない数少ないタイプのものである。その特徴はU字状に折り曲げていること、樹皮（桜の皮状のもの）でラセン状にしばって束ねていること、漆による塗装がないことである。折り曲げる技法は古墳時代の「堅櫛」に類似するが、相違点も多い。この櫛の重要性を強調するためには、櫛の変遷について触れざるを得ない。ここでは櫛の歴史を概観し、その意義について考えて見たい。

(1)櫛の分類

櫛の作り方には大きくわけて次の4つがある。

- A. 棒状の歯を束ねるもの（籃胎櫛、もしくは束ね櫛）
- B. 板材から歯を削りだすもの（削り出し櫛）
- C. 棒状の歯を折り曲げて束ねるもの（折り曲げ櫛）
- D. 板材から歯を挽きだすもの（挽き櫛）

なお、BとDの違い、すなわち、削りだしと挽き出しの違いは、工具の違いからくるものである。Bでは彫刻刀的な簡単な道具しか使用していないのに対して、Dでは専用の櫛挽き鋸を使用していると推定される。部位の名称については基本的に〔亀田1985〕に従うことにする。

①A類（籃胎櫛〔中里1987・89〕、もしくはたばね櫛）

細い竹ヒゴ状の棒を糸で結び付けてたばね、その上から漆を塗った縦長の櫛。ムネ部に塑形材を塗り付けて肉付けするもの（Aa類）と、塗り付けないもの（Ab類）がある。

Aa類には、歯に横棒を当てて束ねるもの（Aa-1類）〔中里1987・1989〕・〔沢田1986〕と糸だけで束ねるもの（Aa-2類）〔岡田他 1992〕がある。

横棒を当てるAa-1類の作り方は次のように復原できる。細い竹ヒゴ状の棒を歯とし、その両面から歯に直交する横棒をあてて糸で結びつける。横棒は1～3箇所（計2～6本）程度あてられるが、箇所数や部位は必ずしも一定していない。そのようにしてたばねた部分を骨材とし、横棒部分に塑形材を塗り付けてムネ部を成形し、漆を塗って仕上げる。塑形材や漆を通して横棒や糸

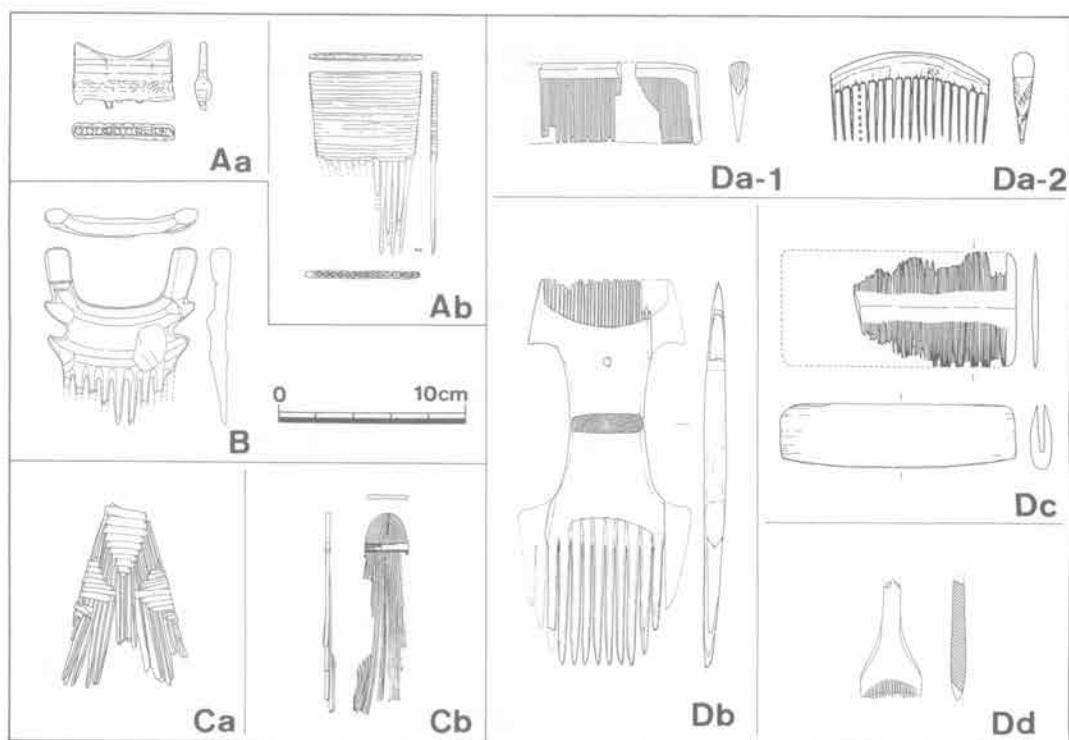


図1 木製櫛の分類 (S=1/4)

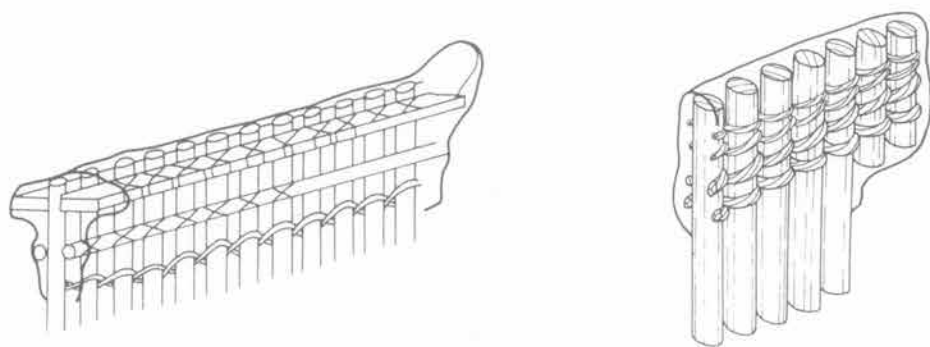


図2 Aa-1類 (左) [沢田1986] とAa-2類 (右) [岡田他1992] の構造

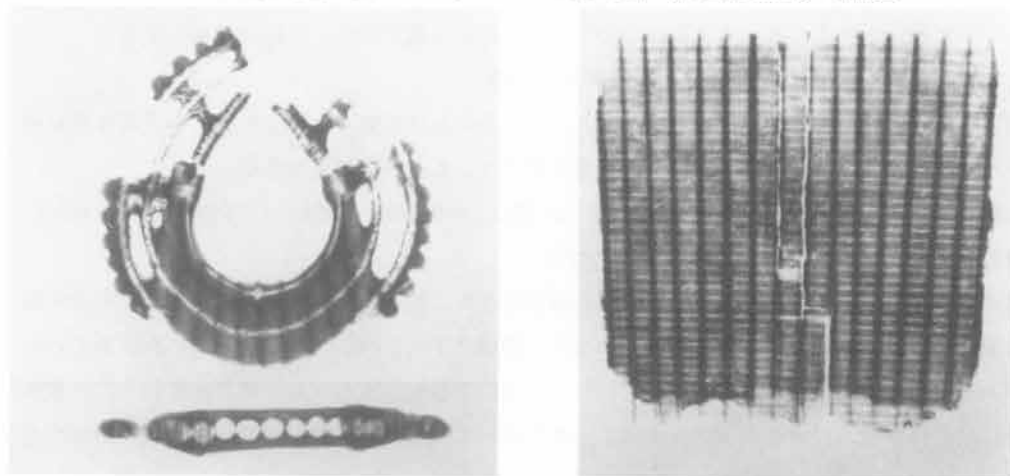


図3 Aa類リング状ムネ (右) とAb類ムネのX線写真
(鳥根県西川津遺跡。[内田1988])

の形が浮き上がって確認できる場合が多い。漆はほとんどが赤色であるが、黒色のものもある。歯は概して粗く、細かいものでも20本程度の本数である。成形の基本は共通しているが、ムネ部などの形態は様々であり定型化していない。基本的に直線的な部材で構成され、塑形材の肉付けによってムネ部分に曲線的な変化をつけている。

Ab類には横棒を使用するものはなく塑形材も塗り付けないため、構造的に弱いように思われる。しかし、糸で編み上げるようにして歯を結束し、その部分に漆を塗ることで補強している。あたかも装飾であるかのように糸が浮き上がっているものが多い。

Aa類は全国的に類例が多いが、Ab類は管見による限り島根県に集中している。

②B類（削り出し櫛）

板材から歯を削り出した縦長の櫛。ムネ部分には削り出した装飾が施される。A類よりもやや歯が粗く太いが、これは歯を削り出す道具に問題があるためであろう。ムネ部に漆を塗る例が多い。ムネ部が歯に比べて長いものをB-1類、ムネ部に比べて歯が著しく長いものをB-2類とする。装飾はさまざまで、個体によって多様性に富む点はA類と同様である。類例はA類に比べて少ない。

③C類（折り曲げ櫛）

1.Ca類

竹ヒゴ状の歯を樹皮でラセン状に縛りつけ、それをU字状に折り曲げ、両面から横棒をあてて樹皮で縛った縦長の櫛。頂部は曲げやすいように薄く削り出す例が確認される。ムネ部に対して歯が極めて短いことが特徴であり、他の形態のものとは大きく異なる。歯の太さや粗さはA類と類似する。類例は管見による限り、石川県野本遺跡、愛知県朝日遺跡〔宮腰1992〕の2例が知られるのみである。横棒のあるものをCa-1類、横棒のないものをCa-2類としておおくが、朝日遺跡の例は横棒が抜け落ちている可能性もある。

2.Cb類

一般に「堅櫛」と呼ばれている櫛。Ca類と同じくU字状に折り曲げた縦長の櫛であるが、ムネ部に黒色の漆をぬること、全長に対して歯が著しく長いことなど、結束の仕方に異なる点がある。歯は細く、ムネ部に比べて極めて長い。古墳に副葬された例を中心にして類例は極めて多い。

森川洋子氏はこうした櫛の作り方について次のように復原している〔森川1983〕。

「1 竹を細く割り10本そろえる。

2 中央を糸で縛り、それを中心に逆U字状に曲げて固定化する。（若干、外方へ拡がる弾力を残した加熱処理推察）

3 上端から1.5cmほどを残し、糸が重なり合わぬようにしながら巻き締める（約10回）。

4 巻き終わり部分に、細い芯材（木立注：横棒）をあてがう（表裏共に）。

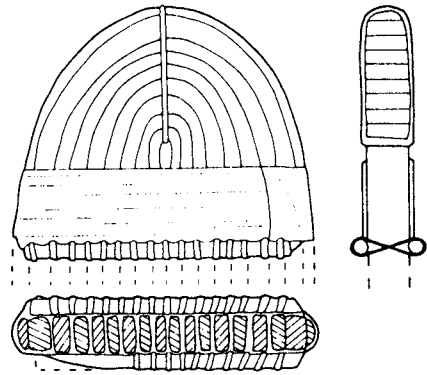


図4 C d 類の構造〔中井1983〕

5 芯を軸として、各歯間に糸を通してながらループ状に巻きつける。(針を使用したか?)

6 歯を切りそろえた後、塗漆。」

5の糸はそれぞれの歯間を通っていることから、歯間を一定間隔にあけるための細工であろうと推定している。

なお、中井一夫氏の実験〔中井1983〕によると1の作業は2～5の後でなければ困難である。亀田博氏によれば、1が最初であることはよいが、3と4の順序は逆である〔亀田1985〕。そうした点については意見が一致していない。また、亀田氏によると4の段階で糸だけでなく、樹皮状のもので縛る例もあると言う。その点ではCa類と類似する。

④D類(挽き出し櫛)

櫛挽き鋸で歯を挽きだしたもの。B類との違いは「挽く」ことと「削り出す」ことだが、歯の両側に挽き出し残した側面部(耳)があることもB類と異なる点として上げられる。この削り残し部分は薄い歯を保護する意味もあるだろうが、両側面を切り取らない限り、鋸で挽くためにどうしても削り残さざるを得ない部分が残る。

1.Da類(横櫛)

一般に「横櫛」と呼ばれている横長の櫛。

歯は表裏両面から材料に対して斜め方向に挽き出す。そのため、ムネ下面の断面形は逆三角形になる。古代ではこれをそのままにする例が大半である(Da-1類)が、中世のある段階からこれを挽き出して水平にするもの(Da-2類)が増える。近世になっても両者が併存するが、より良い製品のムネ下面は水平に削り出されている。

形態的には大まかに分けて、半円形のムネ、直線のムネ、円弧ムネ、「利休型」ムネがある。より細分が可能であるが将来の課題としたい。

2.Db類(縦長両刃櫛)

両刃の櫛で歯の密度が片方は細かく、もう片方は粗いもの。歯の密度が違うのは髪を解くことと、梳くことの両方を一つの櫛で行うためと思われる。このような形態の櫛では髪を止めたり飾ったりすることは不可能と思われる。おそらく、くしけずり専用の櫛であろう。

3.Dc類(横長両刃櫛、いわゆる「お六櫛」〔久下1970〕)

横長の両刃櫛で、ソケット状の持ち手が付く。やはり上下の歯の密度は違うが、Db類と異なり、両方とも細かく、効果の異なる梳き櫛であると推定される。

3.Dd類(縦長、装飾なし)

縦長でやや粗い歯が付く櫛。装飾がなく、Db・Dc類同様、髪止めや髪飾りには不適當である。髪を生え際を揃えるなど、使用方法がごく限定された櫛であったと推定される。

⑤X類

木製のムネ部分に溝を彫り、その溝に歯を差し込むもの。長崎県里田原遺跡で出土しているが類例が少なく実見していないため、今回は十分な位置づけができなかった。

⑥Y類

製作技法はD類に類似するが、やや縦長で歯が粗いもの。現在の陶芸用の櫛と形態や大きさな

どが酷似する（陶芸用櫛の材質はツゲであり、接合部に櫛目を付けて接合面積を増やし、接合力を強化する役割などを果たす）。これもX類と同じく類例が少なく十分な位置づけができなかった。

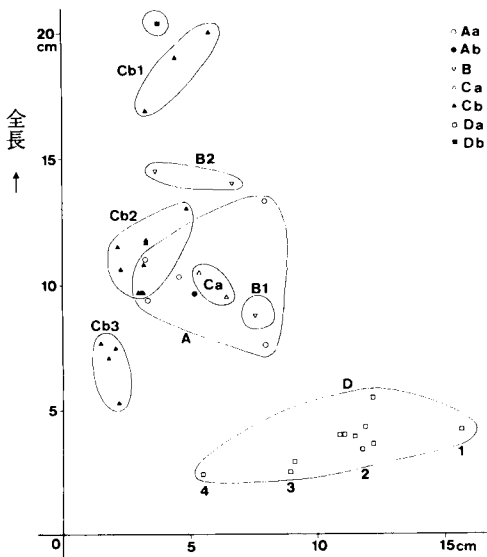
(2)櫛の形態と寸法

グラフ1・2に各類型ごとの櫛の寸法を示した。寸法は各報告書などから引用したが、資料によっては実測図から計測し直した例（特にムネの長さ）があり、報告数値とは若干ことなる例がある。なお、引用した文献は〔井藤1981〕、〔上野1953〕、〔内田1988・89〕、〔亀田1985〕、〔木下1987〕、〔楠木1986〕、〔斉藤1960〕、〔斉藤1967〕、〔中里1987〕、〔名大1989〕、〔奈文研1984〕、〔西野1989〕、〔橋本他1971〕、〔三宅他1990〕、〔宮腰1989〕、〔宮下1989〕、〔森川1989〕、〔山田1986〕、〔吉川1991〕、である。報告書だけでなく、論文に引用された図からも計測した。なお、D類については細分ができていないため、今回は〔奈文研1984〕に掲載された古代の櫛に限った。全国的な集成は成しえておらず、全体を把握したとは言えないが、大まかな傾向とはとらえられるだろう。

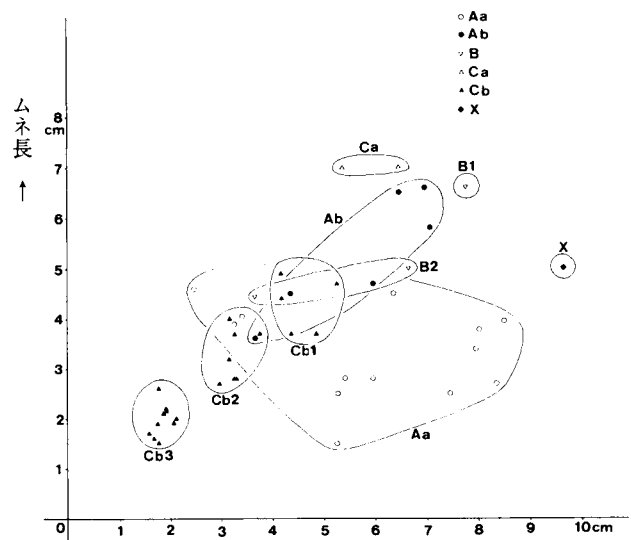
グラフ1は櫛の全長とムネ最大幅を示した。歯まで残る資料は全国的にも少なく、大まかな傾向しか分からないが、縦長の櫛（A～C類）と横長の櫛（D類）に大きく分かれている。また、各類型ごとに何らかのまとまりが指摘できる。

D類は幅を主体にして1～4類の4つに分化している。同じようにCb類は全長を主体にして1～3類の3つに分化している。3類としたものは最小のタイプである可能性も否定できないが、複数連結したタイプ（連結櫛）〔亀田1985〕である可能性が高いと考える。とすれば、Cb1類は大型、Cb2類は小型、Cb3類は連結型、もしくは極小型と分類できる。このようなサイズの分化は、櫛の用途や機能などの分化に伴ったものと推定される。

B類は歯がムネに比べて短いB1類（縄文時代）と歯がムネに比べて長いB2類（弥生時代）に分



→ムネ最大幅
グラフ1 櫛の全長とムネ最大幅



→ムネ最大幅
グラフ2 櫛のムネの長さ最大幅

けられる。時代が大きく離れており、別系譜のものと考えてよいだろう。B2類は僅か2点とはいえ、あきらかにA類より長い。弥生時代においてもA類のサイズは10cm前後であったと推定されるから、A類とB2類で機能分化していた可能性がある。B2類のほうが髪にさして止める効果が高かったであろう。

グラフ2では櫛のムネの長さやムネの最大幅を示した。ムネ部だけ残存する例が多いため、グラフ1に比べてより多くの資料を得られたが、D類は除外した。Aa類はムネが様々な形に裝飾されているため、サイズにまとまりがない。Cb類のサイズの分化はここでも確認できる。資料数が少なく一地域の資料に限定されるが、Ab類もやはり大型と小型に分化している可能性が高い（ただし、この場合歯の長さもそれにつらうか否か不明）。それに比べてAa類は規格性やサイズの分化をとらえにくい。地域を限れば分化している可能性があるかも知れないが、Cb類が地域を限っていないのに比べれば大きな差があると言わざるを得ない。Ca類とB1類、Ab類の大きなものはともにムネ部が大きい。グラフ1でもこの3者の形態とサイズはよく似ている。

(3)櫛の形態から見た用途

櫛の用途は、大まかには髪飾り、髪どめ、調髪（髪をとく・すく・整える）の3つであろう。髪飾りと髪どめについては機能を分けて考えることは難しい。そのため、髪飾り・髪どめと、調髪の2つの用途にわけて考えて見たい。

A・B類は基本的に歯が太く歯間も広いため、髪をとくことはできてもすくことはできない。基本的には髪飾り・髪どめが主たる機能であったと推定できる。

Ca類は歯が短くムネ部が長いため、髪をとめるには不都合であったと推定される。しかし、ムネ部の樹皮による結束は裝飾的である。Bb類とCb類は歯が長く、髪どめに適した形態であるが、持ちにくい調髪用としては不敵である。Cb類については図5のような出土例からも髪飾り・髪どめに用いられていたことが明らかである。

髪をすくことができるのはD類の一部であろう。D類だけがすべての機能を果たしえると推定される。ただし、調髪については「とく・すく」を同時にできるのはDb類とDc類だけである。その反面、この2つは髪飾り・髪どめには不適であり、調髪専用櫛であったと推定される。また、髪を整える機能はほとんどの櫛で可能であるが、Dd類はその専用形態と推定される。すなわち、D類は調髪のために機能分化しており、Db類とDc類が「とく・すく」機能を、Dd類が「整える」機能を分担していると考えられる。Da類は多くの機能を合わせもっているが、「利体型」は裝飾をほどこす例が多く、髪飾りを主目的にした櫛であるし、円弧ムネのものは歯が粗く、とき櫛と呼ばれるものが多い傾向にある。こうした例は中世以降に増加する傾向にあり、Dc類やDd類の出現に先行するが、ともにD類の機能分化の流れを示していると推定される。

以上のように、分類したほとんどの櫛は髪飾り・髪どめが主な用途であると推定される。D類だけが調髪機能も優れている。D類は奈良～江戸時代にかけて機能分化が進み、調髪専用の形態も加わる。

(4)櫛の変遷

①縄文時代の櫛

Aa類を主体とするが、B類も若干存在する。Aa類は真っ直ぐな棒状の部材を紐でしばって固定するもので、歯に直結する部材を曲げる技法は取られていない。Aa類もB類も外面は黒色や朱色の漆を塗っている。

なお、縄文時代には東北地域に鹿骨製の縦櫛も若干存在する。小山修三氏は土偶などの検討から、第3図のような服装の復原を行っている〔小山1990〕。これによれば男女とも髪を束ね、櫛や笄によって髪を飾っている。左側の女性はAa類の櫛を、右側の男性は鹿骨製の櫛を指している。



図5 縄文時代の髪型と櫛装着の復原例〔小山1990〕

②弥生時代の櫛

A類を主体としてB類も若干存在する。基本的には縄文時代と変化がないが〔木下1987〕、いくつかの発展が認められる。

B-2類の出現

類例は少ないが歯が極めて長いB-2類が出現する。B-1類に比べて髪に深く挿すことができ、髪を止める効果が高かったと推定される。縄文時代から弥生時代にかけての櫛では他にこうした形態は確認されない。むしろ、古墳時代のCb類につながる可能性がある。

リング状ムネの出現

島根県西川津遺跡ではリング状のムネ部を持つ例が報告されている。縄文時代にも透かし穴をもつAa類の櫛が存在したが、このようにリング状になる例は確認できない。そのX線写真によると(図4左)歯は直線的なものである。歯とは別の細い部材を曲げてムネ部の骨材を形作っているようである。三重県納所遺跡の例もムネ部がリング状になっており〔伊藤1980〕、これと類似する可能性があろう。骨材を曲げる技法はおそらく縄文時代には例がほとんどなかったと推定して

いる。縄文時代以来の籃胎櫛が発展し、構造に工夫が加わったことは確かであろう。

Ab類の出現とサイズの分化

Ab類は弥生時代になって出現した可能性が高い。鳥根県西川津遺跡周辺で数多く認められる〔村尾他1980・1982〕・〔内田1988・1989〕・〔三宅他1990〕。地域的にも時期的にも特異な存在となっている。重要なことは、これ以前はサイズにまとまりがなかったのに対して、Ab類は大・小に分化していた可能性が高い点である。管見による限り、サイズが分化した櫛は古墳時代のCb類と古代のDa類があり、それらへ受け継がれてゆくと考えたい。

Ca類の出現

Ab類の出現やリング状のムネを作るなど伝統を発展させる工夫が見られるなかで、中期後半には全く新しいタイプの折り曲げ櫛(Ca類)が出現する。歯そのものを曲げる技法はリング状のムネをもつAa類の発展形態とも考えられる。Ca類は桜の皮状のもので結束し、漆を塗らない。歯の太さは縄文時代以来の伝統的なものと共通しているが、漆を塗らない点は縄文時代のものとも古墳時代のものとも異なる。

③古墳時代の櫛

規格化されたCb類

規格化され、サイズが分化したCb類の折り曲げ櫛に画一化する。縄文・弥生時代のAa～Ca類までの多様性・地域色は失われ定型化している。

弥生時代との連続性

しかし、前述したように縦長であること、B-2類と形態が類似すること、折り曲げて横棒で止める技法をもつことなど、弥生時代の伝統をひいている。サイズの分化もすでに弥生時代のAb類からはじまっている。Cb類への画一化は前代の多様な系譜の統合と整理の上に成り立っている可能性があるだろう。



図6 埴輪から見た古墳時代女性の櫛装着例(1.埼玉県関口出土、2・3.群馬県観音山古墳出土)

(2・3のように正面からさす例が多く、1のようなものは例外的。2・3にはムネ部に円形の浮文があり、c b類に類似するが異なる可能性がある)

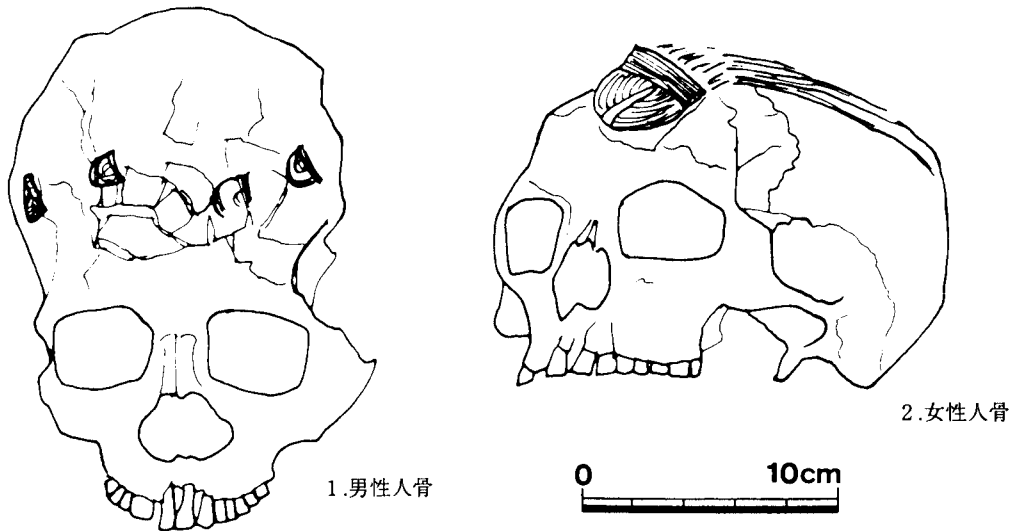


図7 古墳時代櫛C b類の装着例 (宮崎県上ノ原9号墳 [茂山1981])

ムネの部分は黒色の漆を塗っており、多くの場合、この漆膜のみが残存して検出されることが多い。縄文・弥生時代以来の櫛以上に細長い。それともなって全長に対して歯が占める割合も全体に高くなっており、髪に深く差し込むことができる。髪止め、髪飾りの機能が高くなっていると推定される。

亀田博氏によると男性用と女性用が分化している。女性用は大型のもので、男性用は小型の櫛を複数連結したものであると言う。図5のように櫛を装着した状態で出土した人骨がそれを明瞭に物語っている。亀田氏の集成と分析によれば、このタイプの櫛が古墳時代前期から6世紀前半まで確認され、6世紀後半の資料は確認されないと言う。

なお、古墳時代の櫛についてはその形状から「竹」製と考えられる場合が多い。数少ない樹種同定例 ([亀田1985] 紹介例や [山田1984] の3例、及び鈴木三男氏ご教授) をみると竹製品以外確認できない。縄文時代の櫛の中に竹・笹類を使用した例があるが、それだけで占められるわけではない。縄文時代以来、櫛に相応しい性格の樹種を選択しているとは言え、様々な樹種の木が使用されている。古墳時代になってはじめて特定の樹種に限定するようになったと考えられる。

④飛鳥時代以降の櫛

古代には縄文時代から古墳時代まで長く続いた縦長の形態はほとんど認められず、すべてDa類のいわゆる「横櫛」に変化する。Da類の樹種はイスノキかツゲに限られる。正倉院では象牙製の横櫛もある [野間1966] が、木製以外の櫛は古代においてはごく少数派であったと推定される。

亀田博氏によると横櫛の初見は千葉県金鈴塚古墳 (終末期の前方後円墳) である。時期は6世紀末頃で背は大きく円弧を描く。奈良県川原寺下層 (7世紀中葉頃) から出土する横櫛はそれ以後の櫛と形態が酷似しているが、金鈴塚の例はそれとは系譜が異なると指摘している。また、6世紀後半には櫛の出土例が少ないが、櫛が無かったとは考えられないことから、金鈴塚古墳以前に折り曲げ櫛から横櫛に入れ替わったと推定している [亀田1985]。亀田氏の推定に従えば6世

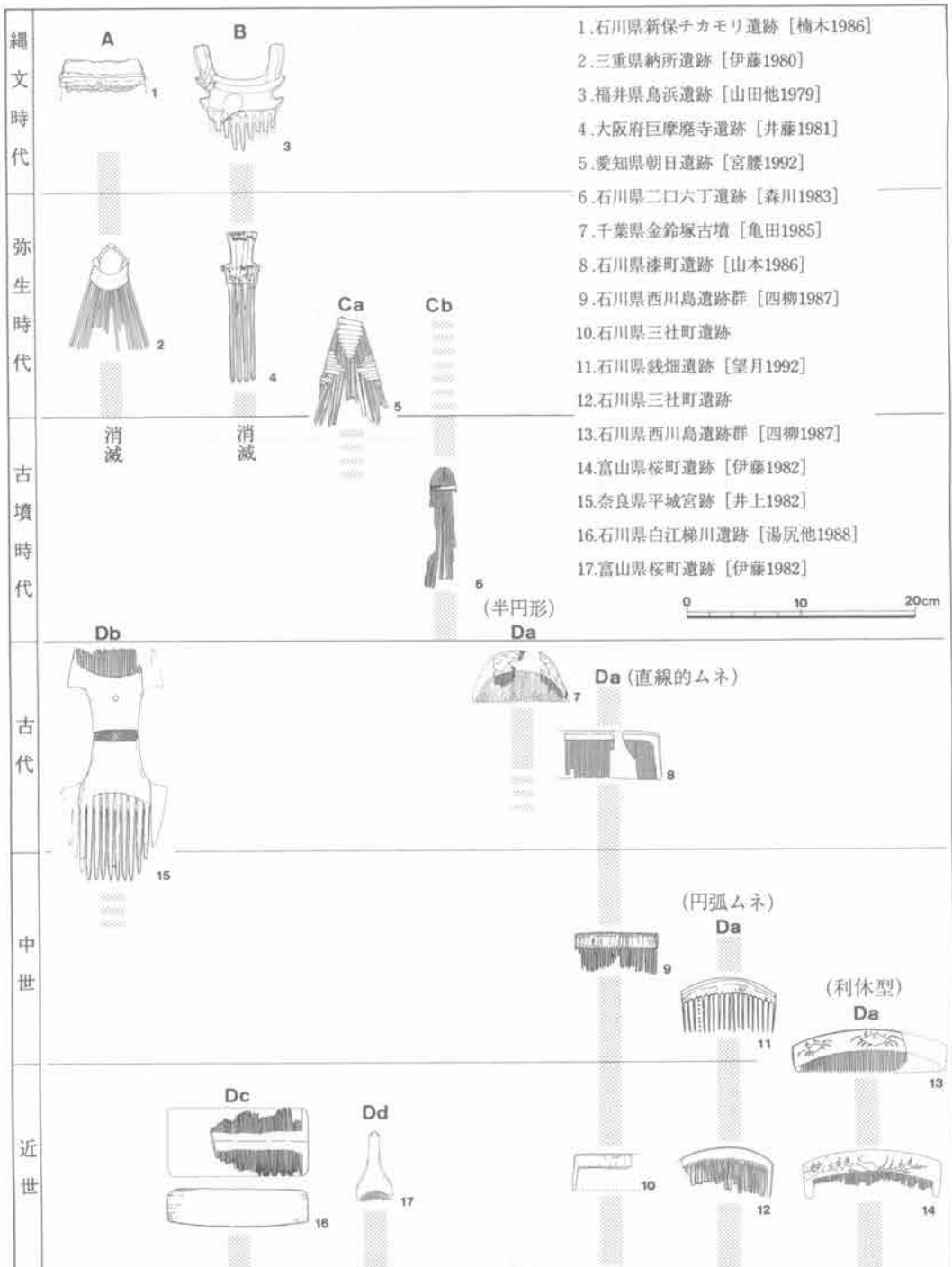


図8 木製櫛の変遷 (S=1/60 7のみS=1/3)

紀後半頃に横櫛に変化したことになるが、確認できるのは金鈴塚古墳以後であるため、ここでは取りあえず飛鳥時代以降としておく。6世紀後半～7世紀前半の資料が希薄であるため、Cb類からDa類への変化の具体像は今後の検討課題である。私見では推古朝の諸画期と軌を一にしていると考え、資料の増加を待ち望みたい。

横櫛は、飛鳥時代以降、とくに7世紀後半以降、急速に各地に広まり、奈良・平安時代では確実に一般的な形態になり、折り曲げ櫛は消滅している。D類への急速な変化は、「日本人」がアクセサリーを捨てた〔佐原1986〕変化と一致すると考えてよいだろう。しかし、櫛がアクセサリーとしての機能を完全に失ったとは、象牙の櫛の存在やDa類の形態やサイズの分化から考えにくい。

横櫛は時代毎に形態変化している。藤原宮から平城宮へと言う細かな時期差の変化も明らかにされているが〔菅原他1980〕、大まかに分けると次のようになる。当初はムネが半円形であったものが、直線的なものに主体を移し、中世のある段階で円弧を描くムネのものが加わり、中世末～近世初めには「利休型」と呼ばれる形態のものが加わるとともに、直線的なムネが激減する。なお、「利休型」にも様々な形態があり、円弧を描くムネのものも含まれるが〔野間1966〕、ここでは幅広いものだけを呼んでおきたい。

なお、飛鳥時代の横櫛出現後、奈良時代には髪をくしけずる専用櫛と推定される両刃の縦櫛（Db類）が出現し、近世にも両刃の横櫛でソケット状の持ち手まで伴う専用櫛（Dc類）や縦長の専用櫛（Dd類）が確認される。さらに、Da類でも中世の末には漆絵などを描いた、明らかに装飾機能が優先する櫛も増加し、それがさらに発展して近世には様々な形態の櫛が存在する。また、古代ではほとんどが歯の細かい「すき櫛」であったが、平安時代後半～鎌倉時代の頃には明らかなき櫛が一定量確認される。これらのことから、櫛の機能分化が進行していく様子が分かる。

また、近世にはベッコウ製や金属製などの櫛も存在する。縄文時代には鹿骨製の櫛、奈良・平安時代にも象牙の櫛などが存在するが、極めて少ない。近世に起こった材料の多様化は装飾機能を優先した結果であり、先述の漆塗りや漆絵を描いた櫛の増加と歩調をあわせていると推定される。



図9 浮世絵から見た江戸時代の櫛のさし方〔橋本・高橋1988〕からトレース

近世は「結髪史の黄金時代」と呼ばれるほど数多くの、そして日本独特の髪型を創造した〔橋本1988〕。様々な形態・材質の櫛が増加したのはそれを反映したためと考えられる。横櫛の変化のなかでもっとも大きなものは、中世末～近世初頭頃にかけて起こったと推定されるこうした変化であろう。

ところで、近世から現代に至る装飾的な櫛が基本的に女性用であることは間違いないだろう。古墳時代には男性用の櫛が存在したから、横櫛の出現以降に男性が装飾的な櫛を使用しなくなったと推定される。不勉強なため、その時期を特定する材料を持ち合わせていないが、横櫛そのものが女性用飾り櫛であった可能性が高い〔久下1970〕。

⑤明治維新以降の櫛と髪型

明治維新以後の櫛について考古資料から検討することは今のところ不可能であるし、その意味もないだろう。民俗学的な調査が必要であるが、不勉強なため果たせなかった。しかし、欧米の「進んだ」文化を移入することに維新政府が積極的であり、「ザンギリ頭を叩いてみれば文明開花の音がする」と言われたように男性の髪型は大きく変化した。その際、政府・地方自治体が直接係わり、政治的に変化を促している。天皇の断髪はその象徴と言えよう。女性の服装や髪型の欧米化は政治的に阻害されると言う極めて興味深い現象が起きるが〔井上勲1986〕、第2次世界大戦後にはほぼ欧米化する〔家永1982〕。少なくとも第2次世界大戦後には櫛にも変化が起こったはずである。現在私たちが日常使用している櫛はその延長上にある。なお、現在でも伝統的な横櫛が現存するが、ごく一部の限られた人々が使用しているだけか、みやげものにすぎない。

(4)櫛変遷の意義と野本遺跡出土櫛の意味

櫛の変遷の中で最も大きな変化は古墳時代のおわりと明治維新以後に起こったものであろう。それに次ぐ変化として古墳時代のはじめに起こった変化が上げられる。古墳時代の折り曲げ束ね櫛の出現によって、前代からの多様性に富んだ形態・構造がほぼ画一的なものに統一される。さらに、飛鳥時代には横櫛がとって変わる。

櫛と髪型と衣服

櫛は髪飾りや調髪道具のひとつに過ぎない。しかし、それゆえに髪型、ひいては衣服とともに変化し、その変遷は大まかではあろうが服飾の歴史をも示すと考える。

和服には和風の髪形で和風の髪飾りをもっとも相応しい、というのが現在でも一般的な見方であろう。初詣や成人式の女性の和服は華やかだが、クリスマスパーティーの和服には違和感がある。

このように現在でも服装には髪型を含めた総体としての調和があり、似つかわしい場所柄がある(例外は別にして)。櫛から服飾の全体を復元することは難しい。しかし、服飾全体のなかで調和した、服装と切り離すことのできないものとすれば、極めて重要な示標になる考える。

古墳時代の櫛と野本遺跡の櫛

野本遺跡の櫛は歯を折り曲げ、両面に横棒をあて、折り曲げられた歯を固定する点では古墳時代の櫛の祖形に成りうる。しかし、ムネ部に漆を塗らないこと、糸ではなく桜の皮で結束するこ

と、歯が太くムネに対して極めて短いこと、という違いが見られる。直接的に古墳時代につながるわけではないが、古墳時代の櫛と祖形に近い可能性がある。「親子」関係ではなく、「従兄弟」か「又従兄弟」の関係であろうか。おそらく、弥生時代中期後半以降、伝統的な形態とは違う何種類かの櫛が加わり、多様性に富んだ時期を迎えたのだろう。このころは古墳時代の櫛へと変化してゆく過渡的な段階であったと推定される。

弥生時代から古墳時代への櫛の発展

弥生時代中期後半以降に伝統的な櫛とは異なる系譜のものが作られはじめ、その中の一つが取捨選択され、古墳時代の服飾儀礼に取り入れられたと推定したい。野本遺跡や朝日遺跡の例から、古墳時代の櫛の祖形の一部は弥生時代に存在していたと推定される。その祖形が移入品であるのか、伝統の中から変化してきたのか、今後の課題であろう。しかし、横棒をあてて歯を固定する技法は縄文時代以来の技法であること、形態も縄文時代以来の縦長であることから、弥生時代と古墳時代の連続性が認められる。それに対して、飛鳥時代以降に移入された挽き櫛が横長であること、歯を結束せず挽き出すことなどから、古墳時代と飛鳥時代の櫛の断絶を認めることができる。古墳時代の櫛は縄文時代以来の伝統に立脚し、全くの移入品ではなかった可能性がある。このような櫛の流れから想像を逞しくすれば、これに伴う衣服制も同様に弥生時代の中から変化・発展してきたものと推定される。

奈良国立文化財研究所の1992年度木製品研修で朝鮮半島には弥生時代にすでに横櫛が存在していることを教えられた。不勉強なため半島の状況を理解していないが、その櫛が例外でないとするれば、列島との差は大きい。朝鮮半島とはさまざまな交流が続けられていたにも関わらず、日本列島は飛鳥時代になるまで横櫛の伝来を拒絶してきたことになる。それは櫛が単なる装飾品や化粧道具ではなく、社会に即応した服飾や衣服制にとって欠くことのできない付属品であったためであろう。そうした意味でも古墳時代の櫛の出現と消滅が持つ社会的意義は大きいと考える。

堅櫛から横櫛へー古墳時代櫛の断絶ー

飛鳥時代の前後には古墳時代の櫛はほぼ消滅し、横櫛に変化する。その変化は古墳時代の櫛が弥生時代の櫛を駆逐したのと同様に徹底したものであった可能性がある。長く導入を拒否してきた櫛をこの段階で導入したのは、「律令的国家体制」を整備するために必要であった冠位十二階の制をはじめとする政策の遂行に不可欠であったからであろう。また、遣隋使をはじめとする活発な国際交流を行う上で、東アジアに通用する衣服制の整備も急務であった。日本における変化は中国を中心とした東アジアの動向のなかでとらえる必要がある。ただし、横櫛が普遍化するのには7世紀後半以降であり、6世紀後半～7世紀前半にかけての櫛の動向については今後の課題である。

明治時代へ

また、飛鳥時代以降、形態や技法に変化はあるものの、明治維新まで櫛の基本形態はほとんど変化していない。中国を中心とした東アジアの序列のなかで、政治的には勿論、服飾をめぐる習慣や儀礼も他の時代に比べると比較的安定した時代であったと言えよう。しかし、その安定も欧米のアジア侵略と言う契機によって再び大転換している。中国を中心とした序列から欧米を中心

とした序列に身を置き換えた、あるいは置き換えざるを得なかったと言えよう。その変化は現代に至るまで漸移的に侵行し、現在では伝統的な衣服は非日常的な限られた場でしか見られなくなっている。明治維新以降、櫛がどのような変化を遂げたのか具体的に調べることはできなかったが、私たちが日々使用している櫛、あるいはブラシにとって変わっていったことは、容易に推定できる。

外来文化の導入と櫛の変化

櫛が外来文化とともに移入された飛鳥時代と明治時代の二つの画期は日本の歴史上でもまた大きな画期であった。遣隋使や遣唐使を派遣して中国の文化を積極的に取り入れた古代国家の姿と、欧米の文化を積極的に取り入れた明治維新政府の姿は奇妙なほどよく似ていると思うが、それは櫛の変化でも同じであった。

挿し櫛の使用者

ただし、奈良・平安時代の庶民が弥生時代と同じ貫頭衣を着ていたこと〔武田1984〕、明治維新後男性の洋服化や断髪化は早くに進行するが大半の婦人の服装や髪形が欧米化するの第二次世界対戦後〔家永1982〕であったことから、いずれの変化においても一般庶民の変化はかなり遅れることは確かである。ここで見た櫛の変遷は支配者階級の衣服、もしくは衣服制の変化に伴うものであろう。庶民が櫛を挿すようになるのは、機能や価格などが多様に分化する江戸時代以降ではないかと想定している。

また、古墳時代には男性も櫛をさしていたが、飛鳥時代（以降のある段階）から男性は飾り櫛をささなくなる。そのため、櫛の変化が示すものは女性の髪型や衣服の変化に限られるようになる。このことは現在においても変化がない。挿し櫛が女性のものに限定されてゆくのは、女性の社会的地位の低下とも関連する可能性が高いだろう。先に述べたように明治維新後、男性の髪型は早くに欧米化して社会の変化に即応したが、女性の欧米化は禁止され、その結果、社会の変化に一步遅れたことが女性の社会的地位の低さを良く表している。

なお、調髪や整髪に際しては男・女に限らず櫛を使用したであろう。しかし、ここでは男性の櫛の使用については分析する材料がなく、挿し櫛を中心に検討した。そうした点を含めて今後に残された課題は多い。

おわりに

櫛は服飾の一部の材料に過ぎない。しかし、極めて単純な材料であるがゆえに、その服飾と切り離すことができない重要な示標であると考えられる。そして、服飾はある意味で社会の方向性を反映する。ここでもっとも強調しておきたいことは、東アジアの一員として自己主張したのが飛鳥時代以降、「脱亜入欧」をかがげたのが明治維新以降であり、その大きな方向性を櫛は明瞭に表している。こうした「外圧」による断絶的な変化に比べ、古墳時代の初めの変化は弥生時代以来の伝統をまとめた継続的な変化である。その差は社会の方向性をも示唆しているのではないだろうか。

そして櫛は衣服を規定する各時代の制度の歴史をも反映すると考える。縄文・弥生時代の櫛は

鯨面分身する習慣と儀礼を表しているし、古墳時代の櫛は新らしく編成された前方後円墳体制の衣服制に、飛鳥時代以降の櫛は「冠位十二階の制」をはじめとする隋唐様式の衣服制に影響を受けて変化していると推定される。明治時代以降は欧米化した社会そのものを如実に示しており、現在に到っている。

野本遺跡の櫛からはじまり、論点があまりに飛躍してしまった。不勉強な点を省みずに駄文を連ねたのは、野本遺跡の櫛が喚起した問題点に興奮し、是非ともその意義を強調したかったからである。諸氏の御叱声を乞いたい。

最後になったが、鈴木三男氏、小林正史氏、本田秀生氏、川畑誠氏、柿田祐二氏から有益なご教授を受けた。また、越田純子氏、池村ひとみ氏、山本澄美子氏には文章についての助言を受け、越田氏からは櫛と同じように「枕」も変わったのではないかと言う興味深い指摘を受けた。記して感謝の意を表したい。

〔参考・引用文献〕

- 家永三郎 1982 『増補改定 日本人の洋服観の変遷』ドメス出版
- 石井寛治 1989 『大系 日本の歴史 第12巻 開国と維新』小学館
- 井藤咲子 1981 「堅櫛」『巨摩・瓜生堂』大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター
- 伊藤久嗣 1980 『納所遺跡—遺構と遺物—』三重県教育委員会
- 伊藤隆三 1982 「木製品」『富山県小矢部市 桜町遺跡（古苗代・鷺場地区）』小矢部市教育委員会
- 井上勲 1986 『文明開化』教育社
- 井上和人 1982 「木製品」『平城宮発掘調査報告 X 1』奈良国立文化財研究所
- 上野与一 1953 「石川県能美郡山上村下開発茶臼山古墳調査報告」『石川考古学研究会々誌』第5号
- 内田律雄編 1988 『西川津遺跡発掘調査報告書 IV（海崎地区2）』島根県土木部河川課・島根県教育委員会
- 内田律雄編 1989 『西川津遺跡発掘調査報告書 V（海崎地区3）』島根県土木部河川課・島根県教育委員会
- 岡田文男・成瀬正和・中川正人 1992 「松原内湖遺跡出土漆塗り木製品の材質と技法」『松原内湖遺跡発掘調査報告書Ⅱ—木製品—』滋賀県教育委員会・勸滋賀県文化財保護協会
- 亀田博 1985 「堅櫛」『末永先生米寿記念 献呈論文集 乾』末永先生米寿記念会
- 木下尚子 1987 「櫛と簪」『弥生時代の研究 第8巻 祭と墓と装い』雄山閣出版
- 久下司 1970 『ものと人間の文化史4 化粧』法政大学出版会
- 楠木正勝 1986 「木製品」『金沢市新保チカモリ遺跡 第4次発掘調査兼土器編』金沢市教育委員会・金沢市埋蔵文化財調査委員会・金沢市新保本町第一土地区画整理組合
- 小山修三 1990 『縄文探検』くもん出版
- 斉藤優編 1960 『越前福井市 足羽山の古墳』福井県郷土誌懇話会
- 斉藤優編 1967 『王山・長泉寺山古墳群』鯖江市教育委員会
- 佐原真 1986 「身を守る装いから見せびらかす装いへ」『日本古代史 第5巻 豊饗の大地』集英社
- 沢田正昭 1986 「塗彩土器の材質分析」『石川県能都町 真脇遺跡』能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団
- 茂山護 1981 「第9号地下式古墳」『宮崎県文化財調査報告書 第23集』宮崎県教育委員会
- 菅原正明・千田剛道 1980 「藤原宮内裏東外郭の調査 3 遺物 D木製品」『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』Ⅲ 奈良国立文化財研究所
- 鈴木三男・能城修一 1990 「高堂遺跡出土木製品の樹種」『小松市高堂遺跡』石川県立埋蔵文化財センター

- 武田佐知子 1984 『古代国家の形成と衣服制』吉川弘文館
- 中井一夫編 1983 『和爾・森本遺跡』奈良県立橿原考古学研究所
- 中里壽克 1987 「藍胎櫛類の技法」『史跡 寺地遺跡』新潟県青梅町
- 中里壽克 1989 「米泉遺跡出土陶胎漆器及藍胎漆器」『金沢市米泉遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
- 名古屋大学文学部考古学研究室 1989 『考古資料ソフテックス写真集』第4集
- 奈良国立文化財研究所 1984 『木器集成図録 近畿古代篇』
- 西野秀和 1989 「漆製品」『金沢市米泉遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
- 能城修一・鈴木三男 1989 「米泉遺跡出土木材の樹種」『金沢市米泉遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
- 野間清六 1966 『日本の美術』No.1 装身具 至文堂
- 橋本澄夫・高瀬澄 1971 『金沢市田中A・B遺跡』石川県教育委員会
- 松田隆嗣 1987 「西川島遺跡群から出土した木製品の樹種について」『西川島』穴水町教育委員会
- 三宅博士・柳浦俊一編 1990 『タテチョウ遺跡発掘調査報告書 Ⅲ』島根県土木部河川課・島根県教育委員会
- 宮腰健司編 1992 『朝日遺跡 Ⅲ』栃愛知県埋蔵文化財センター
- 宮下幸夫 1989 「後山無常堂古墳の調査」『後山無常堂古墳・後山明神3号墳発掘調査報告書』小松市教育委員会
- 森川洋子 1983 「装身具」『金沢市二口六丁遺跡』金沢市教育委員会・金沢市埋蔵文化財調査委員会・金沢市建設部駅西開発課
- 村尾秀信・石井悠 1980 『西川津遺跡発掘調査報告書 I』島根県教育委員会
- 村尾秀信・石井悠 1982 『西川津遺跡発掘調査報告書 II』島根県教育委員会
- 望月精司 1992 『銭畑遺跡 I』小松市教育委員会・南征建設運輸株式会社
- 山田昌久・森川昌和 1979 「木製品」『鳥浜貝塚－縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査1－』福井県教育委員会
- 山田昌久 1984 「古墳時代以降の漆器」『寿能泥炭層遺跡発掘調査報告書－人工遺物・総括編－』埼玉県教育委員会
- 山田芳和 1986 「土製品」『石川県能都町 真脇遺跡』能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団
- 湯尻修平・中島俊一編 1988 『白江梯川遺跡 I』石川県立埋蔵文化財センター
- 吉川國男 1991 「みみずく土偶の分布と前頭部の装飾について」『埼玉考古学論集－設立10周年記念論文集－』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 四柳嘉章編 1987 『西川島』穴水町教育委員会

第8章 おわりに

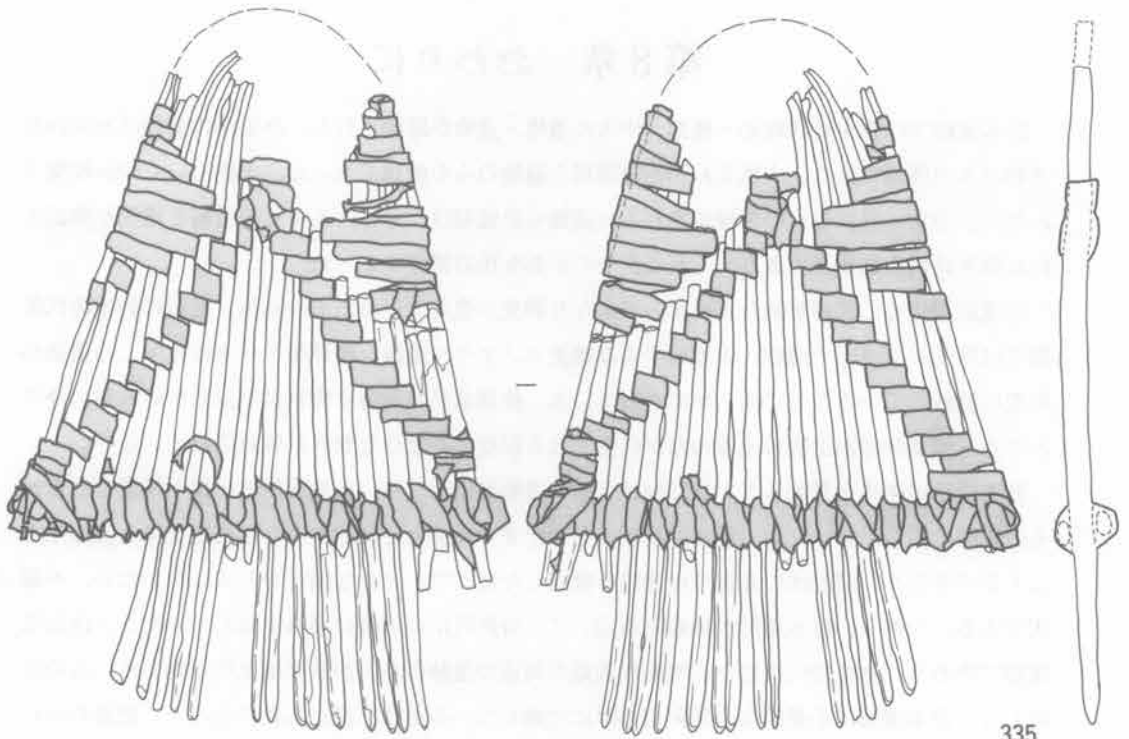
野本遺跡では弥生時代前期～後期、中世の遺構・遺物が確認された。弥生時代前期はわずかな遺物のみの確認であり、中世もわずかな遺構と遺物のみの確認であった。土錘もいくつか採集されたが、中世～近代のものだと推定される。遺跡の最盛期は、もっとも多くの遺構と遺物が確認された弥生時代中期後半であり、それに次ぐのが弥生後期後半であった。

当遺跡周辺も、圃場整備などによってかなり調査が進んでいる。その結果、近辺に弥生時代前期には徳光ジョウガチ遺跡、中期後半には徳光ヨノキヤマ遺跡、後期後半～末には多くの遺跡が周辺に拡散していることが明らかになっている。後期前半の遺跡や資料が不足しているが、今のところ、当遺跡SD24上層の土器のなかに含まれる程度で、十分な資料が確認されていない。

野本遺跡の中央を貫流していたSD24は大量の遺物が出土した。自然河川の一部と推定されるが、その流路は明らかではない。部分的な調査をつなぎ合わせると図62のような推定流路を復原することができるが、調査区の北側では流路を確認しただけで、十分な調査をしていないため、不確実である。しかし、野本遺跡が地形を活用して、自然河川の両側に集落を営んでいたことはほぼ確実であろう。弥生時代後期や古墳時代前期の周辺の遺跡の多くが微高地上に立地しているのに対して、野本遺跡は小規模な自然河川の畔に立地している点は注意が必要であろう。遺跡の中心は現在の交差点付近であった可能性があり、SD24と集落の分布の関係、野本遺跡全体の解明などについては今後の調査に期待したい。なお、図62では弥生中期後半と後期後半の遺跡をずらして示したが、7トレンチでも後期後半の遺構・土器が確認されているので、あくまで住居址を根拠



日本海側から見た野本遺跡とSD24推定流路



335

0 5 cm
S D24下層出土櫛 (原寸。網目は樹皮)

にしたものに過ぎない。

SD24から出土した良好な残りの土器をはじめとする資料は第7章第1節で分析されているように、重要な資料である。また、第2節で示したようにSD24下層から出土した櫛は全国でも類例の少ないもので、しかも櫛の歴史を知るうえで極めて重要な位置にある資料である。その他に玉作り関連の遺物が多く出土することなど、当遺跡の発掘調査によって極めて重要な遺跡であることが次々と判明したが、本報告書では十分にまとめることができなかった。深くお詫びしたい。

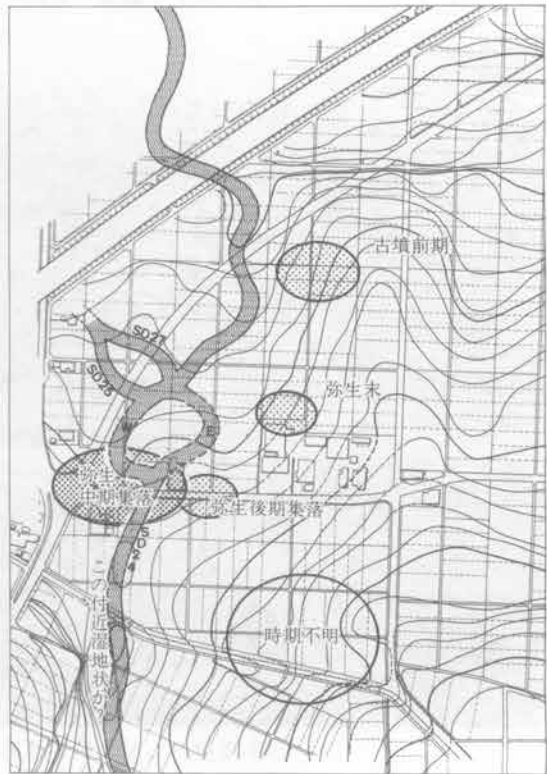


図62 微地形などから復原したSD24流路と遺跡



野本遺跡周辺航空写真（1993年撮影）



2 トレンチ遺構検出風景（手前はSD7）



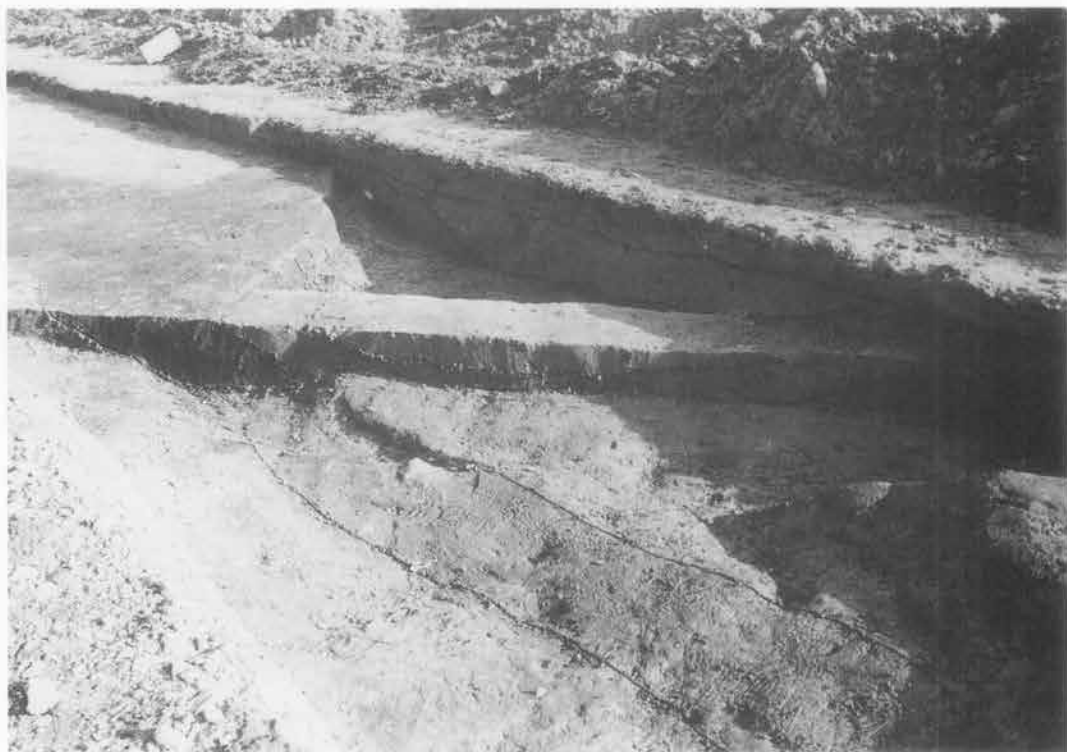
SD17（東南より）



SD19・SK9 (南から)



SK9 断面 (南から)



SD10 (SD12を切っている。南東から)



SD10・11・12, SX 1 (西から)



2 トレンチ完掘状況（東から。手前はSK 3、SD 9）



2 トレンチ完掘状況（西から。手前はSK 4、SD18）



3 トレンチ表土掘削状況（東から）



2～3 トレンチ完掘状況（北東から）



SX02 (東から)



SX03 (北から)



3 トレンチ東側～2 トレンチ完掘状況（西から）



SK 5、SK 6 完掘状況



SK 6 土器出土状況 (真上から)



SD18' (北から)



SK23土器出土状況（東から）



SK23土器出土状況（北から）



SD24発掘作業風景（東から）



SD24完掘状況（北側は一部完掘していない。東北東から）



SD24層櫛発掘作業（東から）



SD24下層櫛出土状況



S D20高杯出土状況



6 トレンチ発掘作業風景



7 トレンチ完掘状況（北東から）



7 トレンチ完掘状況（南西から）



S X 5 完掘状況（北から）



S X 5 完掘状況（南から）



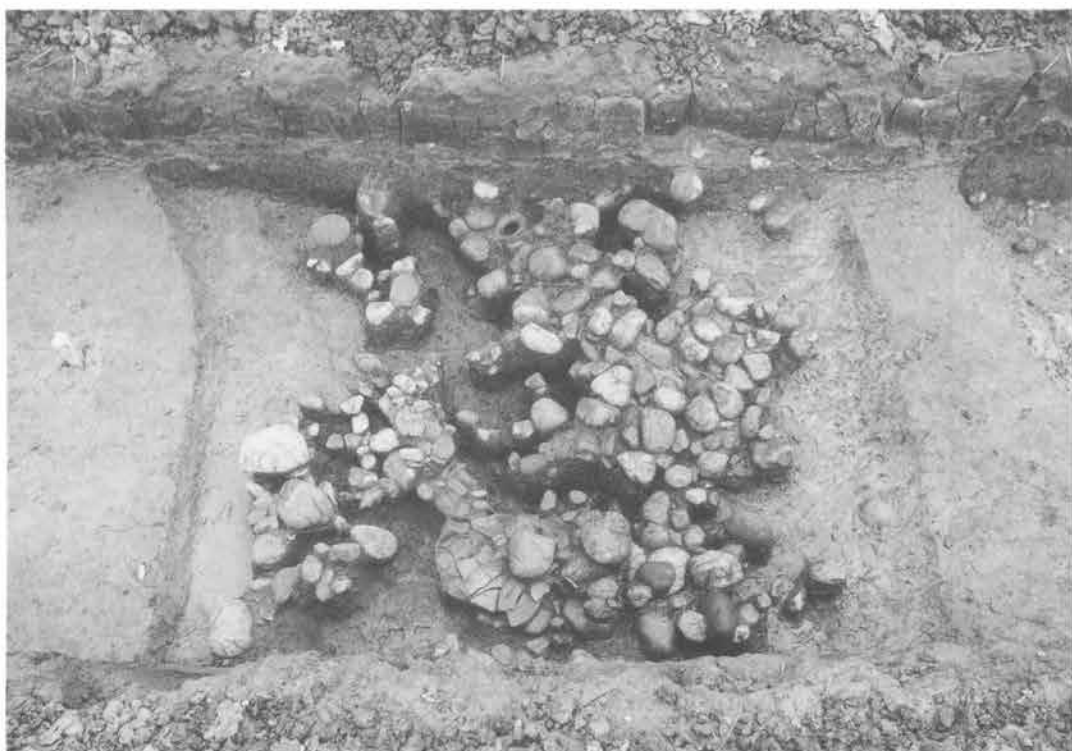
SK13 (西から)



SK12 (北から)



SK17土器出土状況（南から）



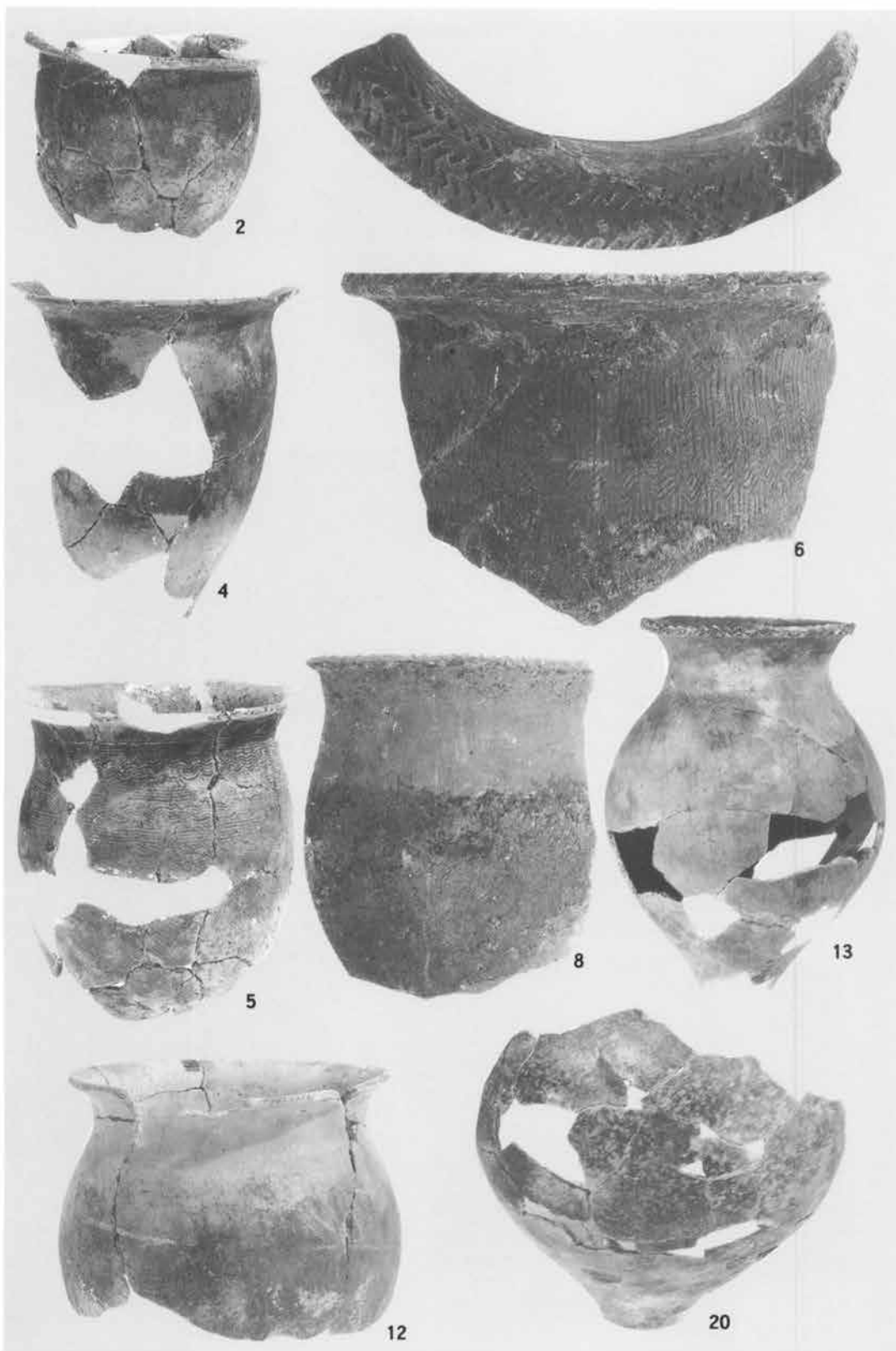
SD23土器等出土状況（北西から）

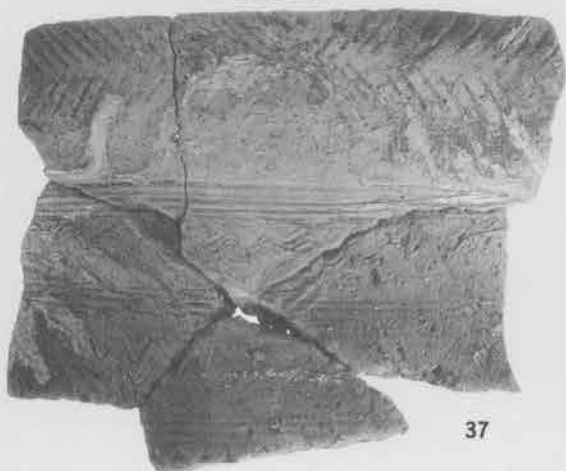


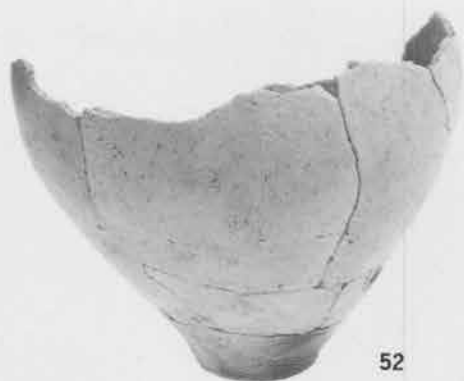
S K19土器等出土状況（南西から）



集石土坑（真上から）









142



164



170



169



175



167



238



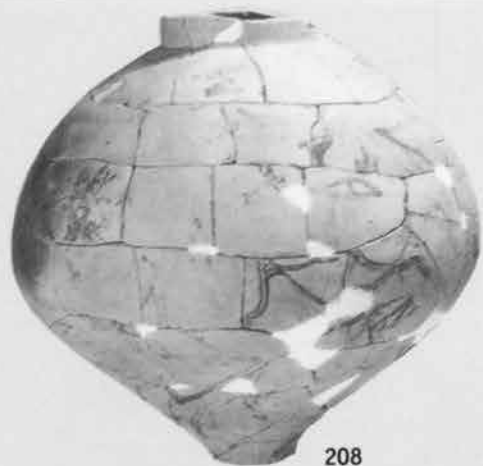
171



212



231



208



213



254



83



262



263

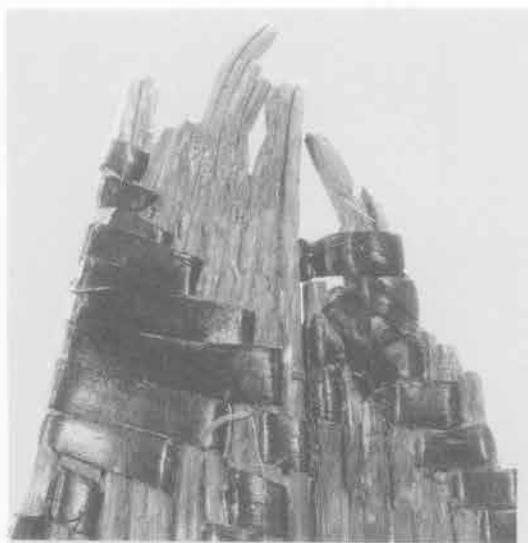
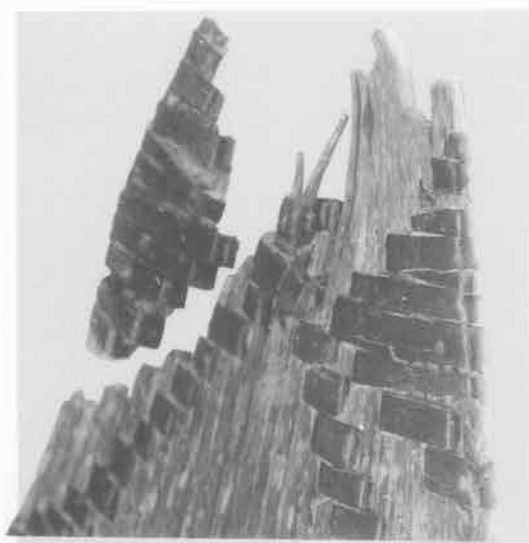
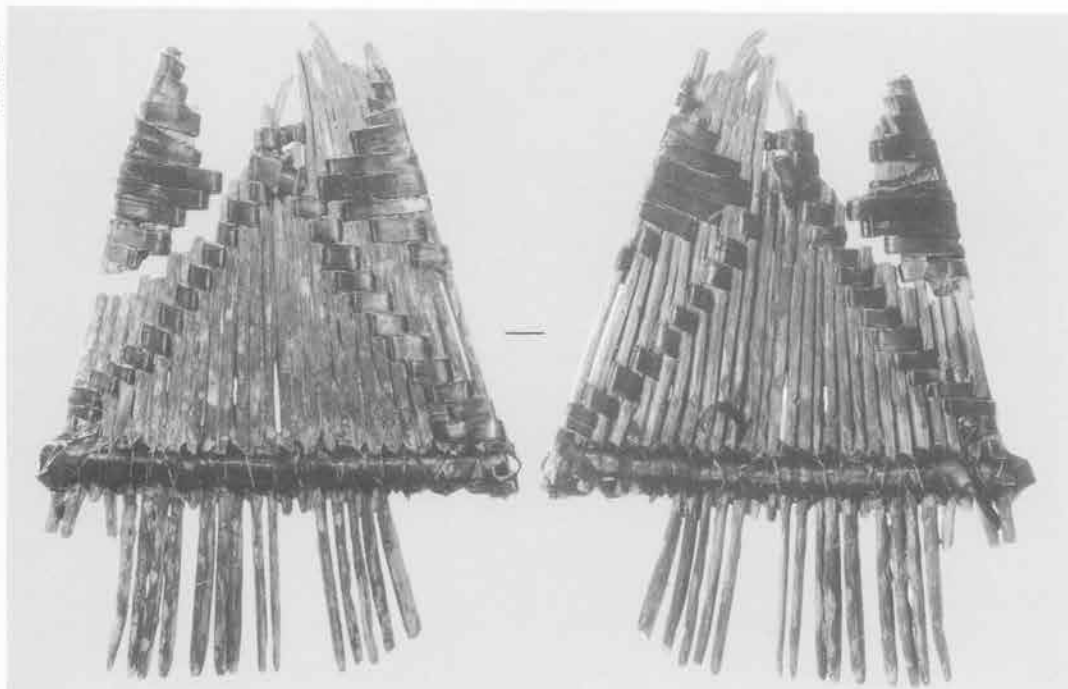


264



266





SD24出土櫛（原寸）とその細部拡大写真



267



268



269



270



273



275



279



282



281



283



284



286



290



291



293



294



295



296



297



298



299



300



301



304



305



303



306



302



307



308



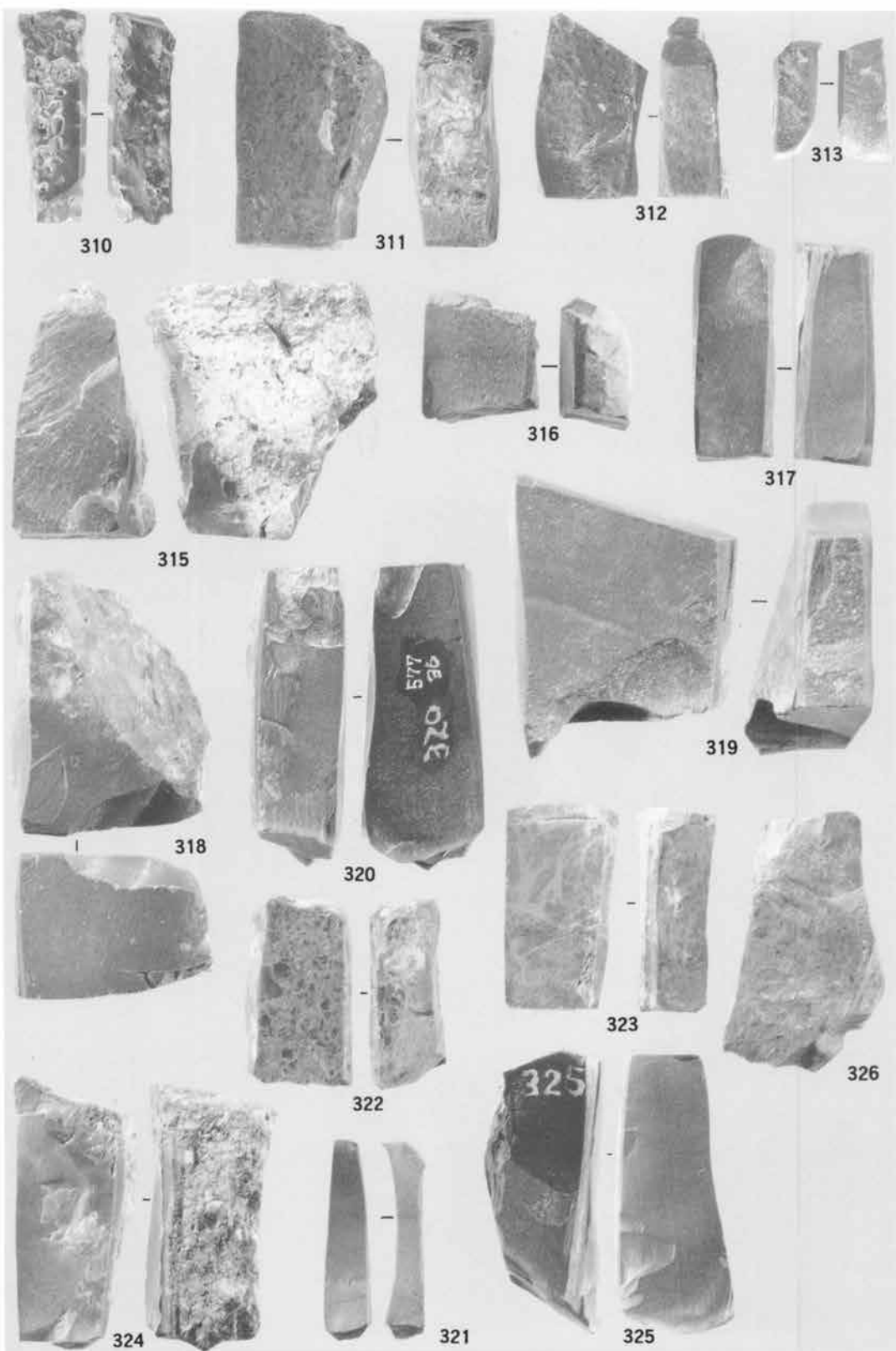
309



272



314



310

311

312

313

315

316

317

318

320

319

324

322

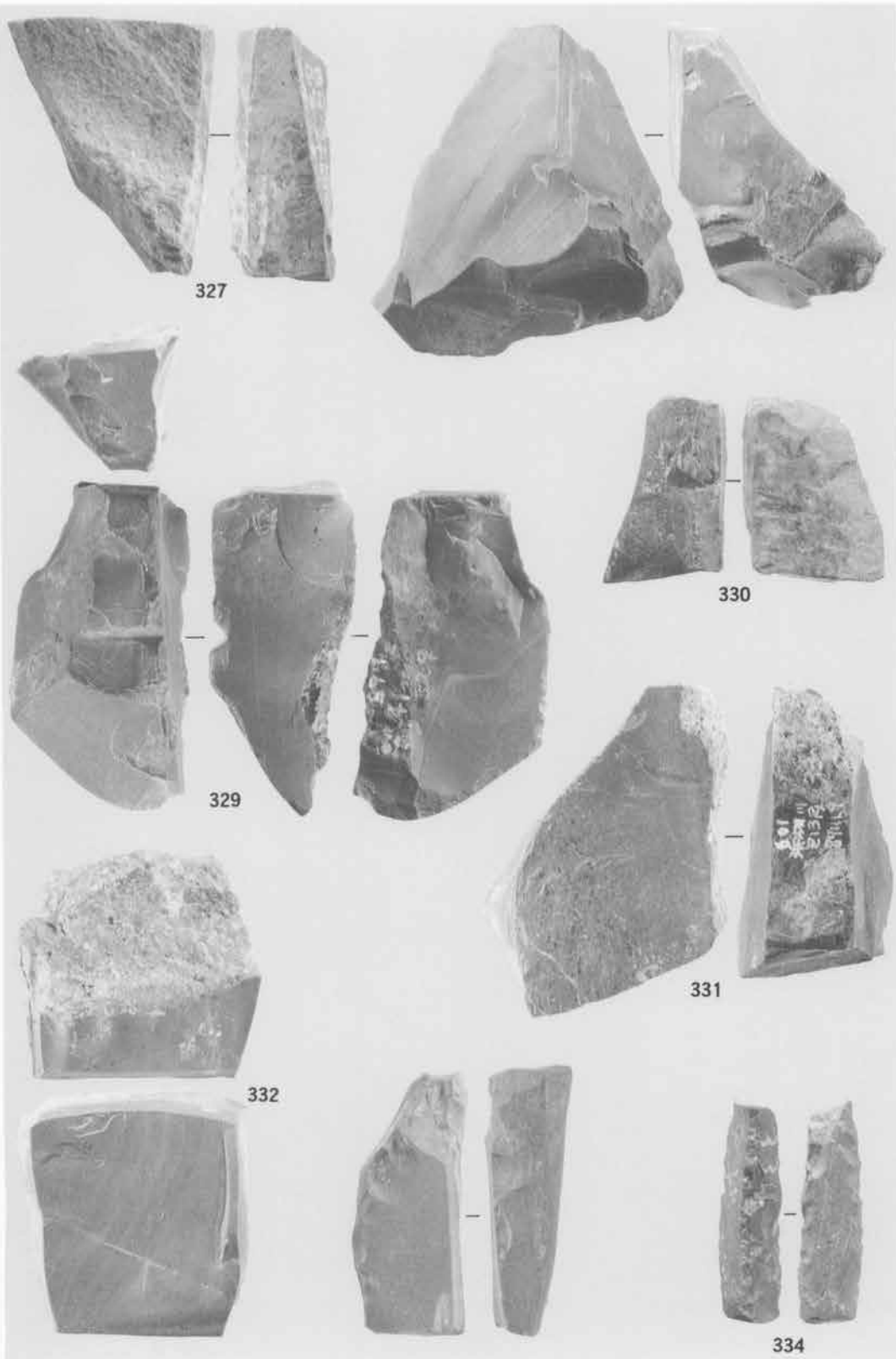
321

323

326

325

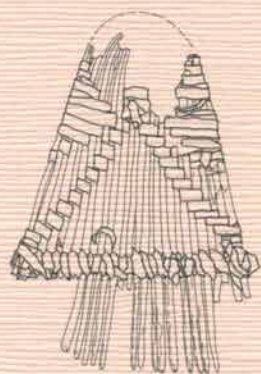
325



野 本 遺 跡

県営圃場整備事業御手洗・出城地区浜相
川工区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

発 行 日 1993年 3 月31日
編 集 ・ 発 行 石川県立埋蔵文化財センター
〒921 石川県金沢市米泉 4 丁目133番地
電 話 (0762)43-7692
印 刷 北國書籍印刷株式会社



(S D24下層出土櫛)